碧月の雫（ノクターン） [乾クエ3]

群青 坊哉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
碧月の雫（ノクターン）［乾クエ３］

【Ｎコード】
Ｎ７７６８Ｄ

【作者名】
群青　坊哉

【あらすじ】
前回の事件から３週間が経過し、リチウム達の日常は少しずつ変化していた。リチウムの相棒の天才小学生リタル・ヤードの過去が暴かれた時、謎は綻びを見せ、事態は急展開する――魔石を巡る異色ファンタジー第３弾。

＊（前書き）

<i6547—1052<

＊

――弱い自分が大嫌いだった。
泣いている自分は、死ぬ程恥ずかしかった。
だから、精一杯
見ないふりをしていた――

身の引き締まるような――どこか清浄な冷気。
カーテンの隙間から遠慮がちに差し込んだ朝の微光が照らす室内で一人。少女は鏡台の前に腰を下ろし、目の前に映る姿を直視している。
腰まで伸びた鮮やかな黄緑色の髪。漏れる外気が齎す凛としたアトモスフィアにも負けぬ光を灯したエメラルドの瞳。それは、いつか自分が欲しがった、欲しくて欲しくてたまらなかったものだ。
こうして今も。あの柔らかな身体を求めて、自分は彼女の後を追いかけている。
届かない背に、手を伸ばして。
もう　ずっと。

――そうしている内に、いつしか自分は二人いた。
強い自分は、いつしか一人歩きをして、弱い自分を憎んで、出さないようにした。
ふとしたはずみで、弱い自分が出てきても、
こんな「自分」は許さない。
こんなものは、「自分」ではない。

認めない。

あたしはいつも、強気。
どんなことがあったって、元気に乗り越えられる。
その力を、あたしは持っている。
あたしは特別。
だから、誰の助けも借りないし、なんでも、完璧にこなしてみせる。
誰にも負けない。
誰にも劣らない。

そうして、いつしか、あたしは、二つに分かれていた。
「理想」は「あたし」となり、「現実」を捨て置いた――

髪を頭の上で二つに結い上げる。
ひんやりとした空気に身震いしながらも素早く私服に着替えると、最後に彼女は二つのグローブを手に取った。
左手のグローブには『転位』のエメラルドの魔石が。
そして、もう片方の手には……、

「……今日も。平気」

抑揚の無い瞳で見つめる。
右手につけた黄緑色の輝きに、ボソッと一言呟くと――顔を上げた少女のそれは、既に快活な光を纏っていた。
少女は扉を開けて、颯爽と廊下を歩いてゆく。

少女の姿を傍視してきた室内は、その後姿を見送った後、ゆっく

りと。
その口を、閉ざした。

――どうか、触らないで。
気づかないで。
放っておいて。
気づかせないで。

いつか、遠くに葬り去ったはずの「現実」は、どんなことをしたって決して、消失させる事なんて出来ないのだという事に――

1

澄み切った晴天。
寒空の下で、カキーンと小気味よい音が辺りの建物に反響する。
が、場内では歓声一つ、上がる事はなかった。
誰もが例外なく口をあんぐり開けて、目玉を引ん剥いていたりする。

（クリーンヒット……！）

バットをスイングさせた、他称「病弱な秀才美少女」は確かな手ごたえに不敵な笑みを浮かべた。
対し、周りの人間はただただ唖然とした表情を浮かべては、少女とボールの行方に、交互に視線を巡らせている。
特に、小学生にしてはなかなかの速球を放つと評判の、ボサボサ頭のピッチャーのそれは一見の価値ありだ。
「大人しい秀才少女」が相手だろうと彼は容赦はしなかった。
それが厳しい勝負の世界ってもんだ。ごめんよ。つか、こんなオレに惚れるなよ。カワイコチャン。
心の中で――それこそ少女が聞けば問答無用で天高くかっ飛ばされる事間違いなしの――セリフを吐いた後、大きく振りかぶって自慢のストレートを放つ。
直後彼はすぐさまバッターボックスに寄った。万一ボールがバットに当たった時――まぐれという現象が起きた場合にすぐに対処する為だ。……そう。まぐれが起こる事まで想定していた粗雑な造りの顔の割りに慎重派な彼は、残念ながら現在広がるこの光景を予測出来る程、想像力までは逞しくなかったようだ。

「……ウソダ……」

ピッチャーの表情の崩れは群を抜いて凄まじく、原型を留めぬ程の歪みっぷりで、茫然と少女の大きな碧眼を見つめている。
少女がかっ飛ばした白球は遥か遠い空の青へと溶けてゆき――緩やかな弧を描いて、グラウンドの柵の外に広がる芝生に落下した。
「闘魂」と書かれた銀のバットをその場に放ると、頭の上で二つに編んだ黄緑色の毛束を揺らしながら、少女は静まり返ったグラウンドをのんびり廻ってゆく。
少女の名はリタル・ヤード。
その瞬間、誰もが彼女に意識を奪われていた。

最終回に当たる六回裏。一点差でリタルが所属するレッドチームは負けていた。
最後の攻撃――逆転のチャンスは下位打線に託された。
しかし、市の野球部に所属している速球で有名なピッチャーの球（ストレート）を打ち返す力量を具えた者は下位打線には存在しない。大方の予想通りレッドチームは2アウト三塁と追い詰められてしまう。
半ば絶望的な場面で、全身に力の入った最終打者がみんなの期待を薄い双肩に乗せてバッターボックスに立った。
ここで、チームにとって予期せぬ出来事が起こる。
案の定ストライク2まで追い詰められてしまった最終打者……八番が、なんと怪我を負ってしまったのだ。
怪我といっても空振りの挙句転倒してしまい、落としたメガネを自身で踏んづけてレンズに皹が入った……という位で、身体に異常はない。
それでも八番――多量の髪のおかげで頭だけが異様にデカく、ひょろひょろした体型。天使と見紛う程薄い色素。ド近眼で有名な――リタル曰く「もやしマン」にとっては致命的とも言える「負傷」であった。
もやしマンはバッターボックスに座り込んでしまい「もう出来な

い」と号泣。困ったレッドチームの監督――ナカG氏が周りを見渡すも、こんな大事な場面で交代しようとする猛者は控え選手には居なかった。誰もが俯いて指名から逃れようとナカG氏から視線を逸らす始末である。

困り果てたナカG氏は、唯一自分と目を合わせた小柄な生徒――病弱でこれまで一度たりとも球技大会……は愚か、体育の授業ですらろくに参加していなかった秀才と名高い女生徒、リタル・ヤードを打者に指名した。

リタルは今回、何故か「今年は身体の調子が非常にいいんです」などと告げると、なんと自ら進んで代表メンバーに志願していた。

かといって実力の解らない……大凡球技とは縁遠そうな小柄な「病弱少女」を、チームは代表メンバーに入れる訳にはいかなかった。それでも本人たっての希望で、リタルはこれまでずっとベンチを温め続けていたのである。

ナカG氏の声に一言返事で了承したリタルは、持参してきた銀のバットを両手に持つと静々とバッターボックスに移動した。

声援を送りながらもその頼りなさげな細背に誰もが絶望していた。なんせ、後、彼女の空振り一回で、チームの敗北が決まってしまうのだ。

反対に相手チームからは割れんばかりの声援が、守りを固めている選手に投げられていた。

――それがどうだ。

だぼだぼの真新しい体操服。ぶかぶかの赤帽子で小さな顔が半分程覆い隠されてしまっている。

それでも健気に「むんっ」とかわいらしく意気込んで、見るからに重そうなバットを持ち構えたリタルは、キャッチャーがミットを構えた――その目前。誰もが息を呑む程綺麗なスイングで、その場に居た総ての人間の予想を振り払うかのように、向かってきた初球

を豪快に打ち払った。
逆転ホームランだ。
一瞬……いや、二、三瞬遅れて、諦めモードが一転。赤帽子を被った総ての生徒――レッドチームから大歓声が迸った。
割れんばかりの大歓声の中を、三塁ベースを踏みゆっくりとホームに向かって走るリタルはあくまでマイペースだった。

グノーシス市の中心にあるアイオン教会は、世界的に有名な大教会である。
グノーシス自体、プリムスという島国の中央に位置する都市だ。北に位置する大陸アルバから見ると、島の真ん中に教会の尖塔が幾つも突き出ていて、まるで島そのものが一つの教会であるような印象を受ける。
設立十八年とまだ新しく、真っ白で繊細な造りの美しい建造物はまるで城並みの存在感を得ていた。
教会の敷地内には他にも、教会に設置するように世界法（フロース）で義務付けられている学習施設――アイオン学園が建てられている。初等部と高等部それぞれに校舎が設けられ、それぞれ寮も完備。孤児院も併設されているというから、文句の付け所もないマンモス教会だ。
当然、グノーシスの観光案内にも載っている。
創始者はとんでもなく破天荒な性格で、他所から来たお金持ちだったと言う噂がある。
が、あくまで耳にするのは噂だけで、その実体は不明。写真は愚かその名すらも謎で、教会案内にすら欠片も記されていない。
一説によれば、創始者といっても金銭を工面し創設に関わった位で、協会長の座などは総て知り合いに譲ってしまった……とかなんとか。

さてアイオン教会と言えば、たったの十八年という歳月で大教会の地位に伸し上がった……という事実だけでも有名な教会だが、アイオン学園だけに関してもそれは例外ではない。初等部は一学年から六学年、高等部は七学年から九学年。エスカレーター式に進級する事が出来て、施設も充実している。他国からはるばる入学試験を受けに入国する者の姿もそう珍しくないのが現状である。

しかし、従来の学園がそうある通り、アイオン学園はグノーシスの学習施設だ。

おかげで外部からの入園者の偏差値は天まで届く程高く、鬼ほど狭き門を潜り抜けて入った猛者（しゅうさい）とまで謳われ、必然的に学園内ではちょっとした英雄扱い。一目置かれる存在となる。かくゆうリタル・ヤードもその一人だ。

学園に関する事といえばまず制服であるが。アイオン学園の制服は言ってしまえば僧服に近い。堅苦しいというか慎ましいというか。ゆったりとした上等な生地に質素なデザインを施している。

しかし制服着用が義務付けられているのは公式の場と、毎週日曜日の朝に教会で行われるミサに参加する時のみで、基本的に生徒は私服登校が許されている。

ちなみに神父（たんにん）やシスターも僧服のようなデザインの上着（男性用と女性用とそれぞれ二種類ある）を羽織れば下は何を着ても良いとされている。

アイオン学園卒で現在シスター見習いであるグレープ・コンセプトも規則に則って菫色の薄手のコートを着用して毎朝通勤している……というか、彼女の場合は日常でもそれを着用している事が多い。学園指定のコートを気に入ってしまったようである。

これを初めとしてアイオン学園の規則は、他の学習施設のそれと比べると思わず「そんなんでいいの！？」と声を大にして問わずにはいられなくなる程に緩い。

その反面、数少ない規則を違反してしまった者への処置は重い……というよりも、酷いと聞く。
違反者は余程の理由が無い限りは大抵、問答無用で「島流し」――退学処分となってしまうそうだ。

そんな世界規模で有名なアイオン教会、学園、孤児院を統率する冬好きで有名な教会長曰く、「寒い時こそスポーツで身体を温めるのぢゃ」なんだそうで、この学園では毎年十二月の初めに球技大会が執り行われていた。
「教会長が冬好き」と言う話は生徒達の噂によるものだ。言われる所以は勿論、教会長が冬生まれだからとか、今回の球技大会の開催時期、それだけでは断じてない。遠足、体育祭、教会祭、修学旅行、マラソン大会、ｅｔｃ．……通常は、四季折々、年間にバランス良く鏤められているこれら学習施設の年間行事だが、このアイオン教会だけは例外で、それら総てが何故か冬に集中している。その理由が他ならぬ教会長の意向によるものだと言うのだから、噂は折り紙付きだと言えるだろう。アイオン学園新聞で幾度も取り上げられ、取材の為に新聞部の生徒が幾度も教会長室に訪れている。が、教会長は断固としてこれを否定。教会行事の冬季集中の理由についても口を閉ざしているらしい。そんなこんなで、しまいにはアイオン学園の七不思議のひとつとして挙げられるようになってしまった。

さて。本日はその寒中行事の一つ、球技大会である。
種目は毎年各クラスで出し合い、それを職員達が検討した結果で決まる。ちなみに去年はドッヂボール、一昨年はキックベースボールだったらしい。
競技は別々だが、勝敗は初等部と高等部の勝ち点を合計した総合点で決まる。クラス別に、赤組（レッド）、白組（ホワイト）、青組（ブルー）、黄組（イエロー）、桃組（ピンク）と定めた、五チームによる組対抗の代表選抜戦である。
ちなみに、低学年（主に一年から三年）の生徒や代表に選ばれな

かった生徒は、病気などを理由にした見学組の生徒と同様「補欠」と称され、所属チームの応援に廻る。なんでも応援点という加算があるようで、各チーム応援にも相当な熱が入っていた。異様に豪華なプラカードや、校舎の窓から下げられた賑やかな団旗、チアガールやその衣装、競技に出る生徒に持たせるお守りなどは彼等の功績だ。

ちなみにこの球技大会。勝利チームには毎年豪華な賞品が贈呈される。去年は『半年間掃除パスカード（勝利チームの担当区域は最下位チームが担当する）』、一昨年は『半年間毎週日曜のミサに参加しなくても良いよ券』等、いずれも劣らぬお宝ばかりで、だから生徒達はこの球技大会に命をかけている……とはいかないまでも、相当意気込んでいる事が想像に容易い。

例年球技大会は初等部よりも高等部の試合の方が長引く。初等部でレッドチームの優勝が確定したこの瞬間から、初等部校舎前のグラウンドから高等部の屋外バスケットボールの試合会場（グラウンド）へ、徐々に応援組の生徒達が雪崩れていた――

澄み切った青い空。急ぎ足で空を渡る白い雲。

見上げればそこには、吸い込まれそうな鮮やかなコントラストが広がっていた。

これで、地を賑わせているのが裸の木々達で、はしゃぎ回る落ち葉や、辺りを木枯らしなんかが吹きすさんでいなければ、今日は確かに絶好のスポーツ日和と言えそうだった。

保護者としてリタルの勇姿を見に来ていたトランは、仕事の合間を縫ってきたのか普段どおりの姿――古びたコートに着崩したスーツ姿で、フェンスに背をつけ腕組みしながら、轟く歓声に思いっきり表情を歪ませている少女を眺めていた。

二週間程前、バットの握り方をリタルに教える際、「めずらしい

ね。野球教えろだなんて」と問うた事を思い出す。
リタルは少し遠くを見て、
（すかっとしたかったのよね～）
と、なんでもない事のように答えた。
その時は言葉どおりに受け止め、気まぐれかと思っていたのだが……今思い返せば、遠くをぼうっと眺めるその瞳は少し影を帯びていたような気がする。

トランは視線を教員席へと移した。
蒼い髪を後ろで縛った少女が笑っている。華奢な身体はいつもの菫色のコートではなく、某スポーツブランドの白いダウンコートを羽織っていた。少女はリタルの教室の副担任（シスター）であるグレープ・コンセプト。リタルに向かって一生懸命に何事かを叫んでいた。
元気な様子を、ただ視界に入れ続ける。
――二週間前。

『……あのコは、天使でも、魔族でも……人間でも、ない。
どの特徴にも該当しない。
唯一、性質が似ているものがあるとすれば……。
グレープ・コンセプト。あのコは……、……しいていうなら……魔石に近い存在なんだと思う』

3号室――仕事部屋から漏れたリタル達の会話を、偶然ベランダに居た自分達は聞いてしまった。
直後、見下ろしたグレープの横顔は……思っていたよりも穏やかで。
触れる事、声をかける事すら躊躇ってしまう程に儚くて。

その内、自分を振り返った彼女は「もどりましょう」と、いつもの笑顔で促した。
何にも言ってやれなかった自分に、凍えた身体で微笑んでくれた。
けれど……丁度その頃から、だったと思う。
彼女は、異様に元気になった。

「リタルさんすごいです～！」

同時に、彼女に変化が起こる。
あらゆる石と相性が悪い為か、触れた石化製品を例外なく暴発、壊してしてしまう性質から「破壊魔」と称されていた彼女がなんと、石化製品を扱えるようになったのだ。
……まぁ勿論、全く暴走させる事が無くなったのかと訊かれれば、決してそういう訳ではない。
だが、暴走するのは決まって彼女の感情が高ぶっている時だけで、それ以外の状況では普通に石化製品を使えるようになった。
おかげで最近じゃ一人で大好きな家事をこなしている。キッチンから鼻歌が聞こえてきたり、笑顔を振りまきながら掃除をしたり。
怯える周囲の様子とは裏腹に最近の彼女はそれまでの大人しい印象がナリを潜めて、元気溌剌としていた。
……そんな風にも、視てとれた。

「グレープ先生、怪我をした生徒の手当てに手間取っていまして……救護テントの方お願いしてもいいですか？」
「あ、はいっ　すぐ行きます」

あんな風に、誰かに用件を頼まれる事も増えてきたという。
突然石化製品が扱えるようになった。これは、彼女にとって良い事なのだろう。
だが……疑問だけが残る。

それを、彼女が感じて不安になっていないとも限らない。
それに。
彼女が人間じゃないなんて本当に、そんな事があるのだろうか。
「……大丈夫ですか？」
沈んだ様子が無くても。
ああして、相手に対して微笑んでみせても。
それは、周りに心配をかけさせまいと無理をして作られた産物ではないのか。
だって以前の彼女ならば、その笑顔はまるで花が咲いたような、そんな鮮やかな印象を受けた。
今の彼女のそれは――栞に施された押し花のようだ。

「変化」といえば、自分達全員にも……彼女程ではないにしろ……起こっていた。
あの事件の後。自分達は、何も変わらないかのようで、その実。それぞれがどこか、変わっていた。

昼間は爆睡するだけだったリチウムは、３号室――仕事部屋に篭る事が多くなった。いつ寝ているのかわからない。ひょっとしたら３号室でそのまま寝入っているのかもしれないが。
クレープは単独での外出が増え、家に居ることが少なくなった。
リタルは、……リタルだけは、変わらないのかもしれない。
だってあの聡明な少女は、知っていたのだ。
知っていてそれなのに、あの小さな胸に秘めて……ずっと護っていた。
グレープを。
一味全員を。

自分も。変化が無いとは決して言えない。
例えば社会的地位。
もしかしたら最悪な結末を覚悟しておいた方がよいかもしれない、そう覚悟を決めて数日振りに出勤した自分を待っていたのは、とある辞令だった。

そして――リタルが自分に齎した衝撃がもう一つある。
先の事件で使用した銀筒の事だ。
リタルに訊いた所、先事件の際彼女から預かった銀の筒は『魔力の流れを止める石』で作られたもう一つの……試作品だったそうだ。
あの形状はまだ未完成な状態だったらしい。さらに実験を重ね改良を加えて、将来的にはグレープに与える家事道具の一つになっていたという。まぁ、彼女はあの通り石化製品を使えるようになったので、結局銀筒はお蔵行きとなったそうだが。
そんな訳で、普通の人間にとってあの銀筒は、先の事件のような特殊な状況下でなければ実用性が無い、ただのガラクタだとリタルは言い切った。
あの状況――街に『魔力の流れを止める』魔力が充満していた状態で銀筒を使用すると、街に漂う魔力を銀筒自身が放つ『魔力の流れを止める』魔力が相殺する。
自分があの状況下で銀筒を通し『炎帝』を発動させる事が出来たのはそういう理由だ……なんていう、なんだかよくわからない答えが返ってきて目を瞬かせた。
なら、上空から落下した自分達を助けたのはこれじゃないのか、と問う自分を見上げてリタルは「違う」と凛とした声で告げた。
銀筒は、周辺に漂う他魔力を相殺する事以外脳が無い。そうきっぱりと言い切ったのだった――
……では。
あれは、一体、なんだったというのだろう。

「……トラン、さん？」

と。

視界――それも目前にいきなりルビーの双眼が現れたからたまらない。

「うわ！！」

我ながら情けない声を上げて大きく仰け反ってしまった。

だってこんなの……不意打ちではないか。

「す、すみません。驚かせるつもりはなかったのですが……」

慌てて頭を下げるグレープ。

肩よりも少し伸びた髪を後ろで一つに纏めているのは相変わらずであったが、今はだぼだぼのロングダウンコートにニットジャージを着ている。

普段とはまるで違う雰囲気の少女が「心配」を全開にした面持ちでこちらの様子を窺っていた。

「――あ。あぁ……こっちこそごめん。ちょっと考え事してたから……」

女の子というものはどうしてこう、着る物で変わるんだろう。彼女の新鮮な姿――その可愛らしさに圧倒されつつ、彼女から「心配」を取り除こうと必死で言葉を紡ぐ。

『考え事』の言葉にピクリと小さく反応したグレープ。違和感を抱くよりも早く彼女は柔らかく微笑んだ。

「今日はリタルさんの応援ですか？」

「……ああ。少し心配になってさ。大丈夫かなって様子見に来た。幾らリタルが器用だからって、教えたの俺だし。リタルが活躍できなかったらなんか申し訳ない」
「トランさんの教え方。とても丁寧で解りやすかったですよ？」

不思議そうに自分を見上げると、グレープが小首を傾げる。
その仕種が愛らしくて、視線を彼女から外しながらしどろもどろ答えた。

「べっ、別に普通だよ。そんなに時間取れなかったし……それに教え方ならシスターやってるグレープちゃんの方が……」
「そ、そんなことありません。シスターって言ってもわたしの場合ただの見習いですから……っ」

今度はグレープが慌てる番だった。コートの袖から指先だけを覗かせた両手を胸の前で懸命に振る。
思い返せば、二人で会話をすれば何故か二人してシドロモドロの言い合いになってしまう……そんな場面が少なくない。
今や自分よりも慌てている彼女の様子に完全に毒気を抜かれて微笑しながら、視点をグラウンドへ移動させる。

「ま。今回はリタルの器用さと運動神経に救われたってとこかな」

ただっ広いグラウンドの隅では、ようやくホームベースを踏んだ黄緑色の髪の少女が仲間に揉みくちゃにされる場面が展開されていた。
自分の視線を追ってそちらを見遣ったグレープ。

「リタルさん……大活躍ですね」
「あぁ」

「トランさんも嬉しそうです」
「え？」
視線を戻すと、グレープが自分を見上げて穏やかに笑んでいた。
暖かな微笑みは、見る者総てを癒す。
が、同時に、少しギクっとした。
「誰にも知られてはいけない事」を悟られてしまったのではないだろうか。
「グレープちゃん……」
が、彼女は他意を滲ませることなく、ニコっと無邪気に笑った。
「今日は祝勝会ですねっ」
「……あ……」
「晩御飯、期待して待っていてくださいね。リタルさんがチームの打ち上げに出てる間に早めに帰らせてもらって、すぐに準備をはじめ……」
「――ごめん、グレープちゃん」
遮る沈んだ声にグレープが目を丸くした。
「いやその……今日、帰れそうにないんだ」
思わず顔を背けてしまった。
何も今日ばかりではない。最近は雑務処理に追われて……このところホームに居る時間の方が少なかった。早朝に出て、帰宅は深夜。仕事を家に持ち込むこともある。その間にホームに居る人間と顔を合わせても挨拶程度しか言葉を交わさない。
こうしてリタルの元気な姿を眺める事も、グレープと面と向かっ

て話をするのも至極久しぶりの事だ。
察した少女はおずおずと口を開く。
「お仕事、ですか？」
「……うん」
一瞬の……なんとも言えぬ気まずい沈黙の後。
「あ、えと。気にしないでください、大丈夫です。今クレープさんも……連絡がとれなくて。ですから……はい。今度みなさんが揃った時に祝勝会をしましょう……っ　リタルさんもきっと、その方が、喜んでくださいますよ」
いつもと変わらない笑顔でグレープが見上げる。
だが、それは聊か不自然な、作り顔である事が見て取れた。
知り合ってからずっと。彼女の笑顔を見てきたのだ。気づくなという方が無理な話であった。
そんな笑顔をさせてしまう事への申し訳なさと不甲斐無さと。苛む負の感情をなんとか押し殺して自分も彼女に笑ってみせた。
「……ありがとう」
「え」
「いつも。笑顔で居てくれて」
「……」
キョトンとした顔でグレープが自身を見た。
が、それっきり。何も言えぬままグレープを見つめる。
両者の間に訪れた穏やかな沈黙。
周囲の声が、騒音が、やけに遠く聞こえた。

「……グレープ、」

意を決して口を開きかけたその時。不意に北方から強烈な冷気が襲った。

一陣の風に彼女の華奢な身体が押された。支えるように側に立つ。仄かに漂う甘い香り。……このまま、彼女の細背を抱き寄せる事は容易に出来た。激しい衝動にも襲われた。が。下げている両手をぐっと握り締めて、自分はそれを、しなかった。

寒そうに縮こまる彼女を見つめて口を開く。白い息が漏れる。

「……雪が、降るかも」

「本当ですか」

嬉々とした彼女の表情。自分を見上げて、次にグレープは空を仰いだ。

空は生憎の晴天だった。だが確かに空の隅――低い位置にドス黒い厚雲が敷き詰められている。

「雪が降ったら、雪だるまを作りたいです」

白い息を吐きながらグレープが空に呟いた。

「一人では寂しいでしょうから二人作って。マンションの入り口のところに飾るのです」

自分も空を仰ぐ。

広がる澄んだ青。しかし流れる雲は皆行き急いでいた。……そんなに急いで一体どこへ行くというのだろう。

「そうだね。作れるといい。……みんなで」

自分の言葉に、一瞬遅れて、落ち着いた鈴声が返って来た。

「……はい」

想像した光景。齎した自分の言葉を大事に包み込むように、大切に。短い言葉に願いを込めるような、そんな呟きだった。

グレープが職員に呼ばれて駆けて行く。
おかげでトランはついに言いそびれてしまった。
グレープの背を見送りながら溜息を零すのと同時に、トランのコートの内ポケットで何かが振動した。

「――はい」

携帯から漏れる上司の声に顔色一つ変えずに、トランは短い会話を終えるとその場を離れた。
最後に、もう一度、振り返る。
普段以上に元気な素振りで動く、グレープ・コンセプトの笑顔が……どこか儚げに映った。

「……雪、か」

呟いて、グレープの頭上に視線を移す。
幾らでも降ればいい。
他の色が差し込む隙間も無い程、一面を銀で染め上げればいい。
そう思った。
これから先。代わりに、彼女の笑顔を守ってくれるというならば。

幾らでも。

そんな彼の様子を上空から――高い木の枝に腰をかけた金髪の少女、クレープが眺めていた。

彼女は今や、グレープの体に入れなくなってしまっていた。

高等部の試合も終了し、球技大会はリタルのチームが優勝した。

閉会式をを見届けてから、クレープはその場を飛び去った。

2

本日貸切！と赤文字で書かれた小さな看板が、チェーン店のドアノブの下で凶暴な北風に吹かれ揺れていた。
店内は恐ろしい程賑わっていた。地声が小さい者のそれは、注意深く聞き取ろうとしても何を喋っているのか解らない程だ。何せ広いはずの店内は、１学年４０名×９クラス分の子供達で埋め尽くされていたのである。
元気な子供相手に店員は総動員で奮闘していた。
肉が焼ける香ばしい香り。もうもうと上がる煙が天井に吸い込まれていく。

球技大会はレッドチームの勝利で幕を閉じた。
そして今年の優勝チームに贈られた豪華商品は「焼肉食べ放題券」。

よってこの光景が成立してしまう。

６学年の生徒達が占めるテーブル席では、勝利貢献者であるリタルが持て囃されていた。
開始直後は愛想笑いを浮かべそつなく対応していた彼女であるが、中央席に座らせられ、やれ肉を食え、やれスポーツをやっていた事があるのか、やれ是非野球部に、いやいやソフト部に、やれジュースをどうぞ……そんな調子で１時間半が経過した時、ついに小さな額で断裂音が炸裂した。それも１本どころの騒ぎではない。２，３本は同時にぶちきれた。
「気分が悪くなった」と不機嫌全開の表情を浮かべることでリタルは騒がしい店内を抜け出す事に難なく成功した。
途中、教員に当てられた座敷の前を通り過ぎると、視界の隅にグレープの姿が入った。チラリと振り返ると彼女は、普段どおり楽し

そうな笑顔を浮かべて場に溶け込んでいた――

彼女はかれこれ3週間前から、ずっとそんな感じ――まるで仮面を着けているかのように、笑顔のままだ。来る日も来る日も実に楽しげに笑っている。それは、あの鈍感なトランでさえ気づく程の至極解りやすい変化であった。

しかし。

笑顔を崩さなくなった彼女が、一度だけ自分に素の表情を曝した事があった。

あの事件が終わって幾日か過ぎた時の事だ。しかも、早朝。グレープが困り果てた表情でリタルの私室を尋ねた事があった。

時刻は朝の5時過ぎ。

書庫の分厚い本を何冊か私室に持ち込んでいたリタルは徹夜明けだった。サイドテーブルに置かれた高性能の目覚まし時計を視界に入れつつ、ドアの向こうでか細い鈴声を響かせる相手に半ばうんざりし、文句をたれながらも出迎えると――今度はリタルが目を見開く番だった。

「あんた……どしたの？　それ……」

エメラルドの瞳を限界まで見開き、部屋の前で立ち尽くす姿を凝視する。

果たして、自分を訪ねてきたのはグレープ・コンセプトであった。

だが、その姿はどうだろう。

可憐な造りの顔。華奢な肢体。それは普段となんら変わりない。ピンク色のキャラクター物の寝巻き（プリントされていたのは、クリオネを模った……確か「五郎」と名の付く妙なキャラクターだ）姿の彼女は薄い眉をへの字に変形させていた。

「……どうしたんでしょう……」

見上げるリタルの問いに対しふざけているともとれる答えを返した少女に、しかしリタルは反応しなかった。

あまりの事に、時計同様高性能さが自慢の頭の回転速度が追いついていないのか、彼女は目も口も丸く開けたままである。

グレープが困り果てている原因――その変化は、彼女の髪にあった。

――伸びてる。

それも尋常じゃない伸び方で。

昨夜、自室に篭る直前に視界に入れたグレープの髪は確かに肩にかかる程だった。

グレープは普段からその長さである。伸びるのが遅いのか、こまめに美容院に通っているのか。2年前――リタルがアイオン教会の学園に転入してきた頃から、クラスの副担任（シスター）であるグレープの髪型は変化した事がなかった。後ろで纏めて1つに縛っている。聞けば地味に感じられる髪形だが、放つ艶やかな蒼と整った細面を持つ彼女にとって、それは十分過ぎる程だった。ただでさえ目立つ彼女だ。地味な位が丁度良いのである。

……のだが。

グレープは目が覚めて直ぐに自分を訪ねてきたのか、普段はしばっている髪を下に下ろしたままであった。

垂らしている、という表現の方が合っているかもしれない。

なにせ前日まで肩にかかる位の長さであった彼女の髪は、今。どういう訳か、冷たい廊下の板張りに届くまでに伸びきっているのだ

から。

「……」

困り顔のグレープをとりあえず室内に入れたリタル。その眉間にはグレープ以上に皺が寄っている。

促され大量の蒼糸を踏まないようにしてベットに腰をかけるグレープ。彼女の赤い目を上から覗き込むとリタルは難しい顔のまま口を開いた。

「……一晩で、そうなったの？」

「……はい」

「……ヅラじゃなくて？」

「……はい」

「……」

すぐさま確認してみる。長さの割りに重たさを感じない、ふんわりした彼女の髪を無遠慮に掴んで少し引っ張ってみた。頭部に注目するが、ずれる気配は一向にない。

「……」

グレープの目の前に仁王立ちしたリタルは腕組みしてグレープの姿を上から下まで何度も凝視した。

その内、右手を丸くして口元に持っていく。

さらに難しい顔で、何事かを考えているようだった。

随分と長い沈黙の後。

「――ちょっと待ってなさい」

一言だけ言い残して、困り果てた少女を室内に残して出て行く。
向かった先は洗面所。必要な物をかき集めて抱え、大股で廊下を戻る。
かくして数分も経たずに帰って来たリタルは、両手に抱えていた戦利品をグレープの前に降ろす。ビニールシート数枚と大きなハサミ。それから鏡台へ向かうと、櫛とドライヤー、スプレー類を手にしてグレープを振り返った。

「……とにかく。そのまんまじゃ不便でしょ。
安心しなさい。あたし、手先は器用な方だから」

告げるや否や、準備に取り掛かるリタル。グレープは目を丸くしてテキパキとした動作を眺めているだけだった。
かくして、早朝５時２０分。
リタルによるカットがしめやかに執り行われた。

「……でもあんた。なんでこうなっちゃったのか、原因わかる？」

絹のような手触り。
長い蒼髪と格闘しながらハサミを構えたリタルが尋ねた。
彼女は髪を踏まないよう細心の注意を払いながらグレープの背後で膝立ちしている。
ビニールシートの上にぺたりと座り込んでいたグレープは、リタルの問いに対し頭を懸命に左右に振る。と同時に、リタルの顔面に大量の毛束が襲い掛かってきた。気づいていないのかわざとなのか、グレープはそれでも頭をぶんぶん振り続ける。予め寝癖直しに使用するスプレーで髪を濡らしていた為、直撃を受けた両頬が痒い痒い。
――いや、痛い。

「～動いちゃ駄目……っ」

堪らずリタルが声を上げればようやく事態を察したのか、謝罪の言葉と共にぴたっとその動きが止まった。
リタルの大きな溜息。再開したハサミの音に紛れて、聞き取れない程小さな小声を少女が漏らした。

「……今まで伸びたことなんてなかったのに……」

――シャキン。

「……は？」

間の抜けた声と共に、多量の蒼糸が彼女の首元に巻きつけられたビニールシートの坂を滑り落ちる。
耳に入ってきた不可思議な響きのソレにリタルは眉を潜めた。
辛うじて、自分の前で大きく下がった細い肩が吐いた――その言葉自体は拾う事が出来た。だが……何を言っているのかが解らない。

「今……なんて……？」

困惑の声色に、グレープは正面を向いたまま鈴声を返した。

「……髪。伸びた事、無かったんです……今まで」
「……」

返す言葉が出ない。
耳に入った言語を頭で処理するのに手一杯だった。
さらに、頭の中のあらゆる引き出しから飛び出した――最近独自で調べていた事柄が脳裏をぐるぐると駆け廻る。
訪れた沈黙に耐え切れなくなったか、細背が力なく笑った。

「おかしいですよね。……わたしも、そう思ってたんです。ずっと……」

「えへへ」と力なく笑う声に、リタルの思考の渦が堰き止められた。

「アイオンの孤児院に居た時から、ずっと。変だ変だ……って」

鈴声の主はやや俯き加減で言葉を続けた。

「……今でも多分、行われている事だとは思いますが……アイオンの孤児院では3ヶ月に一回、散髪会というものが設けられていたんですね。その日に子供全員の髪をシスターが切ってくれるのです。髪を切っている間、大人しくしていた良い子にはご褒美にお菓子がもらえるんです。

だからみんな、ご褒美が欲しくて静かに順番を待って切ってもらってました。ある方は楽しそうに。お菓子が欲しいあまりにはしゃいでしまって切り終えるのに時間がかかってしまった方もいました。ある方は怖がって、いっぱい泣いて。ある方は髪を切られるのを嫌がってその場から逃げ出したり隠れたりして……とても賑やかで。

……けれど、わたしは一度も、その列に並んだ事はなくて」

背を向けているため、その表情までは判らない。

その場に居なかった自分が、彼女の心中を察する事なんて出来る訳がない。……でも。

「なのに、お菓子(ごほうび)をもらってたんです」

その姿。

淡々とした口調。何故だろう、それは、とても。

「周りの子たちはずっと、変だ、おかしい、ずるいずるい……って言ってました。

シスターは何も言わなかったけど、だけど困った顔をしてて……」

「グレープ……」

「――わたしも。自分はずるいって、思ってました。

自分は、おかしい。変だって」

とても、痛々しい。

ハサミを動かす音だけが、室内に響く。

幾許かの沈黙が生じた後、

「……そりゃ、変でしょうよ」

勤めて冷静に、……いや、素っ気無く。リタルが声を上げた。

「人間なんて、変なトコが無きゃおかしいわよ」

「……え」

ハサミを動かす度に蒼糸がふわっと落ちる。

櫛でとかし、器用にハサミを操りながら。聞こえてきた戸惑いの小声に、わざとたっぷりの間を開けてリタルは答えてやる。

「変なトコが一つも無い人間なんてね。それこそ変……ってか、人間じゃないわよ」

「……」

「あんたなんてね。自覚は無いかもしんないけど、見かけと中身は完璧に整ってるんだから。指折り数える位は変なトコがなきゃ」

「……」
「不公平よ」
不満げに言い放てば、沈黙したままのグレープの……頼りなさげな細い背に、リタルはフッと笑みを浮かべた。
「……ほんっと。つくづく、あんたって。
……バカよね」
口調とは裏腹に、その笑みはとても穏やかで、
どこか、いとおしさを滲ませたものだ。
「大体。それを言うなら、あたしの髪だって変なのよ？」
「……？」
「ちょっと待ってて」
言い終えぬ内に立ち上がる。
その場で衣服についた蒼髪を払ってから、左奥に設置された白い棚まで足を進める。
並んでいる分厚い専門書の背表紙。一番端にある背の高い――緑色の表紙の本を手に取ると、切りかけの髪を垂らしたグレープの前に腰を下ろした。
「ほら。見てごらんなさい」
彼女がグレープの前で広げたもの……それはアルバムだった。
表紙を捲って一番最初のページに、今となんら変わらぬ姿の銀髪の青年――リチウム・フォルツェンドが格好付けたポーズを決めて写っている写真があった。
……その横に。幼い女の子が居る。

その女の子の持つ、垂れ気味の大きな瞳と長い髪は――黒。
女の子は呆れ顔で横のリチウムを見ている。

「……これ、は」
「あたしよ」

グレープの問いに、リタルは素っ気無く言い放つ。

「……え？」
「このおバカ男の横にいる、賢そうな顔した子でしょ？　あたし以外に誰が居るっつうのよ」

戸惑うグレープに、表情を和らげてリタルは付け加えた。

「あたしね。元は黒なの。
髪も、目も」
「……染めて、」
「違う。
自然にこうなったのよ。
でも、原因も解ってる」

と、リタルはポケットからグローブを取り出して見せた。
グレープは僅かに身体を揺らす。

「……そう。
この色は多分、コレを多用してるからね」
「……禁術封石」

リタルが手にしているのは黄緑色の石――『魔眼』であった。
心配げな顔つきになるグレープに、リタルはカラカラと笑ってみ

せる。

「大丈夫よ。魔人化なんてしない。
っていうか、この変化は多分『魔人化』とは違うと思うんだ。
そりゃあ、幾ら属性が合っていたって禁術封石を使い続ければ、いつかは石の魔力に身体を乗っ取られて……魔人化する事だってあると思う。魔人化の予兆で、髪や目、皮膚の色なんかも石のそれに変化するって話も聞いた事がある。あたしのこれが、そうでないなんて１００％の保証はない。
……けどね。
あたしはきっと……他の人達よりかは耐性なんてモノがあるんだと思う」
「耐性……？」
「……こっちの話。とにかくね？」

『魔眼』を再びポケットに捻じ込んで、改めてリタルはグレープを直視した。
ルビーのような瞳は、今では不安で陰っている。

「人間なんて、生まれも育ちも、それぞれ違うんだもの。だから、みんな同じなんて事はない。必ず、どこかしら違う箇所があるわ。
顔付きだって体型だって、肌や髪の色だって。性格だって、好みだって。
……そうでしょ？」
「……はい」
「違うから、楽しいんじゃないそんなの。
大体いちいち気にしてたって持って生まれたものが変わる事はないんだし。ラチ明かないでしょう？」
「……」
「あたしは、笑うわよ」

「……え」
「あんたが『自分は普通じゃない』なんて。そんな事気にして、それで今まであたしたちに遠慮とかしてたんだとしたら、あたしはあんたを笑ってやるわよ。
年上だろうと、シスターだろうと関係ない。笑ってやるわよ。そんな小さい人間」

強い光を灯したエメラルドをグレープに向けて、リタルはきっぱりと言ってやる。
その言葉には、グレープに対する抗議の色もはっきりと含まれていた。

「……リタルさん……」

……そう。
あたしはきっと、悔しいんだ。
自分に無い物を持つ、この子が。
ひょっとしたら……とられてしまうんじゃないかって。そんな不安を僅かにでも自分に抱かせるこの子が。
気づかせる、この子が。
……だけど、それ以上に。

「あたしだけじゃない。きっと他の連中も一緒。試しにその話聞かせてみなさい。雁首並べて笑われるわよあんた。
……だから」

リタルはそこまで言うと、柔らかく笑んでグレープを見上げた。
「どんなに変わろうが、普通じゃなかろうが。あんたがあんたで在るなら、きっと……、

……それでいいのよ」

そう。

きっと、それ以上に、あたしは、

この子の困った顔を見たくは無い。

あたしは、この子という存在が……大事なんだ。

いつから？　いつの間に？

この子はそんな位置を陣取ったのだろう。

見上げる視線の先には、自分の言葉を頭の中で一生懸命に噛み砕いている様子。グレープがポカンとした表情を浮かべていた。

だが。

ようやく、その細面から笑みがこぼれる。

それは、とても胸の透く……まるで晴れた日の青空のような、なんとも気持ちの良い笑顔だった。

「……はい……っ」

――時刻は既に6時を廻っていた。

厚い雲に覆われた暗い空の下は凍るような寒さだった。

駐車場に一人、白い息を吐きながらリタルは今にも雨が降ってきそうな重苦しい空を見上げている。

髪が一気に伸びたよ事件の直後、グレープがいつの間にか石化製品を扱えるようになっていた事が発覚した。

彼女の中で、なんらかの変化が起こっている事はもう間違いない。

最初は、また何者かが影でこそこそ彼女にちょっかいを出してい

るのかとも思ったが、その可能性は極めて低い。『魔眼』で視ても……彼女自身に微妙な変化はあるものの、異質な魔力は感知されなかった。
魔界に連れて行かれた事で、彼女の中の何かが変化したとでもいうのか。
もしくは――
考えられる事は多々ある。

そして。
彼女のもう1つの変化――グレープが笑顔を顔面に張り付かせるようになったのは、それからすぐ後の事――正確には、2週間程前に自分がリチウムにある事を告げてからだ。
そういえば、トランの様子もどこかぎこちない。

――聞かれて、いたんだろうか。

彼女達の姿が無い事を確認した上で、リチウムの許を尋ねていったというのに。

「……ったく」

顔を顰めて、吐き捨てるように呟いた。
自身の不甲斐無さを、少女は呪う。

ポーカーフェイスが出来るリチウムだからこそ、話したというのに。
自分だけでは手に負えない、何かが起こった時の為に、話したのに。
あの子達を混乱に陥れようとしたんじゃない。
出来れば、……特にトランには、知られたくは無かった。

それで、トランのグレープに対する態度が変わる訳は無い。それは解っている。しかし……

トラン自身の身に起こっている事だって。決して尋常じゃないのだ。

聞けば、彼は3週間前の事件で、意識を失ったクレープ――グレープと上空から落下した際、中空に浮かんでグレープを助けた……だけでなく。

魔族の攻撃で横っ腹に孔を開けられたというのに、その翌日には死の淵から生還したというのだ。

そんなの――決して、彼に渡しておいた銀筒だけでは成しえない。

何か、第三者の力が加えられたと考える方が妥当だ――

そこで思い浮かんだのは、あの半透明な金髪幽霊、クレープの事だった。

その場に居た彼女ならばトランの身に起こった出来事の詳細を知っているはずだ。

なんせ彼女は事件の後、「トランちゃんの身体は腕のいい闇医者が治した」などというとんでもなく素っとん狂な理由を盾に、訝しむトランを突っぱね続けたのだ。断然怪しい。

グレープに起こった変化についても、彼女は何かしら知っているのかもしれない。何せあれだけそっくりな彼女達なのだ。他人であるはずがない。

しかし肝心のクレープはといえば、あの事件の後から極端に外出が多くなり、夜もロクに帰ってこなくなった。

元々、単独でも街中を遊び歩く事の多い彼女ではあったが、それでも3週間前までは、1日に1回は必ずホームに戻り1号室に顔を見せていた。お気に入りであるトランの顔を眺める為である。

しかし最近はトランがいるいないに関係なく、ホームに姿を見せない事が多くなった。

このタイミングで。
これは立派に異変だ。
そしてこの変化は明らかに、彼女が何かを知り……もしくは、何かに気づき行動している証拠だと言えよう。
帰ってきたらすぐに自分を訪ねるよう、クレープ宛ての伝言をグレープに頼んではいるのだが、クレープの帰りは深夜――即ち自分がリチウムと共にストーンハントに出向いている時間帯であり、グレープが目を覚ます早朝にはもういないというのだから、仕様が無い。
クレープに訊くという選択肢はこの際、除外してしまった方がいいだろう。

このところ3号室に篭ることが多くなったリチウムもこれらの件を単独で調べている節がある。
4ヶ月前に自分達が出会った彼女等は、いつの間にか自分達にとって「大切」――かけがえの無いものとなっていた。仲間のような、家族のような。
たったの4ヶ月間を共に過ごしただけだというのに。そうなってしまった理由はわからない。
それでも、守りたいと思う。
そして、守るためには「知る」と言う事が必要だった。
魔族が襲ってきた理由と……得体の知れぬ事柄から彼女等を守る手段。対応策を練るために。
この「平穏」と言う日常がいつまでも続くように。出来る限りの事を成す為に。
これは、決して「誰かの為」じゃない。
自分自身の為だ。

誰かを護るという事は、己を守る事に繋がっている。
今の自分を保とうとするならばきっと「誰か」の存在が必要不可

欠になるからだ。
かくゆう自分も、かつて、『誰か』に護ってもらった事がある。
自分一人がのうのうと生きている事に対し腹をたてていた時期もあったのだが。どれほど自身を責めようと、『誰か』の犠牲の上に自分が立ち、息をしている今は変わらない。
さらに、その事に囚われすぎていると、今近くに居る者にも余計な気を遣わせてしまう。それならば、後ろを見続けて今を――大切なモノを台無しにするよりも。共に先を向いていた方が余程いい。
それに。先ほどの方程式に当てはめてみると、今自分を取り巻いている現実は「『誰か』が己を守ろうとして成した行動の結果」だと言える。これは最近になってようやく気づいた事なのだが。
そして自分は今、かつての『誰か』がそうしたように、己の幸せを守る為にグレープ達を護りたいと思っている。
この行動が一体どういう結果を作ってしまうのか。現時点では予測さえつかない。だけど。
それでも護りたい。強く、そう願ってやまないのだ。

この1ヶ月間。思いつく限り調べてみた。
そして現在。今の自分が調べられる範囲内はほぼ調べ尽くしてしまった。おかげでグレープの事も何となくわかってきた。何故、魔族が彼女を狙うのかも。
しかしそれでもまだ釈然としない事柄が多々在る。
はっきりさせるにはもうこれしかない。というか、これが一番手っ取り早い。当然知っているはずの誰かに直接聞き出す手段だ。
だが、該当する2名の人物の内、片方はいつ帰ってくるのかわからないし、もう片方は……会話をする事は愚か、ただ顔を合わす事ですらなんとなく避けたい、といった、二択出揃っているはずなのに途方に暮れてしまうような選択肢だった。
後者をリチウムに進言すれば問答無用で却下されるだろう。
自分も気がすすまない。が。

間誤ついている内にいつまた魔族が襲ってくるとも限らない。

リタルは溜息をつくと、ポケットから携帯電話を取り出した。

操作に反応している事を告げる甲高い電子音が閑散とした駐車場に響く。

騒がしい店内から漏れる僅かな明かりをなんとなく視界に入れつつ、リタルは電話を耳にしてしばらく立ちすくんでいた。

自分からその人物に連絡を取るのは初めてのことだった。落ち着かせるためもう一度大きく吐いてみたが、息は既に白さを失くしていた。

幾度目かのコールの後で、響く男の声。

虚空に視線を移動させたリタルが、眉根を寄せつつ凛とした声を上げる。

「――突然で悪いけど。あんたに聞きたい事があるの」

3

グノーシス市の西部に位置する古びた１１階建てのマンションは老朽化が激しく、現在住人は数えるほどしかいないという。
立地条件、眺めの良さ、住人の数の少なさ――リチウムはどれも気に入ったようで２年前から、リタルと共に最上階である１１階の３部屋を買い占めて住んでいる。
４ヶ月前、グレープたちが同居を始めた際、リタルが一同を巻き込んでの大模様替え騒動を展開したのだが、ここ３号室だけは難を逃れ、昔も今も変わらぬ姿で鎮座していた。
３号室は……平たく言ってしまえば研究部屋だ。
リビングには魔石や禁術封石を用いてリタルが製作した様々な石化製品がごまんと犇めき合っている。面した部屋には調べ物が出来るように書庫を設けていた。
３週間前の事件の後から。リチウムが書庫に篭る時間は１日の大半を占めるようになった。

リチウムばかりではない。
あの事件の後から、ここに住まう者それぞれが変化していた。
まず、ホームで互いに顔を合わせる事が比較的少なくなった。
今日もそれは例外ではなく、夜の７時を廻った時点で部屋の明かりは３号室――書庫のソレしか見受けられない。
……とは言っても、まぁ、今日は特別な方だ。普段なら少なくともグレープとリタルが帰ってきている時間帯である。グレープは１号室のダイニングで夕食の支度を進めているし、リタルは夕食が出来るまでの間を２号室にある私室で過ごす。
今日は、グレープとリタルの通うアイオン教会で球技大会があるという話を耳にしていた。彼女達の姿がないのは打ち上げにでも出ているからだろうと、リチウムはさほど気にしてはいない。

後の二人――トランは仕事からまだ帰ってきていない。というか、奴とはこのところ面を合わせていない気がする。1週間前、とある報告を受けて以来それっきりだった。
クレープは……彼女こそ最近姿を見ていない。外出が多くなりロクに姿を見せなくなった。
取り分け大きな変化といえば、やはりグレープの事だろう。
彼女はあの事件の後、何故か魔石が使えるようになっていた。

「……魔石のようなもん、ねぇ……」

書庫にある2台のパソコンの内、しょっちゅうフリーズをかます古い型の気分屋を使って、リチウムはかれこれ3週間程前から調べ物をしている。

余談だが、もう1台あるカラフルな最新型の薄いディスプレイはいつの頃からかリタルの私物と化している。理由は判らないが、誰にも触れさせぬ様、細工（トラップ）を施す程の”お気に入り”らしい。
それでも少女の禁断の園に踏み込みたいがあまり、封印されたパソコンの使用を試みた猛者が居たとしよう。少女が仕掛けた５６の巧妙な細工（トラップ）を掻い潜れる程頭のキレる奴であれば、そもそも、この行為を愚かと称して近づく事はしない。十中八九、事はバレる。その瞬間から、猛者はいつ来るとも判らない、石化製品の大軍を率いた小さな悪魔（ボス）による残虐な逆襲を覚悟せねばならない。後悔してももう遅い。それが齎す恐怖に怯え、慄く日々が今この瞬間から始まるのだ――なんて立体映像が、パソコンに手が触れる寸前から流れ出せば、そりゃ誰だって意欲を喪失する。
というか、そもそも私物化パソコンにはパスワードが設けられている為リチウムは愚か、如何なる者も使用する事が不可能な状態となってはいる。要するにリタルはただ、本気で誰にも触らせたくないのだ。

３週間前――あの事件の直後からリチウムが調べていたのは、禁術封石について、だった。
尤も、ストーンハントで生計を立てているリチウムは調べずとも、ある程度の専門知識なら既に備えている。例えば人界に膨大な数在る魔石の内、無差別に選出した数十個のソレ等を属性別に分類した表を作れと言われたら、専門書無しで難無く完成させる事が出来る。師匠について廻っていた修行時代に、魔石の属性名、その形状、色、大きさ、性質等を叩き込まれたのだ。
とは言うものの、判るのは属性までで、その名や素性――元となる魔力を持っていた魔族の名前など、さらなる詳細を求めるならば専用の機械に魔石を掛けるより他ないのだが。
しかし、彼の持つ専門知識がストーンハンターとして優れているのかと訊かれると……実はそうでもない。
この世界（フロース）でストーンハンターと名乗る者の大半はＳＨＧ――ストーンハンターギルドに登録している。登録した正規のハンターはギルドでこういった専門知識などを学んだ後、他者とパーティを組んで共にストーンハントに赴きながらさらなる知識を蓄えている。彼等と比べるとリチウムのそれは十人並みである。
リチウムはＳＨＧに登録していない。野良ハンターと呼ばれる存在だ。
理由は簡単である。まず、そもそも彼の師匠が野良ハンターであった事と、何よりリチウムはわざわざギルドに入る程生活――収入に困ってはいなかった。
ＳＨＧとは……まぁ簡単に言ってしまえばハンター同士の互助組合的なものだ。各国に点々と存在しており、各地に散らばっている魔石の最新情報（分布図、予測図等）を仕入れる事が出来たり、ハンター技能の伝承の場であったり。世界（フロース）中のハンターが集う場所でもある。
ギルドに登録しているハンターの収入源は一般企業やコレクター

達だ。
ギルドに掲示された彼等の依頼書の山からハンター達は技量、収入等、条件に見合ったものを選び競い合ってハントする。いち早く依頼された属性、魔力の性質に該当する類の魔石を必要分、手にしたハンターだけが企業から報酬を受け取る仕組みとなっている。
リチウムのような野良ハンターの収入源といえば様々で、大企業に雇われた専属ハンターや、魔石店を営むハンター、ギルドや正規ハンター達を相手に魔石情報を売りつけるべくその土地専属の情報屋と化していたり、リチウムのように天使等に密売している者まで様々だが、野良ハンターは大体、パーティを組まずに単独で行動、ハントしている事が多い。相当技量の高いハンターである事が言えよう。

今リチウムが調べているのは禁術封石――その素性であった。

まず、『死球』について。

いざ『死球』と打ち込んで検索してみればリチウムの予想に反してたくさんのページがヒットする。纏わる様々な噂やら、扱う自分の事がおもしろおかしく語られている日記（ブログ）やら……
なんと自分のファンページまで出てきたもんだから吃驚した。
その名も”フォルツェンド一味を愛でる会”。
これはどうやら、過去にリチウムがストーンハントに入った家の住人達が集い作成されたホームページのようで……それはそれは丹精に調べ上げられていた。これまで夜闇に紛れる事で住人達から姿を隠してきたつもりだったが、どこで面が知れ渡ったのか、どうやってそれを知ったのか。多数の似顔絵やら、今まで盗まれた魔石リストや出没場所が順を追って記してある。……しかも、大体合っている。
掲示板には自分達に対して放たれた黄色いメッセージがズラリ。

なんとリタルの事まで書かれてある。さすがに彼女の名前までは知られてはいないようだが……それでも二人の身体特徴が事細やかに記載されており、リチウムは唖然とした表情でしばらく画面に見入ってしまった。

他にも、似たようなフォルツェンド一味のファンページが多数。ふざけた噂話やら、やれどこそこのナントカ魔石がフォルツェンド様に狙われているらしいから待ち伏せよう、などと言った書き込み。さらには、我こそがリチウム・フォルツェンド様だ！と堂々と名を騙っている者の書き込みなんかも発見する。

――オレ様は超絶美形だから何をされても許されるんだぜ。「……まぁ、そうだよな」

――どうしてそんな引き締まった肉体をしているのかって？　答えは簡単。オレ様は毎日、とあるジムで地道に鍛えている。その賜物だぜ。「……イヤだソンナ努力家な俺様……」

――オレ様はこのところ、とある悩み事に頭を抱えて夜も眠れぬ日々を送っているぜ。「なんだ。繊細（ガラス）ハートか？　”オレ様”よぃ」

――いつも一緒に居る子供の事か？　ソイツはオレ様の大事な妹だぜ。……怪我させたらブッコロス。……と、思わず本気でブチ切れちゃいました。ゴメンヨ。「……なんだこの気色悪ぃ顔文字は」

――オレ様は最近、ワインに嵌まっちゃったりしているぜ。最近じゃ風呂に浸かりながらワイングラスを回すのが……、「……」

「……なんつか。俺様。ユウメイジン？」

呆れ返りながら、それでも丹念に調べてゆく。検索ワードを『無』として再度調べると、再び天文学的数のページがヒットする。順繰りに開いていって……とあるホームページを開いた所でリチウムの手が止まった。

どこであろう。アイオン教会の外観が載っている。他にも、教会

内部や学園の写真……これはアイオン教会で作られたホームページらしかった。リチウムの目を止めたのはその中にあるコンテンツの1つ。世界の創造主である巨石――アイオン教会を含め、世界のあらゆる教会で崇められている、所謂神様だ――の行動が記された、歴史なんかで習うのであろう太古のフロースの話である。

太古――それも、世界(フロース)の空間が三つに分けられる以前の話だ。

それによるとなんでも、創造主が創ったばかりの世界(フロース)には、人々を脅かす『無』と呼ばれる漆黒の空間が存在していたという。『無』には番人がいて、人々を消し去ろうと徐々に『無』を拡大させていた。しかし、偉大なる創造主はこの番人を説得する事に成功。やがて彼らは結託し、世界から『無』を消し去る事に成功した。……とかなんとか。

『番人』

もしかしたら、狼人がブツブツ言ってやがったのはコイツの事なのかもしんねぇな……

リチウムは、1ヶ月前と、3週間前に対峙したそれぞれの魔族達を想起する。魔族(かれら)達がそれぞれ口にしていたのは『主』という存在だった。

大蜘蛛魔族は『死球』を『主』の結晶――『主』の魔力が魔石化したものだと言っていた。

しかし、それから約1週間後に戦った狼人魔族は、『死球』は『かの主』では無いと断言する。

『死球』は『かの主』ではない。『死球』を操る事が出来るのは『かの主』のみだと、奴は告げた。

彼らの言う『主』とは、ここに記された『無の番人』という存在なのではないだろうか。

『死球』は、無を生む。『無の番人』と言われる存在であれば無を操る事が出来るだろうから――

――そこまで思考を巡らせた直後。はたっと視点を宙に移動させたリチウムは、その内眉根を寄せ僅かに首を傾げた。

推論とはいえ、少し安直過ぎるだろうか。

「『主』、ねぇ……」

ボヤいて、大きく伸びをして。それから、気だるげに机に頬杖をつく。

既に薄れてしまっている記憶の中で。

狼人は自分に、こう、問うた。

その『死球』を持ち、操っている俺（おまえ）は一体何者だ、と。

――おぼえていないの？

……さて。そう訊かれたのはいつだったか。

ページの流し読みを再開すると、その最下に『無の番人』に関連した絵画の画像が表示されていた。

3、4つ並べられたそれらを何気なく見てみると、そこに描かれていた番人は皆一様に――青い光を纏っていた。

青い光――

リチウムは、前回の戦いの際グレープが居た崖の上で突如発光した青光を連想する。

閃いたリチウムは、すぐさま検索窓でキーボードを叩いた。

事件後。

相棒のリタルは、グレープは人間ではなく魔石のようなものだと、自分に話した。

彼女は天才だ。あの歳であらゆる物事を思慮深く、且つ、的確に捉える。

一見勝気で言いたい事をずけずけと口にするイメージの強い彼女だが、どうやらそれは照れ隠しの一種のようで、その本質は誰よりも人という存在を重く受け止め、大事にする。

そんな彼女が3週間前の事件後、この部屋で告げた言葉は想像以上に重い憶測だった。
彼女がグレープに対し疑惑を抱いていたのは何も今に始まった事ではなかっただろう。恐らくずっと以前から……グレープ達と同居を始めた4ヶ月前からすでに。彼女は何かしら疑念のようなものを持っていたのかもしれない。
それを、自分に報告するまでの間、少女はずっと一人きりで抱えて、調べてきた。恐らくは、自身の見解を否定したい一心で。
だが――最終的に彼女が至ったのは「グレープは人間ではない」という結論だった。そこに至るまでの4ヶ月間の彼女の苦悩を思えば、吐き出された言葉はもはや事実に最も近い推察だと言えよう。

――グレープが、人間ではなく、「魔石のようなもの」ならば。
彼女はひょっとしたら魔石に生み出された存在なのかもしれない。人を創る魔石、なんてものがあるのかもしれない。
だが、この3週間。幾ら調べてみても『人を創る魔力』、そんなものを秘めた石はどこにも存在しなかった。
世にハンターが増えたとは言え、世界は広く、石にも様々な種類がある。まだ知られてもいない魔石もあるだろう。グレープは、そういう未知の魔石の魔力が生み出した存在なのだろうか。
だが。魔石とは、人間にしか扱えない代物だ。
逆に言えば、魔石は人間が手にしなければ唯の「魔力を秘めた石」で在るだけで、世界に転がっているだけの……ただの石ころなのだ。
では、その『まだ名の無い魔石』を手に取ったのは誰か。
その石を使って、彼女を産んだのは一体誰か。
一体どんな目的で彼女を――
――いいや、そんな事はどうでもいい話で。
彼女が、例えば、リタルや自分が想像するとおりの存在だったとしても、
彼女は今のまま自分達と、平和に暮らしてゆけるのか。

確証付ける何かを求めて、リチウムはこの数日間、書物やパソコンと格闘を続けていた。

そしてこの時――『青い魔石』を検索したリチウムは、『人界の巨石』と呼ばれるソレが、青く光る石であったという伝承を得る。

その名は、天界・人界・魔界、各空間にそれぞれ在るとされる世界の創造主（かみさま）の内の１つ。

３つの巨石の中でも、人界に繁栄を齎していると言われる石を指している。

「人界の……巨石、か」

ここでリチウムは、奇妙な感覚に囚われた。

『人界の巨石』。それはリチウムにとっては、かつて師匠が自分に託した”最後の探し物”でもあった。

リチウムが弟子（になった覚えはさんさらなかったが）として師匠の後を付くようになってから一年と少し経った頃。とある理由で師匠はストーンハント業を引退せざるをえなくなった。

名を継いだ自分に、別れの言葉の代わりに告げたのが『人界の巨石』を必ず探し出せ、と凄みを利かせたその一言。

こうして師匠は自分の前から去っていった。振り返っては、発見次第自分を探して教えに来るように、と念を押す。それはそれは偉そうな口調で。

『人界の巨石』にさして興味も無ければ、この横柄な物言いにムカついたリチウムはその名を頭に留めておく事こそすれ、本格的に探し出そうとはしなかった。

『天界の巨石』なる石が確かに実在しているこの世界（フロース）で、実在はしているのだろうが気配が一向に掴めない『人界の巨石』はストーンハンター達の間でも「幻の石」と謳われており、追い求めるハンターが人界には五万といる。わざわざ自分が探さなくたって、その

内誰かが発見するだろうともリチウムは思っていた。
だが、それから長い年月が経ち、そんな記憶もすっかり色褪せてしまった――1ヶ月前の事件の際。ファーレンが口にした単語こそがそれだった。……最も、あの時彼が自分に告げたのは『人界の巨石』ではなく、『魔界の巨石』の目覚めについて、だったが。
そして、今――

「それが、お出ましってか……」

目前のスクリーンに。
そして脳裏に。この単語が君臨している。

「……俺様、シショーに呪われてンのかも」

ボソっと呟くと、自嘲地味な笑みを浮かべる。
ふと、いつかファーレンが口にしていた事を思い出す。
『人界の巨石』は、未だ発見されていないらしい。

「……」

あるひとつの推測が彼の脳裏に過ぎる。その時。
玄関の方から、エレベータの扉が開く鈍重な音を、リチウムは微かに耳にした。

4

時刻は7時半を廻っていた。
厚雲が覆う寒空の下、グレープはトボトボと歩いて帰宅する。
男性教師のお誘いを丁重にお断りして、それでも「家まで送っていく」と引っ付いて離れない彼から半ば逃げる形で席を立った彼女は、芳しい香りが充満する広い店内の一角にリタルの小さな背を見つけた。
12月の太陽はせっかちで、窓から覗く冬空にはもう闇が降りていた。一緒に帰宅しようと少女に声をかけたのだが、返って来た言葉は「この後用事があるから」とあまりに素っ気なかった。仕方なくグレープはそのまま店を出ると一人で帰路に着く羽目になってしまったのだ。

闇に沈んだ街はひっそりと静まり返っていた。人の姿は無く、グレープは一人、冷たくなった掌を口に添えて白い息を吐く。少しは温まったような気がしたが、それだけだった。
身体の芯まで凍える寒さ。容赦なく吹き付ける北風に蒼い髪が揺れる。
3週間前にリタルに切ってもらった髪は、いつものように1つにしばっていた。あの日以来急激に伸びるような事もなく、周りの人間のソレと同じように少しずつ長さが伸びているようだった。肩にかかる位――そうリタルに伝え、いつもの長さに整えてもらったはずの髪が、3週間経った今では鎖骨にかかるまでの長さに至る。
もう気のせいなんかじゃない。本当に、ちゃんと伸びている。
みんなと同じように。
……しかし。
胸元に持ってきていた片手を力なく下げ、曲げていた指先を外気

に曝す。俯き加減で歩を進める。夜風はどこまでも厳しく、彼女を吹き飛ばさんとばかりに意固地に向かってきた。
幾度も。幾度も。
細面にかかっていた前髪が強風に煽られ、白い額が露になる。
彼女の表情は――どこまでも無であった。

ふと、少女の顔が過ぎる。

――あんたが『自分は普通じゃない』なんて。そんな事気にして、それで今まであたしたちに遠慮とかしてたんだとしたら、あたしはあんたを笑ってやるわよ――

「……違うんです。リタルさん」

そうじゃない。
自分はきっと。

先日成り行きでリタルとリチウムの話を耳にしてしまった時。
自分は魔石（グレープ）のような存在である。
リタルの言葉に、立ちすくんだグレープが衝撃を受ける――事はなかった。
むしろ、変に納得してしまった。
それは、ついこのあいだ、今まで一度も伸びる事の無かった髪が伸びた、その直後の出来事だった。
あの時。リタルにはとうとう告げなかったが、物心ついた時から彼女は、髪は愚か爪さえ伸びた事がない。
総ての石化製品を暴走させてしまうという、リチウム達からは『破壊魔』と称されている点といい――リタルの発した言葉を肯定付

ける事柄は幾つもある。
過去。周りが自身をそう見るように、自分でも自身を変だと思っていた。だからあの時――リタルが口にした事柄は自分でも驚く程すんなりと受け止める事の出来るものだった。それどころか、不安の種が理解できて、逆にすっきりした位だ。

自分が人間ではない。
その事実を受け入れてしまった今の方が、苦悩していた昔よりも楽だった。
やっぱり、自分は”変”だった。
……だけど。
今は、それでもいいと思っている。
すんなり受け入れられる。
だって。
そんな事でくよくよ悩んでいたって、仲間に笑われるだけなのだから。
そう。自分には仲間が居る。
リチウム、リタル、トラン、クレープ。
今の自分には楽しい毎日がある。
だから、不安なんて感じない。
感じる隙間さえない。
だって。楽しい。
だって。楽しい。
だって――なんで。それなのに。
……こんなにも、心細い。

自分の事を宣告するリタルの凛とした声を耳にしてから、一体どれくらいの時間が経ったのだろうか。
リチウム達の居た、3号室の明かりが消えた時。ふと、我に返った。

訪れた暗闇。夜の匂いに包まれた身体は、ずっと冷え切っていて。
グレープはようやく凍えている事を実感した。
ふと、背後に温かな気配を感じる。
ずっと自分の背後に立っていてくれたトランに気づいて、戻ろうと、そう声をかけた。
彼に振り返った、あの時の――
事柄を受け入れた自分の表情は……判らない。自分は、
あの時。
一体。
どんな表情(かお)をしていただろう……。

トランには聞けない。
夜の闇に包まれた……それでも自分に笑んでくれた優しい彼に、
これ以上困った顔をさせる事なんて、したくはなかった。

そして。その件以上に、
彼女を苛む事柄があった。

3週間前。グレープは魔族の手に落ちて魔界に連れていかれた。
その時からだと思う。
以前と比べ、身体が異様に軽くなったような感じが今も続いていた。まるでそれまでの自分は知らぬ内に不可視の数キロの錘を両手両足に装着したまま生活していたのではないか――思わずそんな事を疑ってしまう程であった。
しかしこの違和感は日常生活を営んでいく内に慣れる事で解消してきた。
伴って、髪が伸び、爪が徐々に伸び、
極めつけはなんと、これまで幾ら試しても暴走、破壊するまでに至ってしまう石化製品をもこの手で難なく扱えるようになった事だ。
まるで。出来損ないが、「人」になっていくような、そんな感覚。

戸惑いはあるものの、しかしそれは、少し嬉しくもある。そんな変化だった。

だが、それと同時に、身体以外にも違和感を感じるようになっていた。

実はそれこそが今の彼女にとって、最大の気がかりだった。

3週間前から、

彼女が持つこれまでの記憶は非常にあやふやなものになっていた。

そうは言っても、別に記憶を喪失したという訳ではない。

記憶は在る。物心ついてから、これまでの十数年間。どんな細かな事でもこれまで通り、思い出せと言われればそれについて述べる事が出来る。

だが、それは何故か、どれもこれも。実感の伴わない覚(もの)えばかりだ。

例えるなら、クレープが身体の所有権を握っている間のソレに等しい。

クレープが体外に出た後で、いざ一寸前の――即ち、彼女が体内に居た時の光景を思い起こしてみると、記憶であるはずのそれはどうにも異様に薄っぺらい。読書などで得た知識(もの)と非常によく似ている。脳裏に自身のものとして映し出されるのは、間接的な……まるで現実味を帯びない記憶(きろく)だった。

――だが、それと、今のこれとは別格だ。

そういった「実感が湧かない記憶」というものは、クレープと行動を共にするようになる半年前から既に存在してはいたが、それは僅かな……ほんの一握りの量だけだった。当然である。クレープは必要以上にグレープの身体を求めないし、入ったりもしないのだから。

だが。今は、どうだ。

3週間前を境にして。それ以前にこの身に起こった総ての出来事。

昔、身の周りで起こった事柄。
日常。
世界。
思い出。
嬉しかったり、哀しかったり
そういった感情を齎した感触、総てが。
確かに映像は残っていながらも、イマイチ実感が無い。
まるで。
それらが総て、夢の中の出来事だったかのような。

日を追う毎に、その感覚は強くなってゆく気がする。
というのも、この3週間が異様にリアルで、実感の伴わない十数年間総ての記憶がさらに霞んできたのだ。
記憶の中の自分は……果たして本当に自分であったのか。
強大に成長した違和感は、いつしか、そんな事を思案する程にこの身を支配していた。
そう。
現在、彼女は、不安で堪らなかった。

果たして。
楽しい彼らの中で笑っていた自分は、本当に自身だったのだろうか。
……もしかしたら。自分ではなく、クレープでは無かったか。
そんなはずはないと頭では解っていながらも、幾度も幾度も、ふと過ぎる。
だって、そうでなければ、説明がつかないではないか。
常に心の中に在る、この大きな空洞を――
と。

「……！？」

唐突に、背後から頭をわしっと掴まれた。

「でさ。

そこで直立されてっと。俺様いつまで経っても中に入れねぇんだけども」

聞き覚えのあるバリトンが響く。

「？　……リチウムさん？」

どうしてこんな道端でこれほど声が反響しているのか。

なんでこんな所にリチウムがいるのか。

疑問の回答は、自身の視界にあった。

目の前には１１０１号室、と書かれたドアが１つ。君臨している。

「……はれ？」

グレープは、いつの間にかホームに帰って来ていたらしかった。

恐らく、自力で歩いてここまで来たんだろうが。覚えていない。

……いや。改めて思い返せば、薄っすらとエレベータに乗った記憶があるようなないような……。

未だ呆けていると、大きな溜息をついた背後の男に、手に提げていた……帰宅途中に寄ったスーパーのビニール袋を取り上げられてしまう。持ち手のビニールが相当食い込んでいたらしく、途端に指先がじんじんと痛み出した。

頭を掴んでいた手にグイっと後方に引っ張られると、入れ替わりに前に出たリチウムがノブを握る。

ロックの石が解除され、果たしてドアが開いた。
暗闇の室内に廊下の明かりが差し込んでゆく。

「ぼさっとしてんな」

一言呟くように口にしてから、長い影を先等にリチウムが室内へ入ってゆく。
その数秒後。
錆付いたドアの音で完全に我に返ったグレープは閉まりかけたドアノブを慌てて掴んだ。

前を歩く大きな背を無意識に追いかけて、ダイニングを通り過ぎる。やがて二人はリビングに腰を下ろしていた。
前傾姿勢に腰掛けたリチウムは腹が減っていたらしく、グレープが買ってきた弁当に早速がっついている。
グレープは、リチウムの座っているソファの９０度の位置に設置された一人掛けのソファに、ただ腰を下ろしていた。
リチウムがリモコンに手を伸ばす。間も無く、毎週この時間帯に放送されているテレビ番組が画面から場違いな程明るい笑い声を室内に齎した。番組司会者の早口を耳にした時。未だぼうっとしている自分にグレープはようやく気づいた。
時計は８時を廻っている。

「……」

家仕事がたくさん残っている。
例えば、今日の昼、リチウムが散らかしたであろう、食器洗い。
風呂を沸かして、

少し掃除もしておきたい。
……だが。

室内には壁にかけられた薄型テレビの音だけが響いていた。
リタルの帰りが遅くなる事を報告してそれ以後……二人の間に会話は無かった。
画面で流れているのは、リチウムが毎週楽しみにしているバラエティ番組だ。
リチウムはもごもごと口を動かしながら番組に集中していた。
見上げれば、青い瞳は子どものそれのように画面に釘付けられている。
普段と変わらぬリチウムの様子に、どこかホッとしたグレープはようやく口を開いた。
話題は今日の球技大会について――と、思ったが。ふと……トランの顔が頭に過ぎる。
忙しいはずの彼は、それでも仕事の合間をぬってリタルの様子の見に来てくれたのだ。

「……トランさん。今日もお仕事で帰れないそうですね。
最近は特に忙しそうです」
「……まぁな」
「いつか……またのんびり出来るようになったら、その時はわたしも野球を教えてもらいたいです。トランさん、教え方すごく上手ですし、ドン臭いわたしでももしかしたら……」
「……聞いてなかったのか？」

リチウムは意外だと言わんばかりに目を丸くしてグレープを振り返った。
「？　なにがですか？」

「トランチャン。近々ここを出て行くらしいぜ。
なんでも、昇進？　したみてぇだ。奴。
天界（あっち）の寮に住むんだと」

初耳のグレープは、先程のリチウム同様、瞳を大きく見開く。

「そうなんですか！？」
「ああ。
3週間前に俺様等、狼野郎を伸しただろ。
その時魔族が何体か、街（グノーシス）に姿を見せたじゃねぇか。それ、ニュースで世界中に流れてたらしくってさ。世間が関心を寄せて……なのに。事はいつの間にか幕を下ろしていた。魔族はいなくなって、グノーシスも無事。
で。結局魔族の魔の手からグノーシスを救ったのは一体どこの誰なんだって流れに当然なって、だな。
さすがにそこで『魔石泥棒（とうぞく）』で知られている俺様や、増してや子（リ）供（タル）の名前を世間に公表する訳にはいかんかったんだろう。警察にも面子ってもんがあるだろーしな。

結果。奴（トラン）が『炎帝』使って魔族を一人で倒したって事になった」

言葉の合間に弁当を掻き込むリチウム。ウグウグと口を動かしながらテーブルの上の朝刊を顎で指す。

「ニュースでも盛んにやってたんだが……気づかなかったのか？」

トランの困ったような笑顔が掲載された新聞を手に取り、一面をマジマジと眺めるグレープ。
成程。そこには感謝状を受け取るトランの写真を初めとして、炎帝の写真の横には魔石専門家の解説。他にも当時の目撃者証言が未

だ多数掲載されており、「天に昇る火柱を見た」だの、「空が一瞬明るくなった」だの、「あの夜、奇跡の赤光が降臨した」だの。様々な事が書かれてある。
ふと、グレープが表情を曇らせた。

「……。

……あのでも、これって」

グレープの顔色に気づいたリチウムが、頬についた飯粒を摘み口に運びながら付け加える。

「刑事（トラン）が禁術封石（えんてい）持ってる事をンな大々的にご披露しちまって大丈夫だったのか……だろ？　おまえが聞きたいのは。
心配いらねぇよ。『炎帝』は確かに禁術封石だが……ありゃそもそも『天石』っつう代物だったらしい」
「……天……石……？」
「ああ。俺様も最近知った事なんだが……魔族じゃなしに、天使の結晶なんだと。あれ。
だから特別にお咎めはナシって事になったそうだ。
ま。そんなこんなで、必然的に奴の昇進が決まって。
……なんでも、今日からＷＳＰ勤務になったらしい。今日は……なんか一日がかりで、色々と説明があるんだと」
「……そう、なんですか……すごいですね……」

グレープはあんぐりと口を開けて、それから、少し寂しそうに俯いた。

「……言ってくだされば、お祝いができましたのに」
「おまえに話していない所を見ると、奴にしてみれば相当不服だったんじゃねぇ？」

「え？」

ボソッと吐かれたリチウムの言葉に、グレープが顔を上げた。

確かに、トランにしてみれば、今回の昇進は不服以外の何物でもないだろう。

トランは生真面目な男である。

加えて彼は、あの事件の後。自分ひとりだけが何も出来なかったと悔やんでいた。

夕焼けの赤い世界。彼が悲痛な面持ちで自分に向かって頭を下げた事を思い出す。

懺悔にも似たあの姿は、普段は穏やかな彼の……表には決して漏らす事のない、暗い影。

搾り出すように上げた言葉に、グレープは、どこか……悲鳴にも似た色を感じた。

あんなにまで自身を責め抜いていた彼が、真相を語る事も出来ず、況してや世間に偽った形で昇進するというのだ。彼の苦悩は推し量れない。

しかし。

先程のリチウムの言葉はどこか引っ掛る物言いだった。

ひょっとして、彼が自分に謝罪していた場面をリチウムは見ていたのだろうか。

もしかして、リタルとの話を自分達が立ち聞きしていた事も――

自分を映す双青を不安げに見ながら相手の言葉を待つと……。

「……ま、あれだ。

祝いなんて、先になっても後になっても、どんな形でも有難み変わんねぇだろ。

特にトランの野郎はンな事気にする類の男じゃねぇし。それはおまえも知ってンだろ？」

特に他意を匂わせる様子もなく。後頭部をポリポリ掻きながらリチウムが付け加えた。――少し、安堵する。

「……そう、
ですね。はい」

独り言のように呟くと、グレープは小さく微笑んだ。

「今度お会いした時に、「おめでとう」って伝える事にします。だって。魔族さんとの事が無くったって、トランさんは今まで、頑張ってこられたのですから」
「ああ。伝えてやれ伝えてやれ。奴もそりゃあ喜ぶだろうよ。それこそ天にも昇ってみせるだろうよ」

投げやりに片手をふってみせるリチウム。早くも弁当を食べ終えたリチウムはそのままテレビの世界へと戻ってしまった。
その様子に笑んでから、グレープは後片付けを始めようと彼の前にある空の容器に手を伸ばす。

何気に、顔を上げると――
目前に、リチウムの首筋があった。
誘われるように、見上げる。

息を呑む程。
それは、ひどく疲れた横顔だった。

この一瞬だけ、彼は気を解いたのかもしれない。先程までの様子からは微塵にも感じられなかった――感じさせなかった疲労の色をグレープはこの時知った。

よくよく見れば、目の下に薄っすらとクマが出来ている。
そういえば最近。彼を1号室で見かける事は少ない。辛うじて夕飯の際はリタルとともに姿をみせるものの、昼間は3号室に篭ったっきり出てこないのである。

……寝て、いないのか。

「……」

思い起こしてみる。トランとリタルもあまり寝ていないようだった。普段は夕飯後は深夜まで爆睡しているリタルは、しかし、最近どこか表情が冴えない。トランだって似たようなものだ。
クレープといえば最近出かけている事が多い。……というか、3週間前からロクに話をしていない気がする。
一体。
あんな半透明な身体で一体どこへ行っているというのだろう。
そしてこの男も。

自分は、この3週間。自身の事ばかり悩んでいた。
変わりゆく日常に焦り、不安を感じ、なんとか守ろうと必死だった。でもそれは……。

気づかせてくれたのは少女の、あの言葉だった。

――あんたが、それで今まであたしたちに遠慮とかしてたんだとしたら――

……違う。

遠慮していた、訳ではないのだ。

そして、それは決してこの3週間の事だけではない。
自分はこれまで。自身の傷にこそ過敏になっていたのだ。

怖がって、怯えて。
もうあの目をもう見たくなくて、
自分が近くに居る事でもう、他の誰にも嫌な思いをさせたくはないと、
楽しい空気に水を差したくないと、自ら距離を置こうと、
人を遠ざけようとしていた。
しかし、それは。……詭弁ではなかったのか。
自身こそ。誰も信用していなかったのではないだろうか。
これまで。出逢った人は大勢居る。きっとあの中にも、あの目を持たない……彼らのような存在だって、居たはずなのに。

痛いから。怖かったから。
誰かに不快な思いをさせてしまうのは、もう嫌だから。
……だから、離れた？
どう言い繕おうと自分のその行動は、逃げではないか。
自分こそ、周りの人を信用していなかったのだ。

今も、そうではないか？　変わっていないのではないか。
……大事だと言う、彼等の事でさえもおまえはどこか信頼しきれていないのではないのか。そう言われても否定出来ないんじゃないのか。
違うと否定したかった。
少女の言葉に違和感を抱いてから何度も、頭の中で自問自答して――
……でも。実際、そうではないか。
誰かを支えたいなんて尤もらしい事を願っておいて、実際はどうだ。

現状に不安を感じ、なんとか守ろうと必死だった、だって？

――結局自分のことだけしか、考えていなかったではないか。

「……っ」

顔が赤くなる。

なんて自分勝手なんだろう。グレープは、すごく恥ずかしくなった。

じわりと悔し涙が滲む。しかし、目をギュッと瞑ってクビをぶんぶんと振った。

自身を責める前に、不安に思う前に。

自分の事を考えるよりも、何よりも。

自分は自分に出来る事をしよう。

変わりゆく日常。変わりゆく彼等。例えばそこに自分の居場所が無くなってしまったとしても、それはきっと自然の流れ。自分がどんなに嫌がっても震えても泣いても。それは止まってはくれないのだろう。

ならばせめて、自分は何か、彼らの手助けがしたい。

そう。変わってしまうからこそ。無くなるかもしれないからこそ。それが出来るのは、確かにここに居る今、この時しかないのだから。

頷くと、グレープは身を乗り出した。

「……リチウムさん……っ」

「……んぁ？」

自分の声に振り返ったリチウムは、そこでようやく近くに居る自分に気づいたのか少し驚いたように瞳を見開いた。

「あの…っ」
「……」

リチウムの青に自分が映っている。
それが解る程、自分がこの男の至近距離に居た事に、ここで初めてグレープは気づいた。

「……その……っ」

……なんだろう。なにやら。先ほどとは違う感じで。
異様に気恥ずかしい。

「……どうした」
「……え、えと……」
「……？」

困惑の色を滲ませた瞳（あお）の中に、さらに困惑して真っ赤に染まった細面がある。
だが、再びふるふると首を振ると。意を決してグレープが開口する。

「……あ、あの！
今日は、その、
リ、リチウムさんの好きな、入浴剤にします！！」

「……は？」

両手を胸の前でぐっと握ったグレープの意気込みに、リチウムはポカンと口を開けて見下ろしていた。

「――ですからあのっ
今日は、お風呂にゆっくり浸かっていただきまして、
とにかくゆっくりっ　寝ていただいて！
それで、明日もまた、一日元気に頑張りましょー……っです！」
完熟トマトのように染まった顔で懸命に捲くし立てると、グレープはとどめに「えいえいおー」と元気よく拳を振り上げた。
「……」
――しばらくの間。テレビの音がやけに大音量に響いた。
目の前の男が動く気配は全くない。驚くような呆れかえったような表情で片手を上げたままの己を見ているだけだ。
……な、なにか、変な事を口走ってしまっただろうか……
訪れた重い沈黙に全身大量の汗を流しながら、グレープが薄い眉をへの字に寄せる。
唐突に。大きな手が自分に向かって伸ばされた。
思わず目を瞑って身を竦ませる。と、その手は自身の頭上に乗せられた。
ぽんぽんと軽く叩かれたかと思えば、次の瞬間。リチウムの手は乱暴に頭を撫で回す。
「……！？　あ、あの……」
されるがまま、目をシロクロさせるグレープ。
「……あのな」
しばらくして、至極面倒臭そうな声が降ると、撫でる動きが止ま

り、

「言っただろ。これから忙しくなるって」

聞き覚えのある言葉に、グレープの焦点が合う。

床から、徐々に視線だけを上げていくと、

力強い腕に遮られてしまって、その顔を見る事は出来ない。

それでも、

言葉は降る。

「連中もそうだ。

いつもサボり気味だったのが災いして余裕無くなったって、ただそれだけのことだ。

クレープも遊び疲れたらいずれ戻ってくるだろうし。トランの野郎だって。ここ出て行くっつっても、どうせ休みの日にゃ顔出すだろ。必ず。間違いなくな。

……だから別に。これまでと、なにも変わらん」

「……」

頭上の太い腕を両手で掴んで、恐る恐るどかしてみる。

拘束した腕に、しかし抵抗は無い。されるがまま、それは容易にグレープの物となる。

今度こそ。見上げたそこには。

いつもよりも疲れた顔をした男が「仕方ねぇな」なんて顔で自分を見ていた。

「変わんねーよ。

これから先もずっとだ。ここに居る。

……だから、な。あのな。

おまえは……ンな色々、心配しなくてもいい」

不器用な言葉。
胸元の――自身に身を預けてくれている腕の、力強さと

『ここに居る』

温かさに。

「……はい」

グレープが微笑んだ。

「……てかよ。おまえ頭。爆発してる。コントかよ」
「え？　えぇ……だってこれはリチウムさんが……っ」
「大丈夫だ。なにしろ”オレ様”は超絶美形だから何をやっても許されるらしい」
「？　な、なんですかそれ……？」

窓の外で、
室内の光景を眺める赤い瞳があった。

暖かな室内から漏れる光が、その人物の一部を浮かび上がらせる。
長く緩やかな金髪。
細い顎。
ルビーのような赤い瞳は、どこか覚めた目でその光景を見ている。
「……」

室内で笑う、自分と同じ顔をした蒼い髪の少女は、未だ彼女に護られていた。
しかし。
恐らく、もう手の内は知られている。
たった一人の。かけがえの無い魔族の事までも――

蒼い髪の少女が魔界から戻って来てから、３週間が経過していた。
そろそろ、定着する頃だ。

「……きっと。動くのは、もう間も無く。
でも――」

寒空の下。痛むほど張り詰めた空気が微かに震えて音を紡ぐ。
今日は炎帝の主は天界から戻って来れない。
仕掛けてくるならば……間違いなく、今夜だろう。
だが。

「――リチウムじゃ、奴には勝てない」

刺すような冷風が彼女の金髪と呟きを攫う。
靡く金糸の合間から覗く赤い瞳は、どこか名残惜しそうに蒼髪の少女を見ていた。
が。
暖かな灯りに背を向けると、一気に上空を目指す。
闇に振り返ったその時から、彼女はもはや完全に別人だった。

1

この世界――フロースには現在、３つの空間がある。

天使が存在を許された地、天界。
人間が存在を許された地、人界。
魔族が存在を許された地、魔界。

３つの空間は同じ世界に存在しながらも完全なる異空間――異次元である。先にも述べたとおり住んでいる者達の毛色も違えば、空間内に広がる光景も様々。時間の流れは……魔界がどうなっているのかは未だ不明だが、少なくとも天界と人界とでは大きく異なる。

しかし、空間同士は密接に干渉しあっている。その為か、各空間の地形は等しく、自然災害などは同地域で一斉に発生するという。

『転位』など空間操作に属する魔力――中でも移動型の能力等を持つ者であれば異次元間を自由に行き来する事が可能ではあるが、数千年前に種族間で結ばれた条約が現在もなお、これを禁じていた。

が、一箇所だけ。条約にも守られた”例外”が存在している。

それが、ＷＳＰと呼ばれる機関である。

ＷＳＰとは、人界にある総ての警察組織を統率する最高機関であると同時に天界の統治機構でもある。種族間条約の発効後、人界と協力体制をとった天界が、魔石収集の本拠地に警察組織を選定した事を機に設立された。組織に所属する天使を業務上警察官とし、警察制度に則り制定した階級を個人のレベルに応じて与えている。故に人界の警察組織に所属する人間はＷＳＰを「警察庁」または「本庁」、その長――天界の中でも最高権力者に当たる天使を「警察庁長官」と呼ぶ。

ＷＳＰには人間も数名所属している。かつて国際警視庁に勤務し

ていた当時の彼らの階級は警視正以上であった。そこでの実績を認められ人事部により選抜、警察庁長官によって任免されたという彼らは、何れ劣らぬ優秀な人材ばかりだ。
国際警視庁とは、人界に元々在った警察組織の本部――即ち人界にある総ての警察組織を統括、指揮している警察署である。別名、中央署とも呼ばれている。
ちなみに人界からＷＳＰへ行くには国際警視庁の最上階にある転移装置を使わなければならない。
そもそも国際警視庁があるグノーシス市と同地点を選び建てられたというＷＳＰ。設立後に国際警視庁が機関に吸収される形となり、今の状態に落ち着いたと言う訳だ。

トランは警察中央学校を出ている。
警察中央学校とは国際警視庁――中央署直轄の、警察実務における最高教育機関だ。
定められている身体基準を満たし、尚且つ相応な高い学力を持つ者のみが通う事が出来る難関校で、そこでは国際警察官の資格を取得する為に必要な知識、技能、指導能力、管理能力を修得させる教養を行っている。
警中卒と言うだけでエリート組として扱われ、中でも在学中に試験を受け国際警察官の資格を得た――所謂キャリアと呼ばれる有資格者は幹部候補とも呼ばれる。資格を持たないノンキャリアの者と比べると待遇の差が激しく、昇進の速度から給与の額まで、なにもかもが優遇されるという。
中央署に所属しているトランもまた国際警察官（キャリア）と呼ばれる刑事だ。階級は……数週間前までは、警部であった。
頑なに昇進を断り続けてきたトランは、しかし魔族侵入事件騒動後、問答無用で警視正に昇任してしまった。警察官の階級では警部の上に当たる警視を飛び越えて、警視正へ。これは３週間前の彼の功績を讃えた異例中の異例とされるスピード出世である。

事件で負傷し数日の後に復帰を果たしたトランは、事を知るや否や上に掛け合った。実際に3週間前の事件を解決に導いたのはトランではなく、ほとんどリチウム達による功績だった為だ。真実を訴える事は勿論、警察官でありながら『炎帝』と呼ばれる禁術封石を所持し使用していた自身の扱いに対し断固として抗議を続けたが、中央署署長――国際警視庁の警視総監であるトランの養父、ダニエル・クイロは上（ＷＳＰ）の決定だとこれを突っぱね、さらには本来の功績者であるリチウム達の存在を抹消し捏造した事実を世間に公表してしまった。おかげで彼は本日からＷＳＰ所属の国際警察官となってしまった。

ダニエル・クイロにしてみれば、養子であるトランの出世は願ったり叶ったりの状況だったであろうと周囲は密かに噂する。何せトランはこれまで幾度と無く持ち上がる昇進の話を断り続けてきたのだから。

本来なら優秀な成績を修め、実績を重ねてきた彼は、中央署でももっと上位の……幹部クラスの位置に居てもおかしくはなかったのである。

ＷＳＰは天界にある機関だ。

人界と天界では時間の流れが異なっている。ＷＳＰの施設内に入ったトランは早速2空間の時刻を受信出来るという腕時計を支給された。

1時間程施設内で説明を受けた後、許可を得たトランは休憩時間を利用して人界に戻っていた。

呼び出されて天界に向かう途中でトランは早速腕時計を操作してみた。時計に表示されていた人界時間が、小さなボタンを押す事で受信した天界時間に切り替わる。

――いざ直面した時差（げんじつ）にトランは思わず溜息をついた。

人界の某教会で30分を費やした彼が戻ってきた天界ではまだ5分しか経っていなかったのである。

しかも2つの空間の時差はまちまちだそうで、例えば人界で一定の時間を2度過ごした際その時差を比べると、双方の間隔は等しくない事が多いという。

しかし全体的に見るとどうやら時が経つ程に広がる傾向にあるそうで……一日でこれなら果たして1週間後、1ヵ月後にはどうなってしまうのだろうとトランは不安を覚えた。

思わず、変わらぬ姿の自分の目の前に大人になってしまったリタルが現れる場面を想像してしまう。いつものように腰に片手を当てたリタルは、もう片方の手で構えたドライバーの先を自分の鼻先に突きつけてくる。そこへリタルの背後から”彼女”が顔を出し……徐々に形作られてゆく熟女グレープ（妄想）を、首を振り慌てて脳内から消去する。考えたくもない。

戻ってきたトランが通されたのは第三会議室。外観や内装同様、白を基調とした施設内の一室はだだっ広い空間だった。30分前……天界時間では5分前だが……まで、自分にWSPの施設について簡単に説明してくれた、ひょろっと細長く、肩までの直毛を垂らした神経質そうな天使の姿はここには無く、現在閑散とした室内にはトランしかいない。

手が空き次第ここへ迎えに来てくれるという例の針金天使を待つように言われ、トランはしばらくの間、何の飾り気もない無機質な空間に一人所在無く立っていた。が、一向に針金天使の来る気配が無い。

仕方なく、部屋中央に長方形に並べられた長机と上等な椅子――その一脚に腰掛けたトランは手にした資料を流し読みしつつ、いつしか物思いに耽っていた。

現在WSPに勤めている人間は全員天界に移り住んでいるという。

時差の激しい2つの空間。行き来する分は構わないそうだが、感覚が大いに狂ってしまうし、なにより天界に住む職員と比べて早く歳を取り過ぎてしまう。

トランも例外なく職員用に宛がわれたマンションの一部屋に移り住む様勧められた。……というよりかは、ほぼ強制である。
現在トランはリチウムのホームに居候している身である。ＷＳＰ側――針金天使も予め身辺調査を終えていたのか、特に話してもいないのにそのことを指摘してきた。
ＷＳＰ所属の者が魔石法違反の犯罪者のホームに身を寄せているのは如何なものか――周囲の職員（てんし）と同じような白い衣服を身に着けた針金天使はこう告げて居住区域の様子の記されたパンフレットをトランに差し出した。

「随分戸惑われているようですね。……まぁ、無理も無い」

己の気配しか存在しなかった室内に、突然降ってきた聞き覚えの在る声。トランは機敏な動作で席を立つと声の主に振り返り敬礼する。
いつの間に侵入したのか。知り合いそっくりの天使――トランの直属の上司に当たるファーレンが、室内に設けられた２つのドアの片方に背を付け、腕を組んでこちらを見ていた。

「私に関しては、別に普段どおりの接し方で構いませんよ。トラン。ただ、貴方の身分が変化したというだけの事ですから」
「……では、１つ。初めに上官にお伺いしたい事があるのですが」

言動とは裏腹に、黒い双眼は射抜くように白い衣の上官を見る。

「なんでしょう」
「先の事件の後処理の件です。事実の捏造、世間への公表……自分の昇進。
自分は総監に、総ては貴方の指示だと伺いました」

ファーレンはニヤニヤと笑みを張り付かせたまま、トランの様子を愉しむように眺めていた。

「ええ。そのとおりです。私が彼にお願いしました。……お上の命を受けて」

「オカミ？　長官……ではないですね。ＷＳＰ（ここ）の創立者ですか？」

トランが怪訝そうに眉を潜めた。

先程流し読みしていたパンフレットに名前だけが記載してあった。確か創立者は……トピアという人物である。

トランの言葉にファーレンは満足げに頷いてみせる。

「施設の創立者であると同時にあの方は、この天界を統べる聖なる存在でもあります。

……貴方には『天界の巨石』とお伝えした方がわかりやすいのかもしれませんね」

「……『巨石』？」

聞き覚えの在る単語に、黒眼は困惑の色を滲ませた。

『巨石』とは歴史にある、この世界フロースの創造神である。

当初、巨石は１つであったが、……確か、五千年程前に種族間条約が結ばれ空間が３つに分けられたのと同時に３つに分かれたそうだ。

『天界の巨石』

『人界の巨石』

『魔界の巨石』

３つの創造神は各空間に散らばりそれぞれの地に繁栄を齎したという。

人界に住む種族――人間であるトランにとっては一番馴染み深いはずの『人界の巨石』はしかし、数千年が経った今でも行方が知れずストーンハンター達が躍起になって探し続けているそうだ。

「渡された資料には人物名が記載されていましたが……」

当然浮かんだ疑問に、しかしファーレンは答えない。

無言のまま、付けていた背を離すと靴音を響かせてゆっくりとトランに歩み寄った。

悠然とした仕種。口元にはいつもの笑みを張り付かせている。

「……あの？」

真意がわからずに、トランが声をかけると、

「……我等天使の神、『天界の巨石』は人型をとるのですよ」

言葉尻と共に、靴音が止む。

ついに目前まで来た１８８センチの金の瞳が、１７９センチのトランを見下ろした。

神々しい輝きを放つ金髪。豊かな純白の羽。透明感のある皮膚。

そこに在るのは、現実には叶わぬ程整った存在だった。夢の世界から生まれた住人のようなそれは、全身を非現実に彩られて……それでも確かに実在している。まさに完璧と称するに相応しい美貌だった。

しかし。同じ顔でありながら、その在り方はリチウム・フォルツエンドとは異なる。　完璧過ぎる程整った外見。そこから滲み出る、隠し切れない――混沌。

トランは改めて、この男の底知れぬ何かを感じとった。

この男はどこか異常だ。

やがて。
不思議な色彩が、異様な威圧感に戸惑いを露にした黒い瞳へと迫る。
「『巨石』に愛される存在である貴方も、近い内にお会いできるでしょう。……きっと。驚きますよ」
耳元で囁かれる甘い余韻を残す声に、トランは眩む。
「……なにを」
左方よりねっとりとした視線が絡みつく。徐々に内部に侵入してくるそれを拒むようにトランは僅かに目を細めた。
「なにを……、言って」
頬を流れる一筋の汗。正面を向いたまま辛うじてそう返せば、ファーレンは僅かな抵抗をあざ笑うかのように、白い手をトランの肩に乗せる。
「貴方は、お上の命でここに配属された。
お上は貴方を所望している。
総ては……貴方の持つ、カケラが導いている事です。
突然、彼等から引き離されて不服なのは理解出来ますが、それで私を恨むのは見当違いも甚だしい」
紡ぐ音が蛇のようにトランの全身を這いずり、その思考ごと硬直させる。
「貴方はこのまま、ただ、運命という渦に身を任せていればいい。

形はどうあれ、貴方はいずれ、望むものを手にする事が出来るでしょうから。
第一、その方が楽でしょう？
後の事は――私に任せておけばよい」
「……何を、企んでいる？」

搾り出すように上げた問いに、金が怪しく歪んだ。
肩に置かれた手が、やがてトランの身体を撫でる様に下がり、
金は、間近に在る男の顔を正面から捉える。

「企む？　……とんでもない。
私はただ、お上の愛する可愛い貴方に道を指し示しているだけですよ」

不気味に上がる口角。
そして――声は囁くように告げた。

「最も。貴方は決めたはず。……いや、決めていたはずです。
まがい物の生――カケラを手にしたその時から。既に」

――それは、彼女の笑顔のおかげで忘れかけていた過去。逃避していた現実だった。
金は笑む。
それを口にすれば簡単に自身が揺らぐ事を、知ってか。知らずか。

2

「――総監がそのような調子ですから、天使どもになめられるのです！！」

ニタバーニ・ゼネラックは、目前の厚いドアをノックしようと軽く作った拳を上げて直後、ドアの向こうから漏れるマルトリック・ゲイザーの捨て台詞のような退室の言葉に糸目を丸くした。

荒々しくドアを開けて出てきたマルトリックはニタバーニよりも１０歳以上年下である。が、ノンキャリアでありながら若くして「警部」の階級に伸し上がったという彼の眼光にはニタバーニの持ち得ない猛々しい輝きが備わっていた。

歳は３０代後半。白髪交じりのダークグレーの短髪を後ろに流している。最近益々腹周りの肉と共に眉間や目尻の皺の数も増えてきた。

「……失礼」

一言、押し殺した声で吐くと、彼はダルマのような――といっても１６５センチの鍛え抜かれた筋肉ダルマだが――太い身体を怒り任せに動かして廊下を奥へずんずんと進んでいく。

どこかコミカルに映る彼の後姿を見送りながら「やれやれ」と溜息をついて。改めてニタバーニはドアに向き直った。

短い返事を耳にした後、室内に入る。

ニタバーニを迎えたのは、明るい照明。上質な絨毯。壁に掛けられている、繊細な細工の施された額縁の中の歴代警視総監達。それから……彼の対面に位置する一際上等な机と椅子。そこに腰をかけた、どことなく気品溢れる男が自分を眺めている。

ダニエル・クイロ。容姿端麗。頭脳明晰。冷静沈着と謳われたか

つての同期総代も今年で５０歳だ。
短い白髪に黒ぶちの眼鏡。中肉高背で切れ長の金の瞳を持つ自分と同い歳のキャリアはとうとう警視総監という位置まで上り詰めてしまった。これは人界中の警察組織を取り締まる国際警視庁の長に与えられる、人界の警察機関では最高位の階級である。

「少しいいだろうか。警視総監殿」

大仰な素振りで恭しく尋ねる。くだけた口調に、しかしダニエルは僅かに歪めた眉目を返した。

「……トランのことか」

おまえもか。とでも言いたげな様子。机の上に両肘をつき、組んだ手を口元に持ってきて唸る。その声色には幾許か疲労も滲んでいた。

「いやいや。仕事に関連した事柄ではない。……久しぶりにな。まぁ、世間話と言うヤツをさせてもらいに来た。忙しいだろうか。都合が悪ければ出直そう」
「……構わない。しかし、貴様が盗み聞きなんて趣味の悪い事をするとは……変わったな。ニタバーニ」
「たまたまだよ」

僅かな非難と小さな侮辱を含む陰気な視線を受け流し、笑みを崩さずあっけらかんと答えてやる。
切れ長の金の目を少しだけ見開いたダニエルは僅かに表情を緩めた後、「前言撤回する」と呟いてからニタバーニにソファにかけるよう勧めた。

「いや、結構。
見たところ警視総監殿はゲイザー警部の尋問で相当疲労が溜まっておられる様子。手短に済ますよ」

たっぷりと皮肉を込めた言葉にダニエルは再び眉間に刻まれた皺を深くする。

「彼の……仕事に対する姿勢や、情熱については評価する。だが……上官に対しあそこまで啖呵を切るとは」
「元々、中央(ここ)には個性豊かな人材が多い。取り分けゲイザーは現場……しかも叩き上げで有能な人材だと評判を聞きつけた人事部がわざわざ地方から招きいれた程の男だからな。
そいつらのトップに立ち手綱を握り続けねばならない警視総監殿の気苦労は相当なものなのだろう。心中は察してやる」
「ありがたい」

溜息交じりに言葉を吐くと、大袈裟に肩を竦めてみせる。
(歳をとると人間、柔らかくなると言うが……)
昔と比べると随分ソフトな印象を見せるダニエルに密かに目を剥きながらも、彼に付き合い一頻りカラカラと笑ってみせた。ようやく場の空気が和んだかのように思われた、その直後。

「――まぁ。そんな訳だからして、ダニエル。
早速”世間話”に移りたいのだが」

ニタバーニの目つきが一転。険しいものとなった。
こうなると彫りの深さが際立ち、普段彼が滲ませている気さくで砕けた印象が鳴りを潜めてしまう。
対し、ダニエルは先程の柔和な雰囲気を纏ったまま瞳の奥の光だけを鋭くニタバーニに向ける。

「先日マスコミに公表した内容だが、総て上からの指示だというのは本当か」
「……”世間話”と称した割には。ゲイザー警部と切り口が同じだな」

組んだ手で半分隠れてしまっているが、恐らく苦虫を噛み潰したような顔をしている事だろう。整った眉目の皺を益々深くしたダニエルの呟きには無言を決め込んで、ニタバーニは辛抱強く彼の答えを待つ。

「……確かに。
3週間前の魔族侵入事件で、魔族を倒し街の平和を護ったのは、勇敢なる警察官、トラン・クイロ警部ただ一人の功績だと世間に発表する様指示してきたのはWSPだ」

どこか荘厳な空気を滲ませた室内。包まれた静寂の中変わらぬニタバーニの様子に観念したのか、ダニエルは淡々と事を告げた。

「トランが持つ天石（えんてい）について。わざわざ公言したのも……」
「ああ。おまえが察している通り、連中（うえ）の指示の内だ。
というか。天石の話を持ち出さねば幾らなんでも世間は納得しまい。人間がたった一人で複数の魔族を相手に勝利を掴み街を護ったなんて、それこそヒロイック染みた児童劇だろう」
「ダニエル。トランが天石を所持していた事。養父であるおまえは今回の事件が起こる以前から既に気づいていたんじゃないか？」
「……」

無言を肯定と受け取ったニタバーニは、さらに”世間話”と称する詰問を進める。

「フォルツェンド一味の元にトランが身を寄せていた事も知っていたのか」
「……ああ」
「いつからだ」
「それを君に答える権限はない」
「俺は仕事の一環として上司に尋ねているのではなく、トランの友人として、かつての同期に訊いているのだが」
「……」
「これまで、天石を所持していたトランを傍観していた上、フォルツェンド一味の本拠地を知っていたおまえが今日に至るまで一味を見逃していたのは何故か。先程ゲイザーがおまえに食って掛かった件はこの2点についてだろうと俺は睨んでいるが。間違っているか？」
「……」
「単純な直線型の彼とトランは似ている。せいぜい、動と静が真逆に位置しているに過ぎない。余談だが、俺はどうもその手の奴等の扱いが上手いらしい。
　ゲイザーが何に怒り、上官であるおまえに反論したか。立ち聞きせずとも少し考えれば解る。彼等は『妥協』を知らないからな。己の納得出来ない事柄に対し一人で悩みに悩みぬいてそれでもどうやったって許せずに、最後には爆発する。この現代において彼等は憐れな程に不器用だ。……若さゆえ、と言うヤツかもしれんが。
　だが。まぁ……俺がおまえに訊きたいのはそんな『表層的な事』ではない」
　ニタバーニの細目の奥――ダークブラウンの瞳が鋭く光る。
「少し昔の話をしよう。
　知っての通り、俺は6年前、ウィリデ地方の警察署に勤めていた。

６年前といえば、あの地方で発生した大規模な山火事の件はまだ記憶に新しいだろう。俺はあれを肉眼で確認した。赤い灼熱の地で炎火はのたうち、あるいは天高く吹き上がる。竜巻のように渦を巻く炎の中を幾度も火の竜が空を目指して昇ったのを見た。強風に煽られさらに燃え広がり、炎の波は一瞬の内に民家を呑む。そうして、撒き散らされた圧倒的な恐怖の後に残るのは焼け野原と化した大地や街――絶望だ。公式発表では乾燥した空気と熱風による自然災害などと称していたが……俺にはとてもそうは思えん。それほど悪意的な何かを伴う凄まじい地獄だった。

壊滅的な被害をこうむった街――スマラグドに俺は駆り出された。スマラグドは既に６０人を越える死者を出していたが……そんな地獄絵図の中、俺は奇跡的に、当時１４歳だった奴を助けた。……そう。『奇跡的に』な」

「……」

直視し続けるその先の――硬い面持ちは変わらない。冷酷な金の目が語り続ける自分を見続けている。

何を言わんとしているのか、とっくの昔に読めている、と言った風だ。

昔からそうだ。総代である奴を自分はライバル視すると同時に尊敬していたし、密かに慕ってもいた。しかし計算高いこの男が時折みせる、この妙な余裕だけはどうにも鼻持ちならなかった。

ならば言ってやろうとニタバーニは思った。それでなくてもこの件に関して、この男を問い詰めるには聊か遅過ぎた体がある。しかし、一体誰が予想できただろうか。この急過ぎる事態を。

「――本人に直接聞いたところ、奴の家族はその６０人の中に入っていたようだ。

俺は身寄りの無い奴をウィリデの教会――孤児院に預け、その後もちょくちょく様子を見に行っていた。が、その内名誉な事に国際

試験に合格し晴れて中央署勤務が決まってな。奴とはそれっきりだ。
おまえが奴を引き取った事を知ったのは、１５で成人した奴が警中に入った時期だ。研修中の奴と署内でばったり顔を合わせた」
「……その話は、前に息子から」
「正直。俺は疑問だった。
何故おまえが奴を引き取ったのか」
「……」
「プリムスから遠く離れたウィリデの教会だ。縁でもなければあんな山奥、立ち寄る事もないだろう。……さて。都会育ち（グノーシス）であったおまえとあの田舎に、一体どんな縁があったというのか」
「……」
「奴が警官を目指して警中に入った後で目に止まり養子にもらったってンならまだ解る。だが、おまえが奴を引き取ったのはその前だ。奴はおまえのコネで警中に入ったようなものだからな」
「……」
「天石を所持していたトランを、養子にもらったのは偶然か」
「……」
「その後間も無くおまえがこの位置についたのも、偶然か」

ニタバーニの言葉が止むと間も無く、重厚な静寂が室内を支配した。
流れる厳格な空気は、両者がそれぞれに重ねてきた長い年月を緻密に表した物か。
沈黙を守っていた男はようやく、組んでいた手を外す。
露になった口元は――笑っていた。
眉を潜めるニタバーニの前で、笑みを浮かべたまま男は眼鏡の蔓を押し上げる。

「おまえはどう考える。ニタバーニ」
「はじめからだ」

眼鏡の奥に宿る不気味な光にしかし臆する事なく真っ直ぐに見つめてニタバーニは口を開く。

「ダニエル。おまえは……思えば、はじめから総てを知っていたように感じる。

トランがリチウム・フォルツェンドの元に身を寄せる事も。こうして、本人の意思とは無関係に不自然な位置に押し上げられる事も。

魔族が人界に押し寄せる事も。……そう。なにもかもだ。

知っていて片棒を担いだ――トランに警部という階級を与え、万一トランが警察官を辞職する事の無い様、奴の”かつての恩人”である俺の下に就かせた。

それに確か……トランにリチウム一味を任せたのはおまえの命ではなかったか」

「……さすがは『直感と洞察力に優れた副総代』……と言ったところか」

ダニエルが満足げに口角を上げた。

浮かべたのは、かつてお互いを讃えあっていた頃自分に見せた表情では決してなく、どこまでも冷酷な微笑だった。

同期で在りながら密かに憧れて止まなかった存在の影に隠されていた混沌に、ようやく辿り着いた男は小さく喉を鳴らす。

そんな様子を見据えながら、ダニエルは上質な革製の座席に背を付け、悠然と構える。

「ニタバーニ。

”対”という存在を知っているか」

「……つい？」

「ああ。そうだ。

私は、数年前にその存在を知った。

生命と、対。
その二つで、世界(フロース)は成り立っている。
この、『本来在り得ない世界(ブラックワールド)』は、な」
「意味が解らない」
「解らんだろうさ。この私でさえ。当時は理解に苦しんだ。
それも当然だったのだ。
我々は世界を把握するだけの真実を未だ知り得てはいないのだから」
「真実……だと？」

訝しげに復唱するニタバーニを、ダニエルは落ち着ききった面持ちで見上げている。

「ニタバーニ。
我々警察は本来、人界の治安――人界を護る為の組織だ」
「これまでの行動を、おまえは……そんな常套句で正当化しようと言うのか？」
「勿論だ」

非難めいた視線を、しかしダニエルは真っ向から受け止める。

「災害も空間も。時も未来も。我々生命の１つ１つでさえも。
総てはたった一人の子どもじみた幻想(ゆめ)の内で良い様に転がされているだけに過ぎない」
「……なんだって？」
「我等警察は、人界を護らねばならない。
例え、神が倒れようとも。常識が破壊されようとも。
人界を担う我等警察が、倒れる訳にはいかんのだ」
「……」

ゆったりとした座席から背を離すと、ゆっくりと立ち上がった。
奥の窓からダニエルは外を眺める。人界を担う一人の男の双肩はしかし、巨大パノラマの前に異様に小さく映った。人界一の高さを誇る国際警視庁の最上階――５６階から眺める絶景は如何なるものだろう。男の部下でしかないニタバーニには想像も及ばぬ領域である事は確かだった。
背を向け眼下に広がる世界を見下ろしたまま、独り言のようにダニエルが呟いた。

「トランは最も重要な鍵だ」
「……鍵？」

問うてみたが、それには取り次ごうともしない。
いや。ダニエルはもはや、自分という存在を意識してはいなかった。
かつては競い合った間柄だった。遥かなる過去の幾場面かを薄く振り返っては俄かに生じる寂寥の思い。
いつから。
きっともう随分前から、この男は自分など視界に入れてはいなかったのだろう。
いつかは大きく立ちはだかっていた目の前の背中が、今はこんなに遠く感じる。
長い年月を越えて、互いに決して変わる事の無いと感じていた彼等の距離は今や遠く離れた。
恐らくは5年前――彼がトランを養子にした時には、すでに。
「アレという存在を通して初めて、我等はこの世界で奴等と対等に在る。
このまま枠内に閉じこもり、支配下に居続けるか。
それとも――人界の繁栄する未来（せかい）を勝ち取るか。

6年前。我々は、ようやく模索可能な位置に立ったのだ」

3

窓際の席で、冷たくなったホットミルクのカップを両手で包んだまま、リタルはある人物を待っていた。

中央署裏の寂れた喫茶店――アマデウスに入ってからすでに2時間は経過している。

時刻は10時を廻ろうとしていた。

アマデウスはリチウムが禁術封石の密売時によくファーレンと落ち合う場所だ。小さな喫茶店は昼から深夜まで営業しており、慇懃無礼な店長が一人で接客をしている。全体的に照明が暗く、よく言えば、雰囲気のある喫茶店。悪く言えば、到底流行りそうにもない店だと称する事が出来よう。リタルも何度か同席した事はあるが、単独で入るのは初めての事だった。こうして一人、所在無く腰掛けているのは、なんだか少し居た堪れない。座っているだけで随分とくたびれてしまった。

店内の客はリタルと、しがないサラリーマン風の男が2，3人。こんな店でこんな時間まで、一体彼等は何をしているのだろう。リタルには想像もつかなければ特に想像したくもない。

窓の外に視線を向けた。

「……あ」

思わず声を上げてしまう。

外にはチラチラと小さな白が降っていた。

桜の花びらを連想させるそれは、無論桜などではない。

――雪だ。

真っ暗な闇に白が舞い降りる様をささやかな外灯が照らし出していた。

幻想的な風景に思わず、あの子なら赤い目を大きく見開いてはし

ゃぎ出すんだろうな、と想像してしまう。
蒼色の髪の彼女は身なりは大人で……ちょっと悔しいくらいに美人なクセに、中身はてんで子どもの単純思考回路をしていた。
自分と対極に位置する存在である。
自分程の歳の子どもであればこうして雪を目にした時点で、彼女同様、喜びを露に元気よく外を駆け回るだろう。積もったら雪だるまを作ったり、雪ウサギや、雪合戦……そんな楽しげな想像に思いを馳せるに違いない。
……しかし。そんな感情はこの胸のどこにも、欠片だって芽生えなかった。
冷めている、と自分でも思う。自分は子どもらしくない。
……いや。意図してそういう部分を捨ててきた。
これまで、早く大人にならなければならないと随分躍起になって……ようやくここまできたのだ。

「……」

雪の舞う夜の様子を前に、振り返ってみる。
果たしてそれは、いつからだっただろう。

突如。無遠慮な鈴……いや、鐘の音がした。新たな客の来店を知らせる、耳を劈くような音である。その瞬間、場違いな程清浄な空気が狭い店内に流れ込んだような気がしてリタルは顔を向けた。
コツコツと、こちらを目指して直進する足音が響く。
知り合いとそっくりの造りに眼鏡をかけた天使――ファーレンはいつもの慇懃無礼な笑みと白衣を靡かせて少女に歩み寄った。
「まさか、貴女の方から私に会いに来てくださるとは」

「……で。お話とは？」

出された湯気立つコーヒーカップに口をつける事なく、目の前に座った金の瞳は眼鏡の奥からリタルの顔を捉えていた。

端正な眉目。真っ直ぐ通った鼻筋。

こうしてマジマジと見てみると、顔の造形はリチウムのそれだが、醸し出す雰囲気がまるで別人であった。

大きく異なるのが、その瞳。

リチウムの青の双瞳は見る者を強く惹きつける。不安を払い、奮い立たせる何かを放つ。

だが、この男はどうだ。

全身から漂う神聖な雰囲気とは相反する何かがそこには共存している……気がする。

白皙の中心に浮かぶ金の光に吸い込まれそうになるものの、そこに抱くのは不安だけだ。

どこか、禍々しい。

「……トランの事だけど」

咳払いをしてから声を上げた。

金に呑まれそうになるのをリタルは発声することで防ぎ、同時に、ぼうっとしていた意識を起こす。

心なしか、ファーレンが笑んだ気がする。

……気にしない。コイツのペースに合わせたが最後、からかわれて終わりだ。

まず、トランの石について。

彼の石『炎帝』は、世間で騒がれている通り、本当に天石なのか、と。

「リチウムから何も話を聞いていないのですか？」
訊けば大袈裟に、ファーレンはそんな事を口にした。
「リチウム？　なんで？」
訝しげに問うと同時に、ファーレンを刺すように見上げる。
「1ヶ月前でしたか……あの蜘蛛魔族の事件の際、その件に関して彼に告げた事があるのですよ」
「……」
……初耳だ。
リチウムの奴、なんで黙ってた……？
憮然とした表情で何事かを思案するリタル。その様子に笑みつつも、ファーレンは肯定する。
「『炎帝』。あれは最強の炎の使い手でした」
「……天石、なのね。やっぱり」
「その様子では既に貴女はご存知だったみたいですね。どうして気づかれたのですか？　あれが天石であると」
「あたしの知り合いにね。魔石マニアがいるのよ」
最もネットで知り合った奴だから顔も見たことが無いけど。と、小さく付け足しておく事を少女は忘れない。
「事、石の事に関してならなんでも知っている。
今までに発見された魔石に関しては勿論、天石や、未だ発見されていない魔石についても聞けば答えてくれる。どうやって情報を得

ているのかはしらないけれど、金さえ払えば細部に至るまで詳しく教えてくれるわ。ま、石専門の情報屋……ってとこかしらね」
「それはそれは。マークしがいのある人物ですね」

人界に在る石の情報や、各地の警察部隊によって回収された魔石は総て天界……ＷＳＰに集められている。今回人界で報道された『炎帝』については例外にしろ、通常天石に関しては内部に厳重な緘口令が敷かれている為、人界ではその実体をほとんど把握出来ていないのが現状だ。リタルの言う情報屋が実在しているとなればそれはＷＳＰ内に勤める人物――あるいはその関係者から情報を買っている人物が存在する、という事になるのだが……。

「あんただって禁術封石買い取りしてるでしょ。人の事言えないじゃない」

間髪入れず言い放てば金髪の美形をジト目で睨みつつ、リタルはホットミルク――ホットとはもう言えないが――を一口。

「それについては口外しない約束では」

言葉とは裏腹にさして困った様子もないニコヤカな天使に、冷ややかな目を向けつつこちらも不自然な微笑を返す。

「さて。どうだったかしらね。
で。ね。話戻すけど。
トランと会ったばかりの頃。その情報屋に炎帝について訊いてみた訳。炎を出して自在に操る、色は赤、形状は極小……てな具合に、特徴を並べて」
「その人物は、なんと？」
「訊いた数日後に、そんな石は魔石には存在しない、と。こう返し

たのよ」
「……」
「単純に炎を出す石なら魔石にも実在するらしいわ。でも、そういう魔石は炎を出したが最後、術者本人も大火傷を負うそうよ」
「それは、まぁそうでしょう。なにせ炎ですから。
炎系の魔石を操ろうとするならば相応の対策を練る必要がありますね。例えば耐火のグローブを着けるとか」
「でしょう？　あたしも疑問だったのよ。
トランは炎を素手で振るう。それどころか、炎を身に纏ったりもする。物を燃やさない炎だって出せる。情報屋曰く、そんなデタラメな……そもそも温度の無い炎なんてそんなの「炎」じゃないでしょう、そういったまるで幻影のような――でも対象物をキチンと燃やす事だって出来ちゃう、なんて便利な炎を生み出す火系の魔石は無いそうよ。
だけど、最後に奴はこう返してきたの」
「……『炎帝』、ですか」

ファーレンの言葉に、リタルは俯く。

「そう。天石ならば、１つだけ該当する石が在るって。
でも有り得ないってソイツは言ってたわ」
「何故」
「何故って……あんたも知ってるでしょう？　天石は随分昔から総てを天界で保管しているって言うじゃない」
きっぱりと言い放つと腕を組むリタル。
だが、それに対してファーレンはより神妙な面持ちで彼女を見つめた。
「……実はですね。

先日の魔族侵入事件の前日。上に言われて保管庫を点検した天使が居るんですよ。
保管されているはずの『炎帝』の有無を確認する為に」
「……」
「ありませんでした。他の天石は総て揃っているというのに、『炎帝』だけ忽然と消失していまして」
「……それって、まさかトランが……」
「人間が盗む事は先ず考えられません」

リタルの不安げな眼差しに、ファーレンがきっぱりと否定してみせる。

「人間は愚か、天使でさえも侵入不可能な程頑丈な造りをしていますから。保管庫は。どのような魔石を使おうと外部の者があの部屋から天石を盗み出す事は不可能です」
「……そうね。トラン自身からも『誰かにもらった』としか聞いてないし、あいつが顔色を微塵も変えずに嘘を吐く事が出来る、とは到底思えないし。……なら内部者が」
「トランに渡したと言うのですか？　天石を？　何故」
「……う」
「ましてや『炎帝』なんて曰く付きの天石……確かに値はつくでしょうが、盗った所で誰も欲しがりませんよ」
「曰く付き？」
「そうです。あの石は出来損ない――いえ、不完全です」

訝しげに問うたリタルに、きっぱりと。ファーレンは言い放った。

「？　それってどういう……？」

訊き返すも、ファーレンは黙り込んでしまった。

深刻な面持ち。金はテーブルを通してどこか遠くを睨んでいる。
構わずに、リタルが口を開いた。
何故『炎帝』を持っているのがトランなのか。
天石は総て、天界が保管しているはずだ。だとすると、トランが所持しているのはやはり、誰かが仕組んだ事じゃないのか。その可能性は。
そもそも『炎帝』とは一体、どんな類の魔力を秘めているのか。
その魔力で、宙に浮いたり、傷を治したりする事は可能か。
畳み掛けるも、しかしファーレンは答えない。
金の瞳はテーブルに視線を落としたまま動こうとはしなかった。

「……」

こんな様子では、他の事柄について聞き出そうにも、切り出すのは何時(いつ)になる事やら。
溜息をついて。
仕方なく、リタルは窓の外に目をやる。
外灯に照らされた白の粒は大きくなって、徐々に勢いを増してきていた。
この分では、明日は本当に積もるかもしれない。
グレープは益々はしゃぎだす事だろう。今夜の内から雪ダルマだとか、雪ウサギだとか言い出すに違いない。
……何か細工を施してやろうか。
そうすればあの子も、少しは元気が戻るだろうか……

「ところで最近、グレープさんはお元気ですか？」

まるで頭の中を覗かれたような、絶妙のタイミングでその質問は

降ってきた。
ギクっとしてリタルはそちらを見遣る。
一体いつの間に。この男は視線を自分に戻していたんだろう。
目の前の男に、どことなく異様な気配を感じて、リタルが全身を硬直させた。
彼女の様子にニヤリと笑んだファーレンは言葉を続ける。
「私に的を絞った素晴らしい貴女です。残念ながら天石――『炎帝』についてこれ以上をお答えする事は出来ませんが。代わりに貴女方の知り得ていない貴重な情報についてお話ししましょう」
「……って。今、あんた。なんて……？」
「私がＷＳＰの人間である事はご存知ですよね。そもそも、ＷＳＰという機関を貴女は理解していますか？」
愉しげに語り出した相手に、リタルは内心舌打ちした。
こういう時のコイツには、関わらない方がいい。コイツのペースに合わせれば翻弄されて終わりだからだ。しかし……
今までの経験が告げていた。
それだけでは終わらない。
何か、嫌な感じがする。
「――確か、天界のお偉いさん方が運営している組織で……要するに人界に在る魔石を探し出す為と、それを口実にいつでも堂々と人界に渡る事が出来るよう設けられた機関でしょ。あれって」
内心の不安を漏らさぬ様、リタルはさばさばとした口調で答える。
「さすがですね。リタルさん。
人界にはどうも、ＷＳＰ＝警察の親玉、といったイメージが行き渡っているようですが……そこまで把握していらっしゃるとは」

満足げに笑むファーレン。

「私はこれでも、貴女方の住む、このグノーシス周辺を任されたWSP所属の警察官です。階級は警視長。……まぁ最も、これら肩書きは所詮私に関する表向きの情報に他ならないのですが……」

「あんた個人の話なんて、別に聞きたくな……」

「……私が本当は『天界の巨石』の直属配下で、彼女の命により裏で『人界の巨石』を探していた、と言ったら……少しは興味を抱いてもらえますか？」

『人界の巨石』という単語に、再びリタルの身体が大きく反応する。

そう、彼女は既に知っていたのである。

『増幅』の力を秘めた青い輝きを持つ『人界の巨石』の事を。

それこそが次に尋ねようとしていた事柄でもあった。

……だが……。

「どうやら今夜は退屈しない夜になりそうですね」

金の瞳の奥に宿る禍々しい輝きが増してゆく。

――自分はひょっとして、地雷を踏んでしまったのではないだろうか。

動けないリタル。見開いたエメラルドに、ファーレンは悠然と語ってみせる。

これまでの、事件の経緯を。

4

ファーレンが会議室を出て行った後。ほどなくしてやってきた人事担当の針金天使の後に付いてトランは広大な施設内を廻る。一周する頃には既に数時間が経過していた。

１階に戻り建物の外へ出る。僅かに日が傾いてきた空の下、白いドーム型の外観を眺めながら向かった先は同敷地内に在るＷＳＰの別館だ。

天使の姿で溢れた施設内を針金天使に連れられて順繰りに見て廻る。

２０００名を収容可能という講堂棟。

大きな窓から大量の光が注ぐ明るい食堂。

独特の紙やインク、ホコリの匂いが漂う図書室。

冷暖房完備の寮、談話室。

設備の整ったトレーニングルーム。

ただっ広い風呂場。

（警中を思い出すな……）

最も、その数百倍の規模はありそうだが。

感慨深げに歩くトラン。

彼の前を行く針金天使は正面を向いたまま告げる。

「クイロ警視正には今日からここで職員と居住を共にしてもらいます」

神経質そうな声が紡いだ言葉に対し、頭を過ぎったのは数時間前に見たグレープの笑顔だった。

（結局何も報告しないで出てきちゃったな……）

昇進が決まってから今日に至るまで、幾度告げようとした事か。
チャンスは幾らでもあったのに。
昇進が決まって天界（あっち）に住む事になったんだ。
何度もシミュレートしたその一言を、いざ彼女の前で口にするのは躊躇われた。
『今度みなさんが揃った時に祝勝会をしましょう……っ』

「……」

別館をぐるりと廻る形で再びＷＳＰに帰ってくる。
縦に長い中央署とは反対に、３階建ての建物は比べ物にならない程広壮な施設だった。それこそグノーシス市なんて２、３つは難無く入ってしまうのではないだろうか。
清潔感のある白い施設内では、たくさんの天使が行き交いしている。
白翼を背に持つ人型の種族が働いている光景や新しい職場そのものも、何もかもが新鮮で目を見張るものばかりであったが、トランの心の中は冴えなかった。

ファーレンは、知っているようだった。
自分が、あの日……誓った事を。
そして、どういう意図があったのか。人型を模しているという『天界の巨石』についても奴は口にした。
会えば驚く――ファーレンは確かに自身にそう告げたのだ。

もしかして……

トランの記憶が遡る。

６年前に起こった大災害の最中。当時１４歳であったトランは死に追いやられていた。
でも、死ぬわけにはいかなかった。
だって自分には守るべき存在が居たのだから――
――今も、それは変わらない。
そしてその彼女は……奇妙な事に酷似しているのだ。
炎の中で見た、あの女性と。

「……、ですので、一度……ーレン警視長が、……とで、貴方をこちらに案内するように、と」

針金天使の告げた語尾を、トランは辛うじて拾っていた。
思考を中断して、顔を上げる。

「……え？」
「この先でお待ちです」

そう告げると針金天使は足を止めて、体ごとトランを振り返った。
きりっとした隙のない表情は……それこそ学校の職員室にでも居そうな感じだ。
周りの職員（てんし）と同じような服装――白いシャツと白いズボン。色素の薄い金髪。歳の頃は……３０代前半……といったところか。
身長はトランよりも数ｃｍ低く、強風が吹けば飛ばされてしまうのではないかと心配になる位に細い。面長の顔に細く開けたつり目がトランを見ている。
同じ糸目であるニタバーニとはまるで違った印象を受けた。彼は柔和で親しみやすい雰囲気を纏っている。……その分怒ると迫力があるのだが。しいて言うならニタバーニは体育会系で、こちらは事務系だ。
彼が指す方向に視線を移すと、巨大なドアが１つ君臨していた。

『第一会議室』とある。
反応の無さに苛立ったのか、針金天使が再び口を開いた。
「こちらで上官が、貴方をお待ちです」
「……はぁ」
針金天使に促されるままに、トランは見るからに重量感のある扉の前に立った。
聳え立つドアの向こうに物々しい気配を感じつつ、ドアをノックしようと片手を上げる。丁度、その時だった。
「……トランちゃん！！」
聞き覚えのあるメゾソプラノに、目を見開いたトランは振り返った。
しかし。そこには広い廊下と、一人直立している針金天使の困惑した表情しかない。
「……」
今の声は……まさか。こんな所に……？
……いや、居る訳がない。
空耳、か……？
「どうかしましたか？」
「……いや、なんでも……」
怪訝な面持ちのまま再びドアに向き直る。軽く作った拳を上げる

と――

「行かないで！」

再び厳しい女性の声が耳を劈いた。

もう、間違いはない。

彼女とは3週間前……例の「闇医者」について追及しすぎてソッポを向かれてから、しばらく面と向かって話していない。

随分久しぶりだが、この声は……、

「……クレープ」

「こっちよ、トランちゃん」

呼ばれ、今度は体ごと振り返る。

明るい廊下に視線を滑らせて、天使のそれとは違う、あの鮮やかな金髪を探すが――

「こっち」

壁や窓に反響するメゾソプラノ。

姿は見えぬが、声のみが確かに響く。

――幽体なのか。

「こっちだってば。早く！」

切羽詰った声。

見当を付けた方向へトランは駆け出した。

「クイロ警視正！？」

背後で響く声を完全に無視して。

「こっち！」

声を追いかけながら、トランは思う。
最近、彼女は外出ばかりで、ロクに姿を見ていなかった。
それが突然。
しかも、こんな……天界で。
どうして――

どの廊下をどう進んだのか、どこの階段を降りて、どの角を曲がって来たのか、覚えていない。
ただ、声のする方へトランは走った。
振り返る白い衣服の天使達の驚愕の顔。
響く靴音。
果たして、トランは廊下の奥――光の届かぬ暗がりにひっそりと佇んでいた細いドアの前に立った。
錆付いた扉には『備品庫』とある。

「ソコなら誰も居ない」

声はこの中から聞こえた。
トランはノブを握る。

「早く！」

急かされるままに、トランはドアを開けた。

「……トランちゃん！」

錆付いた金属音。
ドアの閉まる重音と、クレープが自身に抱きついてくるのとは、ほぼ同時であった。
室内に設置された青白い灯りに照らされ視界でふわりと柔らかく揺れる、金の髪。
華奢な身体が温かく、柔らかい――
……感触が、ある？

「クレープ、おまえ……」

細い肩を掴んでやんわりと離す。
久しぶりに直視した細面は――やはり目を見張る程綺麗で。
見れば見るほど……彼女とそっくりだった。
そのルビーを思わせる赤い瞳も、細く形の良い顎も。白磁のような、肌理の細かい肌も。
トランの顔を見上げるクレープは半透明でもなければ、浮いてもいなかった。
それどころか、

「……グレープちゃんの身体、なのか？　それ……」

僅かな違和感を口にしたトランに、クレープは首を横に振る。

「トランちゃんに話していないコトが、たくさんある」
「クレープ？」
「……昇進おめでとう。トランちゃん。

ホントはすぐに行かなきゃいけないんだケド。
アナタに伝えとかなきゃいけない事があって……」
儚げに笑んだクレープを見つめる黒眼に憂慮の色が滲んでいる。
「……どうした」
「……」
「何か、あったのか？」
「……トランちゃん」
クレープは一旦言葉をきると、俯いて足元を見る。
同じように自分も視点を移動させた。
実体の彼女は……なんと裸足だ。
見るからに冷たそうなコンクリートの床に白くて小さな足がぺたりと着いている。
「って、おまえ何やって……ほら、これの上に乗れ。冷たいだろ」
言ってトランが鞄と共に手にしていたコートを剥き出しのコンクリートの上に敷くが、クレープはまたも首を振って拒否した。
「……相変わらずね。トランちゃん」
足元にしゃがんでいたトランを憂いを帯びた光が見下ろす。
覇気のない口調。普段とは違う彼女の様子に確信したトランが口を開こうとした。
「心配してくれて、アリガト。……でもね」
遮る彼女の瞳に、一転して、厳しい赤の光が灯る。

彼女は見た事もないような冷酷な表情を浮かべて足元に屈んでいたトランを直視した。

「……クレープ？」

「お願いがあるの、トランちゃん」

腰を上げたトランを真っ直ぐに見上げる赤。

金の髪の少女は別人のように落ち着いた声で、どこか予言じみた言葉を告げた。

「この先、何が起こっても。もう二度と。

『炎帝』を使わないで」

5

閉店時間が近いのか。
数名の客が順を追って店を出て行く中。窓際の席で悠然と構えた美麗な天使が語り出した。
リタルにとって幸いだったのは、あの不気味な金の瞳が、眼鏡の反射で見えなくなっていた事か。

「改めまして。私はＷＳＰ所属の職員――警察官であると同時に、お上直属の配下でもあります。その際お上に頂いた名をヘルファーレン。
貴女方との付き合いは……人界時間で大凡２年になりますか」

１ヶ月前。
蜘蛛型魔族――アドーナイオスをリチウム達に嗾けたのはファーレンだった。
結果アドーナイオスを倒すも、リチウム達の勝利はファーレンの予見の範疇。彼の目的は勿論、他にあった。
無論、事件後リチウムが問い質した際に彼が告げた『魔族側の動きを探る為』では、断じてない。自身の主『天界の巨石』の話により彼は既に魔界の動きを把握していたのである。

ファーレンは以前から人界に在るという『人界の巨石』を探していた。
４ヶ月前――リチウムと共に居た彼女の姿を初めて目にした時からファーレンは、その特異な体質と容貌からグレープ・コンセプトこそ『人界の巨石』ではないかと疑っていた。
が、強大な魔力を持つ『天界の巨石』である主とは比べるまでもなく、グレープの身体からは魔力は全く感知されなかった。ファー

レンから見てもグレープはただの人間であった。
しかし他に疑わしい存在も無い。ファーレンは確信を得る為に行動を開始する。
彼女の正体を探る為、彼女とその周囲に居るリチウム達の記憶を覗こうと、彼らを捕獲する術を持つアドーナイオスを唆しリチウム一味に嗾けた……それが1ヶ月前の事件の全貌、という訳なのだが。
果たして成果はあった。
ファーレンはこの時初めて”クレープ”という存在を知ったのだ。

ファーレンは彼らの記憶からクレープという半透明の女性に注目した。彼女もグレープとそっくりの容姿を持ち、しかも普段は半透明――心魂のみという大変珍しい形状で存在している。
しかも、追い詰められた彼女がグレープの身体を借り発動させた魔力は『増幅』――これは『人界の巨石』の力であった。
ファーレンは直ちにこの事を主に報告する。ここでグレープとクレープ。二人の存在が浮き彫りとなり、この時からグレープを捉え調査を行う計画が進行していた。
彼女が本当に『人界の巨石』だったとして。どうしてその膨大な魔力が感知されないのか。

「……ここから先は総て、お上から伺った話となります。私はその頃別の命を受け、行動していたものですから」

3週間前。
狼人型魔族――イャオーが、鷹人型魔族――サバオートの魔力を用いて人界侵入を試みたあの日。主はグレープを捉える事に成功した。魔界に連れてこられた時、彼女は酷い怪我を負った為に意識を喪失していた。構わず、主は傷ついた身体からグレープの心魂を取り出し、その状態を視、直接触れる事で彼女の正体を確信する。
その後『魔界の巨石』の内部に直接グレープの心魂を入れグレー

プの身体を形成させた。しかし新しい器に心魂が完全に定着する為には、グレープ自身の覚醒と、それから少しの時間が必要だった。
不安定な状態の彼女をサバオートに見張らせる。目覚めたグレープはついにその力の片鱗を見せ、魔界に来ていたリチウム、リタルと合流する。その後リチウムがイャオーを倒し、グレープは彼らと共に再び人界へ戻って今日に至るまで日常生活を送っていた――

「……そうして、彼女の身体が『新しい器』となってから丁度3週間が経った現在――
お上が、彼女の身体が完全に定着する頃合だと告げた時間が、こうして無事に経過したと。そういう訳です」

雪の降る街。店長の姿さえいつの間にか消えてしまった――無人の喫茶店の一席で、天使が少女に真実を突きつける。
リタルは驚愕に歪んだ表情で、それでも事態を把握しようと思考をフル回転させていた。

では、3週間前から続いていたグレープの変化――髪が伸びたり魔力の暴走が収まったり――は、「人間の身体」から『魔界の巨石』によって創りだされた「新しい器」なる身体に移し変えられた為起こった現象なのか……。
いや。それはおかしい。彼女の体は元から異常だったのだ。むしろ以前の彼女の体の方が「作り物」で、現在の体が「人間の身体」のように思える。
何か、釈然としない。
そもそも、グレープ・コンセプトとはどういう存在なのか。
見た目は人間だ。
記憶も……人間。彼女は17年前から孤児院に居たという。
そう。彼女の思考、記憶、身体の形状は人間そのものだ。

確かに『増幅』の能力を持ってはいるが、日常ではその魔力ですら感じられない。
彼女こそが『人界の巨石』であると言うのであれば、創世後の総ての記憶を持っていてもよいのではないだろうか。
しかし、グレープの記憶は人間としてのそれしかない。
では彼女は一体。

それに『魔界の巨石』というのは確か、死んでしまった魔族や天使の魔力の結晶にもう一度生命を与える事が出来るという……「復活の力」を持つ石だ。
しかし、ファーレンの話が真実だとすると、『魔界の巨石』は自身が想像していたものと微妙に違ってくる。
『魔界の巨石』はグレープの身体の傷を治した訳ではない。一から似たようなものを作って見せたのだ。
「復活」ではなく、「生成」の力……？
しかし、あの事件の後グレープ本人から聞いた話によれば、彼女は魔界で「傷を回復してもらった」と言う。……これではまるで話が噛み合わないではないか。

……クレープの存在も気に掛かる。
彼女は何故、あの状態で人界――グレープの側に在り……そして、一体何がしたかったのか。
そもそも、世界を創世したと言われる『巨石』と言うものはどんな存在なのだろう。

「真実に辿り着こうと幾ら考えを巡らせたところで所詮、無駄ですよ」

真相を語り終えた後、それでも普段と変わらぬ慇懃無礼な笑みを

浮かべたまま、少女の様子を眺めているファーレン。

「貴女は私とは違う。
対である貴女は、ただ本能が備わっているだけの存在です。しかも、人間である貴女にはそれすら機能しない。貴女は”対としても”出来損ないの存在だった訳です。
彼女も。貴女が対であるという事実に気づいていたはず。しかし、それ故に彼女は貴女に何もしなかったし、告げなかったのでしょう。
――無意味ですから」

ファーレンは愚かだと言わんばかりに笑った。

「……つい……？」

意味の解らない単語に、思考を止めたリタルが顔を上げる。
瞬間、彼女の背筋に戦慄が走った。エメラルドが捉えたのはなんとも毒々しい鮮やかな微笑――それはリタルが始めて目にしたファーレンの真の笑顔だった。

「貴女は知らなくてもよい事です」

一頻り肩を揺らして笑った後。金は硬直しきった少女の右手で輝く魔石を映す。

「……しかし。
彼女にはしてやられました」

言って僅かに身を乗り出したファーレン。警戒し身を強張らせたリタルの細腕を掴むや否や、乱暴に自分の元まで引き寄せた。

「……あ……っ」

体ごと引かれテーブルに乗り上げる。衝撃に小さな声を上げると男の口元が怪しく歪んだ。

「……生前の、その名を知っていますよ」

囁き声に瞳を見開き、弾かれたように男を見る。

蒼白の表情に対し優雅な微笑を浮かべた天使は、静かに立ち上がった。

畳んでいた二対の白を音も無く広げると、手首を掴んだまま僅かに宙に浮く。

「……ちょ……っ」

捉えた右手を魔石ごと、ぎりぎりと圧迫しながら無遠慮に宙へ引き上げていく。

「……っ」

あどけなさの残る顔が苦痛に歪む。

その表情を慈悲深い面持ちで見つめながら、天使はゆっくりと、小さな子供に言い聞かせるような声色で少女に告げた。

「……彼女の名は、ソフィア」

足で引っ掛けたのか、テーブルの上の何かがその時、派手な音を立てて床に転がった。

衝撃と痛覚と混乱で満ちた頭の中。ファーレンの場違いなまでに穏やかな声がじんわりと浸透していく。

「その姿は女神のように艶やかな……」
抵抗の意が生じるよりも先に――
「……碧色の髪と瞳を持つ、人型魔族です」
――強大な疑問が、己を支配した。
「……な、んで」
リタルの小さな肢体は今や、優しげな笑みを浮かべ見上げる天使の手によって宙吊りになっていた。
「なんで……あんたが、知って……っ」
乾いた唇で震える声を紡ぐ。
少女を吊り上げている腕を僅かに下げ目線の高さを合わせると、その寸前まで慈悲深い光を放っていた金の瞳は瞬間、厭らしく歪んだ。
「人界で彼女が名乗っていたのは、ソフィア・フォルツェンド、でしたっけ？
確か、人間と結婚して以後は姓が変わったとの事でしたが……残念。忘れてしまいました。一度聞いたきりでしたので」
「――答えなさいよ潔癖天使っ　なんであんたがそんな事まで知って……！」
「それから。……彼女には2人の子供がいたそうです」
「……！」
「名前は……なんでしたっけ。いえ、最近物忘れがひどくて。

でも思い出せない事柄が在ると言うのは、大変気持ちが悪いものです」

そこまで口にすると。

突如、ファーレンはリタルの身体を自身に引き寄せた。

掴み上げていた右腕はそのままで。もう片方の腕で少女の背を抱き、顔を近づける。

「……！？」

がしゃんと、床に散るカップの破片。

飛び散っては血のように広がる黒い液体には――もう湯気は無い。

互いの息がかかる程の至近距離。何故か瞳を逸らせない。恐怖で歪んだ深いエメラルドのさらに奥を覗くように、ファーレンは無慈悲な視線を送り続ける。

大きく仰け反った背を支える腕（いぶつ）。全身に滲む嫌悪感（あせ）。目前で光る凶悪な金が脳裏に焼きついてゆく……

……気づけば、体内におぞましい何かが侵入していた。

ねっとりとしたそれは体中を這いずりまわる。足、腕、背、首、頭、思考……細部に至るまで――舐めるように。

「……っ」

感じた事も無い激しい悪寒。身の毛のよだつ感覚に襲われ――総てを囚われた少女は、天使の腕の中で一度大きく身を震わせた。

が、動かせたのは本当にもう、それきりだった。

（……リチウム）

「教えていただけますか？　リタル・ヤード……いえ。
リタル・ピスティスヤードさん。
……博識な貴女なら、ご存知ですよね？」

1

初めて会った時の事を、いまでも覚えている。
……といっても、ほんの一部だけだけど。

物心ついた頃からあたしは懸命に髪を伸ばしていた。
でも、あたしが欲しいのは、こんな真っ黒じゃない。
もっとふんわりした……艶やかな緑色の髪の毛だ。
あたしは神様にお願いした。毎晩寝る前に胸の前で両手を組んだ。
来る日も来る日も来る日も。いつかきっと願いは神様に届く。そう、確信を持って。

だけど。神様があたしにくれたのは、赤い地獄だった。

４つの時。たくさんの大きな窓と温かな配色が自慢の家が、お兄ちゃんたちと駆け回った緑豊かな街並みが――ううん。町そのものが世界から姿を消した。
実際、見る影も無かった。何もかもが色を無くし、何もかもが崩れ落ち、いつも鮮やかに広がっていた青い空でさえ、死んだようにくすんでいた。現実にした時の、それでもどこか信じられない現実。たった一夜が齎した惨い有様が本当に奇妙で目が逸らせなかった。
家族とは離れ離れ――どころか。もうこの世にはいないだろうと、誰かが話していたのを聞いた。
お母さんもあの夜。あたしを庇ってしまったが為に、”こんな姿”になってしまった。
本当に、実にあっけなく、あたしの世界は絶えてしまった。

その後あたしを引き取ってくれた親戚の叔母さんは初対面から好

意的ではなかった。
あたしの事をあまり好きではなかったみたいだ。
その日も”お母さん”を眺めていたあたしに、叔母さんは背後から飛び上がるような大声で言った。「リタルちゃんの髪は、お母さんみたいにずるずる長いのね」
あたしは懸命に首を振る。あたしの髪は黒だ。お母さんのとは違う。お母さんのはちっとも、ずるずるじゃない。
だけど見上げれば、とても嫌な感じの視線。いつものように、何か我慢できない位汚い物を見るような目で叔母さんはあたしを見下ろしている。

自分でも「ずるずるの髪」はどうしても気に入らなかったし、叔母さんがあたしに向ける厳しい黒と同じ色をした目も愛せなかった。お父さんや叔母さん達の髪と目は黒だったから、どうやらそっちを受け継いでしまったらしい。
お父さんはがっかりしてしまうだろうけど、あたしは昔からお母さんに憧れていた。
強くて、元気で。優しくて、凛々しい。綺麗なお母さん。
「お母さん」になりたくて、あたしは「弱虫で泣き虫なあたし」を捨てたのだ。
……なのに。
そうまでしたのに、どうして神様はお母さんと同じにしてくれないのか。あたしの世界を壊しておいて、こんな小さな願いも叶えてくれないのか。
あたしは神様を恨んでいた。当然不服だった。

叔母さんは、何も口にしていないのにあたしのお願い事がわかったのか、「お母さんみたいな派手な頭にしてあげようか」とネチネチとした笑顔を浮かべた。
いつまでも無視をし続ける神様に訴え続けていても仕方が無いか

ら、当てになりそうにないその申し出に頷いた。途端、髪を掴まれては抜けてしまうのではないかと思う程物凄い力で引っ張り上げられた。奇妙な笑顔を浮かべると叔母さんはあたしを洗面所へと引きずっていく――

――この時。あたしはさらに髪を伸ばす事を決めた。

何度切られたって。みんなが許してくれなくったって。伸ばし続けようと。そう誓った。

間も無く。周りの大人達が煩い程騒ぎ出して。

全身を調べられては同情と憐れみの視線を散々浴びせられたあたしは、叔母さんの家から遠く離れた孤児院という施設に預けられる事になった。

ようやく、引っ張れば一番長い毛先が腰まで届くようになった、そんな時。

まるで頑張ったご褒美であったかのように。

その男はひょっこりと、あたしの前に姿を現した。

あたしはもう、何をするにも億劫になっていた。

誰かと口を利く事は愚か、”お母さん”以外の何かを視界に入れるのも面倒で。孤児院では、ずっと地面ばかりみていた。

晴れて。雲がそよいで。どんよりと重たく固まって。雨が降って。嵐が来て。

山が色づいて、雪が降って、花が咲いて――

――世界(そと)がどんな色をしていようともう、どうでもよかった。

ここに、黒く崩れ落ちてしまった『あたしの世界』を知る人はもういない。

この世界には、もう誰も居ない。何も無い。

だけど。あたしはお母さんの子なんだから、きっと大丈夫。乗り越えられる。毎晩布団の中で続けていた「神様へのお願い」はいつ

しか、呪文のような言葉（おまじない）に変化していた。
あたしは、お母さんの子なんだから。他の子みたいに泣いたりしないの。
あたしはお母さんみたいに強いから。誰かに嫌われたって、平気。
あたしは強いから、何があったって大丈夫。一人でも大丈夫。
誰の力も必要としない。
……一人でだって、なんでも上手くやってみせる。立派に生きてみせる。
そうすれば、きっと――
そうやって。あたしはどんどん強くなっていって。
反対に。目に映る物はどんどん色を失っていって。
長過ぎる一日を、夢が降りてこない夜を、やっとの思いで越えてきたというのに。
突然現れたその男はいとも簡単に、あたしが一人で築き上げた灰色の世界をぶち壊してしまったのだ。

「――おまえ。母ちゃん似だな」

第一声は、確かこんな感じ。

「母ちゃん似」だなんて。そんなことを言ってくれる人はもうどこにもいなかったから、少しだけ吃驚した。
と同時に、怒れてきた。
一体どこが「母ちゃん似」なんだ。
こんなに真っ黒なのに。
唐突に空から降って来た……やけに耳に残る流麗な声に反感を覚えて、あたしはその男を見上げた。
――この時。本当に久しぶりに、空を仰いだんだと思う。

眩い青があまりにも痛くて、一度瞼をぎゅっと瞑って……
恐る恐る瞼を開けると、そこには、一際鮮やかに光る二つの青いビー玉があった。
否。それは男の目だ。
鋭利で、強い。
それは空よりも鮮やかな、青(いろ)――

「……」

この時。
なんで、目から涙が零れたのか。解らなかった。

――あたしが、怠惰になっている時でも。世界はちゃんと息をしていて。
崩壊してしまったはずの『あたしの世界』は、ちゃんと色を取り戻して、ただそこに在った。
在り続けていた。

恨み言を言うだけだったあたしに、気づかせる為に。
……いや、もう恨み言なんて聞きたくなかったのか。
神様は、あたしを、この男に会わせてくれたんだろう。
その時は、本気でそう思った。

……だけど。
違ってたんだ。

「――いくぞ」

よく晴れた月夜を背に。銀の長い髪をさらさらと靡かせて。
青い瞳はあたしを振り返った。
目の前に差し出された、大きくて骨張った手。

出発の空は確か、満月だったと思う。
見上げた夜は賑やかで。満天の星達は、男の背後で懸命に瞬いていた。まるで、この男の姿を讃えるかのように。
あたしは、右手に”お母さん”を握り締めて。
左手で……昼間に会ったばかりの――まだよく知らない男の、意外と温かな手をとった。

なんでかって？
だって。……ねぇ、お母さん。
すごくない？
あたし、あの頃から気づいていたんだよ。

この男と引き会わせたのは、神様なんかじゃ決してないって。
っていうか、どこまでもあたしに意地悪な神様が、あたしに何かをしてくれることはないんだから。
そう考えると、答えは１つだったんだ。

……ね。お母さん。
お母さんは、決してあたしを嫌いになった訳じゃなかったんだよね。

だって。この男を、ここまで連れてきてくれたのは。
あたしに会わせてくれたのは。他の誰でもない。
お母さんだったんだから……

2

電話が鳴り響いていた。
洗い物をしていたグレープが水を止めると、いそいそと廊下の受話器を取る。
その後は予想外に談笑が続いた。テレビを眺めていたリチウムはなんとなく気になって、その場で密かに聞き耳を立てる。
最初は帰りを知らせるリタルか、ＷＳＰからマメに近況を知らせるトランかと思った。
だが、グレープの話し振りからして、どうもそうではないらしい。
コロコロと鳴る楽しげな鈴の音から、どうやら知り合いらしい事は把握できた。

「……」

嫌な予感がして、リチウムは重い腰を上げた。

「グレープ」

名を呼べば、無邪気な笑顔で振り返る蒼い髪の少女。
廊下をそちらへ歩きながらリチウムは眉を潜めて言う。

「リチウムさ……」
「変われ」

唐突に告げられ……その不穏な空気に、困惑の色を滲ませるルビーの双眼。躊躇したような仕種の後、グレープは素直にリチウムに受話器を渡す。

「何か用か」
『おや。これはこれは。リチウムではないですか』
電話の主は果たして、予想通りの男だった。
よく通る透明感のある音が受話器から漏れる。
「……んだよ、ンな夜中にかけてきやがって。迷惑なんだよ」
『お二人だけの愉しい時間のお邪魔をしてしまったのでしたら謝りますよ』
普段から人をおちょくるような物言いをするファーレンは今夜、一段と声を弾ませていた。どうやら彼はご機嫌らしい。
「なんだ。なんかあったのか？　どうせまた新発売の洗剤でも試して――」
面倒だと言わんばかりに顔を歪ませそこまで言いかけてから、リチウムは背後に忍び寄ってきた黒い違和感に口を閉ざす。
何かが、妙だった。
どうして、奴は、
自分達がこの家に二人きりだと言う事を知っているのだろうか。
「……リタルをどうした」
受話器を持ち直し、怒りを抑えつつ声を上げれば、
『……相変わらず、呑みこみが早いことです』
一拍置いて、溜息交じりの返答がきた。

背後で硬直するグレープの気配を気に留めながら、
『彼女が夜道を歩いていましたので声をかけたのですよ。
最近は物騒ですからね。特にかわいらしい容姿の女の子は危険でしょう？
そこで私が丁寧にホームまで送って差し上げようと申し出た訳です。
……別に。貴方の大切な「預かり物」に手を出す気は朦朧ないですよ』

神経を逆撫でるような……どこかねっとりとした音に対し、理性を失わないよう全力で努める。声を荒げようと相手にはなんの効果も無い――むしろ喜ばせる一因になってしまう事を解っていたからだ。

「嘘八百並べやがって……」
『おや。これも見抜かれてしまいましたか』

楽しげな口ぶり。意図せずに。下にしていた右の拳が震える。

「リタルを出せ」
『ああ。そうしてあげたいのはヤマヤマなんですがね。
彼女、先程から一言も言葉を発しないんですよ』
「……」
『あのおしゃべりな彼女が。です。
珍しいでしょう？　私も心配しているのですが……』
「なにやった」
『……』
「おまえ。リタルになにをした」
『……ふ』

受話器の向こうで、唐突にファーレンが声を上げて笑った。それはリチウムが未だかつて耳にしたこともない男の笑い声だった。

『さぁ何をしたんでしょうね。泣き叫んで慈悲を乞う彼女を惨たらしい地獄へ突き落としたのかもしれません。愛らしい肢体を散々弄った後で首と手足をもいだのかもしれません。ひょっとしたら、彼女の断末魔をBGMにエメラルドに輝く綺麗な瞳を刳り貫いて私室に飾っているのかもしれませんよ』

早口で一気に捲くし立てる。この状況が滑稽で堪らない。可笑しくて死にそうだ――そんな、あまりにも狂気じみた笑い声が延々と続く。突然の相手の豹変ぶりに驚いたリチウムは瞳を見開いたまま立ち尽くしていた。滾々と湧き上がる様々な感情を差し置いて、脳裏に一際色濃く君臨する単語。それは、

――異常（おかしい）。

と、背後からシャツの裾を掴まれて、我に返る。

振り返ると、不安げに眉根を寄せた細面がそこにあった。大きな目が心配そうに自分を見上げている。

「大丈夫だ」と頷いてみせるとグレープは少しだけ表情を緩めた。

「……真面目に答えろ。リタルに何をした」

奇怪（あいて）な声に向き直り、努めて静かに声を吐くと。

『――おや。意外ですね。

てっきり発狂するかと思いましたが。まだ冷静でいられますか……』

ようやく奇矯な音を止めたファーレンは、至極つまらなさそうな

声を上げる。

『……手元に”彼女”がいるから、ですか？』

「……は？」

何か不愉快な色を滲ませた物言いに、困惑の表情を浮かべるリチウム。

ファーレンはそれには答えず、さらに暗い声を上げた。

『いい加減、返してもらいますよ。元々、ソレは私のモノなのですから』

「……何を訳のわかんねぇ事を言って……っ」

リチウムが声を荒らげ――かけた時だった。

遮るように、インターホンの軽快な音が廊下に鳴り響いた。

「……！　きっとリタルさんです……っ」

背後に居たグレープが弾かれるように玄関へと駆け出した。

きっと、不安で居ても立ってもいられなかったのだろう。

「……って、おい……っ」

慌てたリチウムが制止の声を上げるが、伸ばした手は一歩届かなかった。

細い腕がノブへと伸び、勢いよくドアを開けて――グレープは、正面に立っていた人物の瞳を直視する。

「……こんばんは。グレープさん」

そこには背の高い金髪の天使が、神々しい微笑を携えて立っていた。

「……ファーレン、さん」

「てめぇ……！」

呆然と。その名を呟くグレープ。

奥で吼えるリチウムをあざ笑うかのような笑みで一見したファーレンは、手にしていた携帯電話を切った後すぐ側にあるグレープの戸惑いに満ちた顔を見つめる。

「申し訳ありません。邪魔者のおかげで随分と遅くなってしまいました」

それは、見た事の無い程柔らかな——優しく緩んだ金の光だった。

「グレープさん。

……貴女を、お迎えに上がりました」

3

「……どうして？」

両手を伸ばせばそれぞれが壁に沿って両脇に設置された背の高い金属製の棚に届く程の狭い室内。

薄暗く埃っぽい部屋の中で、トランとクレープは向き合っていた。

頭上の青白い光に照らされた、困惑に満ちた表情。男の顔を威厳を放つ強い赤の瞳が見上げる。

両者の間に長いようで短い沈黙が流れた。

「何があっても……って」

口火を切ったのはトランの方だ。

人懐っこい黒の瞳が、自分を見つめている。

「……一体何が、あるって言うんだよ……？」

「……」

3週間前に、ソレが定まってから今日まで。まともに顔を合わせる機会が無かった気がする。

……いや。自ら機会を、意図的に避け続けてきた。

そして、今。こうして、久しぶりにトランの姿を正面から間近で直視している。

クレープは、はっきりと実感する。

その瞳。

その顔。その肉体や、その声も。

その総てが、どうしようもなく、

自分はこの男が――好きだ。

「おまえの言っている事はわかる。
けど、理由が解らない。解らなければ、俺は何も答えられない」
「……」
「教えてくれ。クレープ。
おまえは何を、
……どこまで、知ってるんだ」

何かを懇願するような目。
クレープは感情の伴わない赤でその姿を見ていた。
――そう。あくまで感情は出さない。
この男にだけは、見せてはならない。そうしなければ、
自身の感情にこそ、溺れてしまう。

「ごめん。トランちゃん。
今、時間、本当に無いんだ。説明してる暇なんてもう、無いの。
アタシはいかなきゃ」

俯き伏し目がちの表情でポツリポツリと言葉を落とす。

「……ケド。これだけは言っとく。
トランちゃんが、『炎帝』を持っている理由。
ソレを持ち続ける理由。
こんな所にまで来た理由。
今ここに、生きている理由。
”アタシ”は、ゼンブ知ってる」

トランの身体が僅かに揺れた。
見上げれば、その目は大きく見開かれていた。青い顔。頬を流れる一筋の汗。動揺の色が滲んだ黒の……中心に、赤が灯る無表情の

顔が在る。

「トランちゃん。
識(し)っていても、アタシは言う。
炎帝をこれ以上使っちゃダメ」
「……クレープ」
「トランちゃんが果たさなければならない約束なんて、どこにも無い。
無いのよ。
……だって。アレは……っ」

そこまで口にすると、
クレープは一旦言葉を切った。
抑えていても流れ出てしまう感情を、なんとかせき止める。

「クレープ……？」
「……あれは、避けられない事故。――そう、事故だったの。
衝突した当人等、それに……招いた者が責任を負うべきなの。トランちゃんが背負う必要なんてない」
「クレープ、それは……」
「違わない。トランちゃんは……アナタは単なる被害者だもの。
それに、そもそも「生き物」っていうのはね。生きて存在する為に最善を尽くす生命(もの)なの。出来る総てを出し尽くしてそれでもなお存続しようと足掻き続ける。それが生きると言う事。総ての生き物が等しく請け負う義務よ。
――ねぇ。トランちゃんはちゃんと覚えているはずデショ？
あの時。アナタは必死で、手に届く距離に在った藁(カケラ)を掴んだ。
助かりたいと願う大勢の生き物の声をも背負って……ソレを手にした。それにアナタは、掴むべくして掴んだの。ソレは最初から、アナタにしか扱えない藁(もの)だったから。

……それだけの、話。
アナタがした事は、たったそれだけの話よ」
「……」
「だから藁を差し伸べた者がその時、どんなふざけた事をくっちゃべろうが要求しようが、そんな事、「生き物の義務」を前にして提示すべきものじゃない。ゼンブ無効よ」
「……」
「あの夜たくさんの人間が……多くの生命(いのち)が絶たれた。その中でトランちゃんはあの夜死ぬ運命だったはずの生命をソノ力で助けた。それは、アナタの意思。それから、今を手繰り寄せたのはトランちゃん自身デショ？　ならば、義務が生じる。
トランちゃんは今ちゃんと、生きて、ここに存在しているのだから。
自らが救った生命に対しても、そう。彼女の為にトランちゃんにしか出来ない事はたくさんあるはず。それ等を果たす為にも……これからも存在し続けなさい。
……いいえ。
己が望む場所に。望むがままに。存在(い)てもいいの。トランちゃんは」
淡々と告げる自身を、トランはただ、見つめていた。
困った顔のまま、それでも静かに聴いていた。
変わらぬ、色。
「……それは」
やがて、男の唇が僅かに動く。
「……」

この時ばかりは、彼の真っ直ぐな瞳に絶望を覚えた。
――やはり。

「それは、出来ないんだ。どうしても」

やはり……そうなのか……？

「確かに、覚えている。……最近、よく夢でも見るんだ。
あの時。彼女と約束をした。だから今の俺が在る。
本来俺は存在していないはずの人間なんだ」

そうなって、

「それに、『炎帝』は彼女の物だ。あの夜大勢を救ったのは、彼女の存在。もっと言えば……この『炎帝』なんだよ。
……俺じゃない」

しまうのか。

「だから……クレープが言ってくれる事はすごくありがたいけど。
今のコレは、彼女の物だよ」

３週間――いや、この１０ヶ月間を経て、ようやく至った事実。
いつの間にか躙り寄って来ていた闇（むらさき）に染められた視界。その中心から響く男の声は諭すように、ゆっくりと、優しく……告げる。
その重い響きに、泣きたくなった。
一体どこまで解っていて、この男はそう口にしているのだろう。
眩む、程に。男の主張は、どこまでも真っ直ぐで……全く、
正しかった。
……まるで自分が、駄々をこねるガキンチョのような気がした。

どこまでも頑なな男。
運命に忠実な男。
だからこそ、アナタは生まれてからずっと。
この道を真っ直ぐ、歩んできた。

「……っ」

……でも。

「――トランちゃんは、あのコが好きなんデショ！？」
「……！」

眉根を寄せて激昂する。
黒瞳を見開いたトランが、正面のクレープの――激しく燃え上がる赤を見た。

……嫌だ。

「あのコの事が好きなら！　ちゃんと根性入れて守ンなさいよ！」

嫌だ。

「トラン・クイロとして、これからも守り続けなさい！」

嫌だ。
させない。

「大体トランちゃんてばいつもいつも――情けなさ過ぎなのよ……っ」

……絶対に、させない。
強いてでも。
真っ直ぐなこの男を、捻じ曲げてでも。
「過去とあのコと、どっちが大事なの！？」
アタシはこの道を引き返させる。
「……クレープ」
トランの……妙に落ち着ききった声に。
ヒステリックに叫びながら、ボロボロと涙を流している自分に、
ようやく気づいた。
「……っ」
……ああ、もう。ホント。
情けないったらありゃしない。
あまりの失態に、がっくりと項垂れて……
「……あのコが、危ないの……っ」
とうとう、吐き出してしまった。
「……」
「リチウムはアイツには絶対に勝てない」

――言葉は溢れて、
「……アタシじゃもう……」
想いは頬を伝って、
「護れないの」
冷たい床に、吸い込まれるように落ちてゆく。
「ホントはアタシ。これ以上トランちゃんに炎帝を使って欲しくない。でも……」
てんてんと、なんの力も無く、
「使わせようとしてるの……」
弾けて、消えゆく――
「……」
この男を前にすると、自分はいつもこうだ。
ぽろっと言葉が、飛び出してしまう。
どこまでも無様になってしまう。
――人間に。成り下がってしまう。
「……グレープが危なくても、アタシが頼んでも、それでもトランちゃんに、拒否してほしかったのに……」

支離滅裂だ。
こんなの、
――最低だ。

俯いたまま、溢れる涙が床に落ちるのを見ている。
雫がぽとぽとと、コンクリートを濡らした。

これは自分達の問題。
だから最初から、自分達で解決しなければならなかった。

……気づいてからというもの。
ここ3週間、一人で3空間を渡り歩いて総てを把握した。
状況は思っていたよりも大分――不利だった。

このままいけば、グレープも消される。
世界に混乱が満ちる。そして、
殺戮の時代が蘇る。

――いや。
そんな事はいい。
一番我慢ならないのは。

この真っ直ぐな男が、散々自分達に利用された挙句に消えて無くなってしまう事なのだ。

「……っ」

こんな、泣いていたら、トランは絶対に、自分の頼みごとを聞いてしまう。

止まらない。どうしよう。
泣いていたら、
この男に、感情を見せたら――
「クレープ」
――いけないのに。
凍えた身体を包む、暖かな感触。
一瞬、総てを見失う程の、心地よさ。
トランはクレープの細背を抱き寄せる。
首元にかかる息が、
「ありがとうな」
一言。そう呟いた。
「……馬鹿トランちゃん」
重い扉が閉ざされる音。
一人残されたクレープは、身体を包むコートを自身ごと抱き寄せる。
トランの匂いと、優しい余韻。
「……馬鹿クレープ」

――本当ならば。
自分は彼らに、頼み事1つする事も許されなかった。
アイツの事はいえない。
自分だって、これまで、彼らを利用してきたのだから。
『招いた者』なのだから。

4

トランは走り続けていた。
クレープと別れ、職員たちの静止を振り払いＷＳＰ内部を出る時にはもう、クビを覚悟していた。
それでもいい。
養父のためにと思って生きてきた。
かつての恩人のように……そう生きてきた。
『炎帝』をくれた彼女のために。生きなければならないと、
そうやってここまで来た。
誰かの言うように、この命は紛い物で。
この存在は偽物で。
だからこそ、これからは自分のためにではなく、誰かのために在り続けようと――
――そんなものは……詭弁だ。
だって、それならば何故。
自分はあんなにも昇進を拒んでいた？
リチウム達を逮捕しなかったんだ。
彼女と。
離れたくないと。
側にいたいと。そう願ってしまったんだ。

白が降る町。シンと張り詰めた冷たい空気を裂いて全力疾走する。
いつもとは違った足音が、己の激しい鼓動と息遣いと共に夜の街に反響する。
ザッザッザッザッ……！
雪が薄っすらと積もった道路。大柄の人とぶつかり激しくよろけて転びそうになる。
大地を踏みしめなんとか堪えた。「どこ見てンだ！！」背後から

聞こえてきた怒鳴り声に、奥歯がギリっと鳴る。
――過去とあのコと、どっちが大事なの！？
己の中で何かが弾け飛んだ。
走った。
ひたすら走り続けた。
本当に、そのとおりだと思った。
地位や名誉なんかクソくらえだ。
そんなもの、自分は欲しくない。
そんなもののために自分は今、生きているわけではない。
後悔を繰り返す為に、ここに居るのでは、決してない。
そうだ。
――繰り返すまいと、あれほど誓ったのに。
息せき切って冷たい闇を突き進み、たった一人で駆け抜ける。
やがて、ホームが見えてきた。
と。
マンションの１１階から、恐ろしい程莫大な魔力が噴出された。
蒼い光。
「……グレープちゃん……っ」
トランはさらにスピードを上げ――今、マンションの入口に手をかけた。

「なんでここ（ホーム）が判った」

立ち尽くしたグレープの細腕を掴むと、リチウムは乱暴に自身の背後に引き寄せた。

このホームには何重ものバリアーが仕掛けてある。

他にも、リタルが仕掛けた多種多様のセキュリティ装置。中には悪戯めいたかわいらしい仕掛けから極悪非道な罠（トラップ）まで様々だ。

どのような魔力を行使しようが総てを突破するには相当な困難を要する。況して、初めて訪れる者が、巧妙に仕掛けられたそれらを全て看破し無傷で最奥に到達する事は不可能に等しい。

勿論住民票等も偽造してある。電話に使われる魔力だって解析出来ぬ様改造済みだ。自分たちがここに住んでいる事を知り得る者が居るとすれば、それはここに住んでいる自分たちか、自分たちが招きいれた者だけ――のはずだった。

鋭い青の眼光に、ファーレンが笑んだ。

「さて。何故でしょう。

察しのいい貴方なら、簡単に想像出来るとは思いますが……まぁ、こういう訳です」

言いながら、ファーレンは玄関から一歩。身を引いた。

彼の後ろに立っていたのは――

「リタル！」

「リタルさんっ」

黄緑色の髪の少女だった。

「……」

共有廊下で立ち尽くした少女はリチウムとグレープを視界に入れても反応……微動だにしない。

人形のような無心の表情。暗く濁った双眼はもはやビー玉だ。

「……ファーレン、てめぇ」

ファーレンは魔力で生体を操る。

まさに今、リタルがその状況なのだと一目で看破したリチウムははっきりと瞳に敵意を示した。

「まぁ、お待ちください。

それよりも1つ貴方に確認したいのですが」

殺気を全身に浴びせられた本人は、しかし涼しい顔で白い衣から何かを取り出すや否や、リチウム達に掲げて見せる。

「……！」

「それは……っ」

硬直した二人が瞳を大きく見開いた。

廊下の明かりをその身に受けて光り輝くソレは黄緑色の石だ。

「ええ。彼女の持ち物です。『魔眼』、でしたっけね。

貴方方が呼ぶ名の通り、この魔石は魔眼の魔力を秘めた魔族の結晶です。

この魔力を持っていた……彼女ですがね。私とも少し縁がありまして。と言いますか、彼女はちょっとした知り合いなんですよ。

そんな訳で、リチウム。私は貴方に尋ねたい事があるのです。
リタルさんはいつから魔眼(これ)を持っていたのでしょうか。彼女の外見から察するに、どうもここ最近ではないように思えるのですが。
彼女を引き取った貴方なら当然、理解して……」
「リタルに返せ！！」
遮るように、リチウムが吼えた。
「――それは……アイツのだ」
銀髪の男は全身に怒りを纏っている。硬く握り締めた拳は微かに震え、射るような視線がファーレンを貫いていた。目が合った瞬間、誰もが等しく自分の最期を覚える、そんな肉食獣染みた瞳を携えて。
男の絶大な怒りの様を満足げに眺める金の瞳。
たっぷりと間を開けると、薄笑みを浮かべたまま軽く頭を振ってみせた。
「それはできません」
「……ンだと」
「こちらにも都合と言うものがありましてね。大変申し訳ないのですがこれを彼女に――貴方方にお返しする訳にはいかないんですよ」
「都合だ？」
「さすがの私も驚かされました。
まさか未だに我々の邪魔をしていたとは。想像だにしませんでした。彼女に関しては、すでに1年前に手を打っておいたはずでしたから。
いやはや。この私とした事が、完全にしてやられました。これもダヴィ様の策略でしょうか……」
「〜何を訳のわかんねぇ事をごちゃごちゃと……！」

リチウムが吼えるのと、ファーレンに飛び掛かるのとは、ほぼ同時だった。

「言ってやがンだてめぇ！！」

握り締めていた拳が、ファーレンの左頬目掛けて飛ぶ――

寸前。

「……！！」

「リチウムさん！」

弾丸のようなリチウムの動きが、止まる。

身体が硬直して、言う事をきかない。まるで、自分の体（もの）でないように。

体内に在る死球の魔力でさえも、同様だった。集中――せずとも、異質な魔力が蛇のように全身を這いずり廻っているのを感知できる。

――これが、ファーレンの魔力か。

「……くそ……っ」

それでもリチウムは、目の前の相手を今すぐ殴り倒すべく拳に全意識を集中し続けた。

ブルブルと激しく揺れる左腕。

「無理ですよ。貴方は、決して私には勝てません」

目前に震える拳を突きつけられた状態で、しかし、ゆったりと笑みを浮かべたままファーレンは言い放つ。

「『死球』を操る貴方は、如何なる存在に対してもほぼ無敵でしょ

う。通常ならば、私のこの魔力ですら、消されてしまうかもしれません。
しかし。貴方は私にだけは勝つ事は不可能なんです。何故ならば」
眼前の厳しい青に、不思議な金の色が侵食してゆく――
「『貴方』はそういう風に出来ているのですから」
「……てめ……っ」
悔しげな眼差しを、その全身を。金の瞳が完全に捉える。間も無く、リチウムの拳が完全に静止した。
ファーレンはそこでようやく違和感を覚える。
「……ほぅ」
いつからだろう。
リチウムの背後に立っていたグレープが、彼女にしてみれば厳しい目つきでファーレンを見据えていた。
その細身を仄かな青光が包み込んでいる。
柔らかく靡く蒼髪。キュっと結ばれた唇。
胸の前で両手を組んだ彼女が僅かに、異質の魔力を放っていた。
「『増幅』の力ですか……。残念ながら、それは無駄ですよ。グレープさん」
「……え？」
「この方がたはすでに私の支配下にあります。故に今の貴女のか弱い光は彼らには届かない。私の魔力が絡め取り、総てを吸い尽くしてしまうでしょう」
「……！」

果たしてそれは真実であった。
グレープが幾ら祈ろうと彼らの身体が動くことは無い。
彼らの上には、邪悪な笑みを浮かべる天使が君臨していた。

「……お願いしますっ　……リタルさんとリチウムさんを、放してくださいっ」

それでも力を送り続けながら、懸命な鈴声が響く。

「リタルさんに……その石を返してください……っ　その石は……っ」

必死に訴えながら、グレープは思い出していた。
3ヶ月前の早朝。自分に『魔眼』を見せた時の彼女は、
とても、穏やかで、優しい表情をしていた。

「その石は……きっと。リタルさんにとって、とても大事なものなんです。……どんなものよりも」

一目見ただけで、彼女がいかに『魔眼』という石を大切にしているのかが判る程に。
宝物を扱うような仕種で、彼女は『魔眼』を抱いていた。朝日に照らされたその光景はなんだか……
グレープには、とても尊いものに感じたのだ――

「返して、ください」

徐々に増してゆく青の光に浮かぶ、強い赤の輝き。
しかし、悠然と佇んでいる天使の表情に危機感はまるでない。彼の言うとおり、この声と共に発する自身の力では、彼の意思を止め

る事は出来ないのだろう。
それでも彼女は決して諦めようとはしなかった。
毅然とした態度で、ファーレンと対峙する。
「返せない、……と言ったら、どうしますか？」
一呼吸置いて、グレープは静かに告げる。
「あなたを、許しません」
強まる眼光。
さらに、少女の華奢な身体が発光する。
崇高な光。が、それはどこか、晴れた日の穏やかな空を思わせる優しげな波動を含んでいる。
健気な姿を愛しげに眺めながら、金髪の天使は弱々しく呟いた。
「それは……少し、困りますね」
「……」
グレープを見て、少しだけ苦笑する。
一瞬見せたその瞳は、グレープが今まで見てきた金の髪の天使のソレと少しも違わぬ物だった。
グレープは、少しだけ表情を緩める。
「……何故？」
「……」
「……どうして、こんなことを……」
その言葉に、ファーレンは、

「……『何故？』、ですか……」

眼鏡をくいっと上げた。

青の光を反射したレンズが、彼の瞳を隠してしまう。

「私にはある願いがあります。

しかし、それに手を伸ばそうとすれば毎回、邪魔をする輩が現れましてね。

どれほど願い、どれほど行動し、あちこちを駆け回ろうとも、それを手にする事はこれまで、叶いませんでした」

「……願い？」

「……な、に……言って、やがんだ……っ」

グレープの『増幅』が届いたのか。リチウムが微かな声を振り絞る。

「リチウムさん！」

しかしグレープの声に彼は振り返らなかった。その身は未だ固まったままだったのだ。

関せず、ファーレンは話を続けた。

「ですが。

つい3週間前のことです。ようやく、現状を解決する手立てが見つかったのです。

それが……」

言って、ファーレンは、再びリチウム達の目の前に黄緑色の魔石を掲げて見せた。

「この魔石だったというわけです」
「……魔眼がどうしたってんだこら！」
唐突に金の視線が、目前の青に移る。
「解りませんか、リチウム。
人界のストーンハンターだけではない。上級天使（われわれ）だってこれまで『人界の巨石』を探し続けていたのですよ。
『巨石』と言えば莫大なる魔力を秘めた石。しかし、数年前から――人界時間で言うと大体１７年前からでしょうか。その魔力は愚か、波動ですらまともに感知される事が無くなってしまった。人界は愚か、天界でも、魔界でも、です。
１７年前に何らかの事態が起こり、『人界の巨石』が失われてしまったというのならまだ理解できます。しかし、人界はこの通り、未だ存続している。
貴方になら解るでしょう。この不自然さを」
「人界の……巨石……？」
「聞くなグレープ！」
「無駄ですよリチウム」
冷たい笑みを浮かべ、言い放つファーレン。
二人の男の言葉に困惑した表情を浮かべるグレープの元へ。
ファーレンはゆっくりと歩を進めた。
「逃げろグレープ！」
一際険しい声に、グレープがビクッと身を震わせる。
が、即座にクビをぷるぷると横に振れば、向かってくるファーレンをキッと睨んだ。

「彼の言う通りです。
私から逃げてみてはいかかですか？
逃げ惑う可憐で儚げな少女を追い詰める。そんな狩りを楽しむのも、また酔狂な……」
「逃げません」
「……」

恐怖心を打ち払い、しっかり地を踏みしめ。迫る脅威に立ち向かう少女。

「わたしは、もう逃げません。
リチウムさんと、リタルさんを。離して下さい。
……返して、ください。ファーレンさん」

強く響く鈴声に、リチウムとの間に立ちはだかった金髪の天使は極上の笑みを返した。

「……幾ら貴女の願いでも、それは聞けません」

やがてグレープの目前まで来ると、天使は柔らかな金の瞳で、グレープの顔を覗き込んだ。
怯えたように見開かれた瞳。白く、なだらかな頬を骨張った手が愛しげに撫でる。
瞬間。少女の身体は天使に抱かれた。

「……っ」

グレープが身を震わせる。

「ファーレン！　てめぇ！！」

「精々、非力な己を呪ってくださいね。リチウム」

リチウムに声を返しながら、その目は、己の腕に抱いたグレープを真っ直ぐに捉えている。

繊細な造りの白く長い指がグレープの輪郭をなぞった。ゆっくりと最下まで到達すると、その形の良い顎をクイっと上げる。

完全に捕らえた淡く染まる唇が微かに言葉を紡いだ。

「……ファーレン、さん。どうして……」

「総ては貴女を守るためなのです」

顔を近づけ、天使は囁くように少女に告げた。

「……何を言っているのか、わかりません」

負けまいと、必死に見上げるルビーの光――その僅かな抵抗に、ファーレンは小さく笑む。

「理解出来なくても、よいのですよ。

もし、この意味を知り、それでも貴女が拒否しようと、私は……」

言ってファーレンが背後を振り返ると、

拳を構えたままのリチウムの前――共有廊下に立ち尽くしていたリタルが、

「……」

ゆっくりと。両手で銃を構えた。

銃口は正面――上を向いている。

濁った暗い双眼が見上げる先で、静かに、バリトンは呟いた。

「……リタル」

リタル愛用の銀の小型銃だ。
弾丸には魔石を使用しており、着弾後魔力を放つという強力な改造銃である。
気づいたグレープがそちらを見遣った。

「リタルさん！？」
「……」

激しく震える細腕は、抵抗の証か。
しかし、それでも顔色１つ変えぬ少女は、正面のリチウム目掛けて……

――引き金を引いた。

「……っ」
「リチウムさん！！」

乾いた銃声とグレープの絶叫。
が、しかし。

パキ……ン

破壊されたのは、リチウムの頭部を越えたさらに奥――

――ファーレンが掲げていた『魔眼』であった。

「……な……っ」

「……」

背後でガラスが割れるような音を聞いたリチウムが、
頭上を見上げたグレープが、
表情を変えぬリタルが。
その場に居た全員が息を呑む。

粉々に砕けた黄緑の魔力の結晶――欠片達が、キラキラと廊下の明かりを反射しつつ宙を舞った。
鮮やかな煌きは、降り注ぐ雨のように天使の足元に至る。軽く綺麗な音を奏でて辺りに散った。
――瞬間。カケラだったものが音も無く塵と化す。
魔石だったもの――彼女は、今。完全にこの世から消失した。

「……力ずくでも、実行に移しますから」

ファーレンの冷淡な呟きと共に呪縛から解放されたリチウムとリタル。

「ファーレンてめぇ！！」

バタンと、何かが落ちたような音。
リタルは銃を握り締めたまま、呆然と冷たい廊下に座りこんでしまい、
リチウムは即座に発動させた死球を纏った拳で、グレープの細背を抱くファーレンに殴りかかった。

刹那。

ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ……

青白い光の渦。

突如部屋の中に、グレープを中心として莫大な風が巻き起こる。

あまりの衝撃に廊下の明かりが、室内に設置されていた総ての物が、リビングの窓が、玄関のドアが。ありとあらゆるものが一瞬の内に激しい音をたてて破壊される。

「……っ」

膨大な魔力の前に死球は掻き消され、リチウムの身体も例外なく襲い狂う衝撃に跳ね飛ばされた。

その背後ではすでにリタルの小さな身体が無残にも廊下の壁に叩き付けられていた。

「……なんだ…っ！？」

辛うじて玄関の端を片手で掴むと顔面を反対の腕で防御し、その場で耐えるリチウム。それでも身体は徐々に後退してゆき――

「……っ」

――それだけだった。

風はその一瞬で治まり、

真っ暗な室内に、再び静けさが降りる。

――しかし。

依然、猛烈な違和感は消えない。

「……これは……！」
「わかりますか。リチウム。
これが、以前まで人界に満ちていた『人界の巨石』の魔力。
――彼女本来の力です。
……いや、元々満ちていた魔力が『魔眼』の魔力の消失により姿を現したというべきか」

リチウムが再び目を開けた時。
意識を失い崩れたグレープの身体を抱きかかえたファーレンがそこに立っていた。

「……てめぇ……っ！！」
「自身の無力を嘆き、呪いなさい。リチウム・フォルツェンド。
我が目の前から――世界から。彼女（ひかり）を奪ったおまえの罪は重い」

歪んだ金の瞳はあからさまな殺気を含んでいた。

5

「リチウム！！」

緊迫した場を裂く男の声。駆け込んだトランは眼前広がる異常な光景に目を丸くした。

この４ヶ月間。仲間と暮らした賑やかなホーム。毎日出入りした共有廊下の様子が一変していた。

無残に拉げた１号室の玄関の扉や、見覚えの在る靴、傘の数々。玄関や廊下に設置されていた……破損しそれぞれに形を変えた小物類などが転々と廊下に散らばっている。そして――

１号室からは、強烈な青白い光が差していた。

露になっていた室内に存在するのは、闇と……青白く輝く不思議な人型。室内を満たし、さらに共有廊下へと溢れ出でる濃厚な魔力に……トランはどことなく、彼女の感じを覚える。もう一度瞳を凝らせば、青白い光の中心――発光しているのは、彼女だった。意識は無く、その身は今、廊下に浮かぶ金髪の天使の元にある。

一人対峙しているのが、リチウムだ。

彼は、自分の呼びかけに答えようとはしない。それだけ緊迫した状況だという事が見てとれる。

驚く程すぐ側に居たリタルは足元――共有廊下の壁に背を付けた状態で、ぺたんと力なく座っていた。

気配がしなかったのも当然だ。見た目に解る程、彼女は茫然自失の状態だった。

「リタル！　おい、どうしたリタル！」

幾度呼びかけても反応すらしない。

鮮やかな輝きを放つ双眼のエメラルドは今。完全に光を失ってい

た。

「……まぁ、そうなってしまうのも当然……なのかもしれませんね」

――突如現れた、予定外の存在。全身びしょ濡れの男はどういう訳か。この真冬の最中で信じられない程薄着だった。というか、先ほど対面した時に着込んでいたスーツのジャケットを動き辛さからか脱いでそのまま来たのだろう。水気を含んだ白いシャツ一枚に下はジャケットと同じ濃紺のズボン。その頭には点々と大粒の冷たい白が付着している。

その場にしゃがみ込んで少女の小さな肩を必死に揺らし続ける背を眺めつつ、ファーレンは優雅に笑んだ。

「これまで彼女が所持していた”母親（まがん）”は先程、彼女自身の手によって。世界から完全に消失しました」

――声と共に吐き出されていた白い息が、止まる。

「残存し続けていたその魔力ですら、たった今暴風となって……

その意思共々、失せてしまったのですから」

瞳を見開いたトラン。

淡々と告げられた事実（こえ）を、彼が噛み砕き、完全に飲み込んでしまうまで、後数秒を要した。

「……なん……だって……！？」

愕然と、トランは動かない少女の顔をもう一度覗き込んだ。

ぼうっと虚空を見続ける瞳。その無の表情からはなんの感情も読み取れない。

次いで、少女の小さな手を見る。
左側には普段と変わらぬ――『転位』の石のついたグローブを装着している。
だが、右側のグローブには……『魔眼』という、黄緑色の石が――見当たらない。
どこにも。

「……！」
「驚きました。
これまで、魔族と対峙した時でも怯む事無く対等に渡り合える強さと度胸を見せ続けきた聡明な少女が、たったこれしきの事で我を失うとは。
やはり。リタルさんも歳相応の幼い子どもだったという訳です。
私は少々、彼女を買い被りすぎていたのかもしれません」
「……リタル」

トランは記録している。
幼かった頃。いつもぴーぴー泣いていた弱虫の少女が母親を真似て髪を伸ばしたがっていた事を。
愛らしい少女は大変なお母さんっ子で、よく父親が嘆いていた事を。

その後訪れる真っ黒に塗り潰された時間を経て。
リチウムと会った時には既に。彼女はある程度立ち直っていたらしい。
元気な彼女の手にはいつも黄緑色の石を入れた小さな巾着袋があったという。

再会したのは半年前。一目で解った。
その性格が、母親そっくりの快活さで。

髪と目が、母親のソレと同様に染まってしまっていたからだ。
それがどういう事だったのか。
深くは考えなかった。……いや、周りに感じさせぬ程に彼女は完璧に母親と同化してみせていたのである。
その変貌っぷりが、無意識だったのか、意識的なものだったのかはわからない。
ただあの黄緑色の石だけが変わらず彼女の一番近くに在った。
――なんてことだろう。
少女の中には。
幸せだった昔も。たくさんのものを失ってしまった今でも。
元々の容姿や性格を変えてしまう程に”母親”で埋め尽くされていたというのに。
再び――それもたった今。
”母親”はまたも少女の目の前で、
粉々に、砕け散ってしまったのだ。
――歯を食いしばり、
「……貴様……っ」
トランは、凶悪な笑みを浮かべる天使を振り返った。
「そういえばトラン。貴方、よいのですか？　こんな所にいて。
しかも、そこの愚か者と共に上司に楯突こうとしている。
折角昇進させてあげたというのに、棒に降るつもりですか」
対しトランは答えない。
ただ、強い意志の篭った瞳でかつての上司を貫き続ける。

体内を凄まじい速度で巡る炎の魔力は、怒りの熱で燃え盛っていた。外観から見て取れる程に。
先ほどから身構えているリチウムにしたって、同様だ。
彼らの様子を鼻で笑うファーレン。
抱えている意識の無い少女の蒼い髪に、唇を這わせ、横目で彼等を見下ろした。

「……全く。把握してはいましたが、つくづく。仕様も無い方々だ。
歯向かおうとしたところで貴方方は、彼女は愚か、そこの子ども一人でさえ救えぬ程の無力な存在。
第一。
なにもかもがもう、遅いというに……」
「――ほざきやがれ……！」

リチウムが唸る。
同時に、その左手に従えたのは死球。
闇よりも一段と黒光を放つ無を前に、ファーレンはあくまで上品に笑む。

「なるほど。それを私に放つ気ですか。
いや、放てませんよね。彼女がここに居るわけです。
幾ら器用な貴方でも、彼女を残して私だけを消すなんて芸当は出来ないでしょう。
しかし私に近づけば近づいた分だけ、より強力な呪縛にかかるという事を貴方は既にその身をもって理解してくれてますよね」
「……っ」
「貴方方は無力なのです。いい加減弁えて、無理などせずに。そこで指を加えてみているといい」

言って。

ファーレンはグレープの身体を宙に掲げた。
「神聖(わがあるじ)なる少女の降臨を」
意識の無いグレープの体から再び迸る、強い青の閃光。
「……っ」
「なんだ……！？」
刹那、彼等を異変が襲った。
室内の重力が幾倍にも増したかのような。そんな重圧感が全身に圧し掛かる。
……空気が、とても重い。
濃密なこれは、まるで。
3週間前、足を踏み入れた魔界のそれのような――
「――ご苦労であった。ヘルファーレン」
混乱に満ちた室内に、透き通ったアルトが降臨する。
声に見上げたリチウムとトランの視線の先に、
強大な魔力――紫の光を細身に纏った少女の姿が浮かび上がった。

6

足元まで伸びたストレートの紫糸。鮮やかな髪色より数段濃い紫のローブをその少女は身に纏っていた。裾から伸びた細い脚線美にその瞬間、誰もが目を奪われる。
長い睫毛に縁取られた可憐な赤の瞳は一同を視界に収めると、ゆっくりと閉ざされ――

「――……」

やがて降りてきた重力に、彼女は静かに身をまかせる。
白い素足を隠すローブ。遅れて、ふわりと髪が床についた。

「……おまえ、は……」
「……！」

場に降臨した少女の姿にリチウムが……、特にトランの身が硬直する。
少女は、グレープに酷似した姿――その顔で、
伏し目がちだった赤い瞳を再びゆっくりと開眼し、二人を見た。

「……我が名はトピア。この世界、フロースの監視者だ」

彼等が知っている彼女達のソレよりも低く響く、どこか印象的な音が室内に浸透する。

「監視……者？」
「ト……ピア……」
「トピア様。

『人界の巨石』。確かに貴女の元へ」

ファーレンがグレープの身体を差し出す。
意識の無いグレープの姿を一瞥するとそれっきり彼女には興味を失くしたようで、
トピアと名乗る紫の少女は、再び正面へ視線を投げる。
そこに黒髪の青年の姿を見つけると、

「……トラン、か」

固まったままの彼にトピアは柔らかく微笑みかける。
少女が初めて浮かべた表情は……なんとも慈悲深く。衝撃を受ける程、それは、グレープそのものだった。

「後少し……だな。
我は幾らでも待とう。
おまえが、かつての約束を果たす瞬間(とき)を」

その姿、その言葉に、トランは驚愕の表情を示す。

「……貴女は……まさか……！」
「トランちゃんに変な色目使わないで」

刺々しい女の言葉に、一同が廊下を振り返る。
いつの間に来ていたのか。場にクレープが姿を現していた。
紫の少女と同じ造りの顔、同じ体型の彼女は、光を失くした少女の頭上に居た。ふてぶてしい態度で両腕を組み、仁王立ちの体勢をとっている。対照的に、夜風を含み柔らかく揺蕩うのは、神々しい程繊細な輝きを放つ金の髪。
宙に浮く――その姿は実体だ。

「クレープ……！」
「おまえ、その姿は……？！」

驚きに声を上げたトランとリチウムには取り合わずに、正面の――紫の少女へと辛辣な眼光を放ち続けるクレープ。
やがてトランを護るように廊下に降り立った彼女は、今。トピアと対峙した。
交差する赤。

「……ダヴィか」

素っ気無く呟く。紫の髪がさらりと揺れた。
トピアは目を細めて自身と同じ容姿の少女を見る。

「このまま逃げ堕ちるつもりなのかと思ったが。観念して我の前に姿を見せたか」
「……人聞きの悪い。ボケーっとした面してるくせに、口が悪いのは相変わらずねアンタ」

対するクレープの持つ強い赤は厳しく相手を貫き続ける。

「アタシは、ただ、アンタのやり方に疑問を持っただけよ。
……さっきもそう。
自分で『監視者』だなんて名乗ってたけど。
アンタとっくの昔に『監視者』の枠、超えてンじゃない」

僅かに吊り上げられた眉。真っ直ぐな瞳。責めるような口調に、しかし対峙した相手は平静のまま静かに言葉を紡ぐ。

「おまえに」
「……」
「今のおまえに、我が責められるのか？」
「……それでも。今のグレープは関係ないはずデショ」
「……」
「如何いたしましょう。トピア様。
もう用済みとは言え、万一の事もあります。念のため、彼女も捕らえておいた方がよろしいかと」

トピアのすぐ後ろに控えていたファーレンの言葉に、それまで訳もわからずただ事の成り行きを見ていたリチウム達が即座に反応を示した。
クレープの手を引き背後に隠すトラン。
リチウムは死球を片手に身構える。
そこで初めて死球を――次いでリチウムの姿を直視したトピアが、露骨に顔を顰めた。

「……不愉快な」
「……ソイツを置いて、とっとと帰れ」

露骨に眉根を寄せる少女に対しリチウムは鋭い眼光を投げる。
対峙する少女、そのすぐ後ろに控えたファーレンに抱えられて意識を失ったまま強大な魔力を放ち続ける少女の姿が、青の視界に入っていた。

――最近の彼女は、どこか変だった。

今日も、ホームに帰ってきた彼女は、
ただ、ボーっとこの部屋のドアの前に立っていた。
俯き、不安げな表情。
伏し目がちの瞳。
何を考えているのか、容易に想像出来た。

守ってやらなくてはならない。
彼女の異変に気づき、この3週間。皆がそれぞれに行動していた。
守ってやらなくては……きっと誰もがそう思っていたに違いない。
しかし。
守られていたのは、果たしてどちらなんだろう。

クレープが姿を見せなくなり。
トランの昇進が決まって。
リタルや自分が、1号室で寛ぐ事が無くなった。
自身さえも、変わってゆく中。
徐々に崩れゆく日常を前に、それでもたった一人で。
普段どおりの笑顔を振りまこうと、彼女は不器用にも努力していた。

どうしてだろう。

先程見た、彼女の微笑みを思い出す。
忙しくなっただけで、何も変わらない――自分がそう告げた時に久しぶりに零れたのは、彼女が持つ本来の笑顔だった。

顔に出る程不安を抱いていた彼女が、それでも笑顔を絶やすことをしなかったのは。
精一杯守っていたんじゃないだろうか。

――ここに居る誰よりも、守ろうとしていたんじゃないだろうか。

このホームを。
たったの４ヶ月間を共に過ごした。
騒がしくも愉しい、かつての生活を。

「……とっととここから立ち去れ」

リチウムが再び、怒りを噛み殺した低音を吐き出す。
誰より、リチウムは自身に怒りを覚えていた。

見ていたのに。
あんなに近くで
頑なに、守ろうとしていた彼女の様を見ていたはずなのに。

例え、どんな事が起きたって。
彼女が変わっていったって。
日常を崩してはいけなかったのだ。
それが彼女を不安にさせるのなら。
どんなに守ろうとしたって。その笑顔はゆがんでしまう。
そうやって得た自己満足の平穏にはきっと。なんの価値もない。
意味なんてないのだ。
過去に置き去りにした微笑(もの)は、二度と手に入れる事なんて出来ないのだから。
永遠に、失われてしまうのだから。

「愚かな」

リチウムの姿を見、トピアは低い声でぽつりと呟いた。

「こんな事になってしまったのは、一体誰のせいだと思っているのか」

「……ンだと？」

「確かに。厳密に言えばおまえは”奴”とは違うかもしれん。だが、グレープを惑わし。あらゆる者の運命を狂わせた”無”を継いだ貴様が今さら、何を護ろうというのか」

整った眉目に深い皺を寄せ、不機嫌に言い放つトピア。

と、ここでリチウムは、場の空気を乱す程大きく、長く息を吐いた。

「……だからさ」

こめかみを押さえ、苛々しげにリチウムは呟く。

残念ながら、自分は後ろで構えている男（トラン）のような優しい人間ではない。

一方的に投げつけられる女のヒステリーに、いつまでも付き合ってやれる程気の長い男ではないのだ。

「……訳わかんねぇ事いつまでもくっちゃべってねぇで、ソイツ返せっつってんだよ……！」

言い終わらぬ内に、獣染みた速さでリチウムが疾走した。

トピアが居る位置まで、たったの3歩。

手にした死球を躊躇無く目前の少女に放とうと、左手を掲げて――

――その動きを、止められる。

「……っ」

「懲りない方ですね。貴方も」

闇が迫ろうとも微動だにしなかったトピアの傍らで、溜息をついた天使の双眼が鈍く光を放っている。

「ぐ……っ」

「リチウム！」

叫んでトランが駆け寄る。

リチウムは今にも動き出しそうな体勢で顔を顰めたまま静止していた。ギリっと奥歯の鳴る音が聞こえた気がした。

「大体、貴方。彼女に攻撃するという意味を理解しているのですか？　彼女はですね……」

「――よい。

ここにはもう用が無い。不愉快になるだけだ」

「……わかりました。では、参りましょう。トピア様」

僅かな躊躇を見せた後ファーレンが促せばこっくりと頷き、トピアはリビングの向こうの割れた窓ガラスに向かって踵を返した。

濃いローブの下から白い素足が見え隠れする。

前進する程に強くなる、凍て付くような冷たさを含んだ雪交じりの夜風が少女の髪を攫う。サラサラ、サラサラ。長い紫は後ろへ、軽やかに舞った。

「――サバオート」

重苦しい空を己がままに行き交う風の、怨念のような恐ろしげな声が響く中、室内で紡がれた低い女の声。
刹那。彼女と天使の目前の空間が歪んだ。
空間操作……立ち去る気か。
――彼女を連れて。

「……っ」

自然、足が動いた。

「トランちゃんっ」

廊下を疾走しリビングに躍り出たトラン。制止の声を上げたクレープも止むを得ず男の後に続いた。
厳しい漆黒の瞳に、空間を越えようとしていた二人が振り返る。
彼等が目したものは、自分達を追いかけてきた男の全身を激しく通う炎の魔力だった。

「……裏切るのか」

グレープそっくりの顔――ルビーを思わせる赤い瞳が、かつて耳にした事のあるその声の発する言葉が、トランの心を抉る。

「裏切るのか。過去、その心魂を救ってやった相手を」
「アンタね……！」

クレープの抗議の声を、腕を上げて制止するトラン。

「……俺は確かにあの時。
あんたに命を救われた。

約束も護るつもりだ。
だが――」
「……」
「彼女は、返してくれ」
「……トランちゃん」
「――それは出来ない」

黒い瞳を、無表情で直視するトピア。
「だったら……力ずくで取り戻すまでだ」

意思の篭った真っ直ぐな視線を向けられ、少女は僅かに俯くと、フッと笑みを漏らす。

「……。
……そうか。おまえは、我に歯向かうか」

顔に掛かる紫の髪の隙間から垣間見れる表情――それはどこか、自嘲じみた微笑だった。
トランが疑問に思うよりも早く、ファーレンが彼女の前に出た。
その腕の中で力なく横たわる少女の姿。

「グレープちゃん……！」
「幾ら呼びかけても無駄です。貴方方の声は彼女にはもう届きません。
といいますか。当分の間、意識は戻らないと思いますよ。
長い間纏わりついていた魔力（まがん）が消失した事で突如、彼女の身は外界に晒された。本来密着していた人界との間に人工的に創られていた隔たり――壁が取り払われたばかりなのです。
『魔眼』が消失したあの瞬間。彼女は、知らぬ内に体内で行われ

ていた循環作用に初めて直面したものと思われます」
「循環……作用……？」
「……」
「ええ。
それまで『魔眼』という障壁がろ過していた事で、無自覚の内に行えていた『巨石の魔力の循環』が突如現実のものとなった――『魔眼』消失の瞬間からグレープさんは、1空間を充たす程に流れ出ててしまう、体内（じしん）の魔力の莫大な喪失感に襲われると同時に、
人界に満ちていた魔力が急激に自身へと還って来る、これまた莫大な飽和状態に見舞われたのです。
可哀想に。彼女の状態を考えず、魔力は彼女の体内で勝手に循環を繰り返す。それは、呼吸のように。膨大な魔力が還り、再び出て行き、戻ってきて……。それぞれの極端過ぎる感覚の――暴力に、慣れる間すら与えてもらえず、延々とそれは続く」
「……」
「一瞬の内に幾度、出入りが行われているのか定かではありません。が、その反動は恐らく、甚大。耐え切れるはずもなく、彼女はこの通り失神してしまった。
それが今の状態でしょう。
現在、現状になんとか適応しようと、彼女の体内でなんらかの異変が起こっているものと思われます。自身の魔力を操作し得るまで……、いえ、自身の状態が安定するまで、と考えた方がいいでしょうね……その間、彼女が目覚める事は無いでしょう」
「……あんたね。よくもぬけぬけと……っ」
淡々と述べるファーレンを、クレープが睨み付ける。
「……そのコが倒れた理由、そのコが受けたモノは、それだけじゃないでしょーが……っ！」
「さぁ。私はこれ以上の事は何も聞かされていないものですから。

さっぱりです。なんでしたら、貴女の口から説明してあげたらどうですか？　『クレープ』さん」
「――この……っ」
「長い話はもういいって……っ　リチウムじゃないけど、訳わかんないっての……っ！」

歯噛みしたトランが左腕を前方に……何かを振り払うように猛々しく伸ばした。

「――訳がわからないのに、我々を攻撃しようとするのですか？　トラン」
「訳が解ろうと解るまいと……俺が今、やらなきゃならない事は変わらないだろ！
今起きる事がないのなら、側で彼女が苦しみから目覚めるのを待つだけだ！」

反応し赤く光る指輪。同時に漆黒の瞳に灯る赤の光。

「トランちゃん……っ」
「……」

クレープが憂慮な面持ちでその光を――また、トピアが恍惚とした表情で見つめているのをしかし、光の主は気づかない。
程なくして発動した炎帝はトランの肉体を一瞬で包み込んだ。特に指輪を嵌めている方の手――その左腕には大量の炎が纏わり付く。意識を集中させると炎は掌に集まり……バット状の大きさに伸びた。
トランは炎火のバットをしっかりと握り締める。先の事件での魔族との戦いで得た感覚、これはその産物だった。
ここは室内――ホームだ。万一にもホームを破壊する事があってはならない。もし、修復不可能なまでにホームが全壊してしまった

ら……ふいに、先ほど目にしたリタルの無の表情が浮かんだ。身が竦む。
それに、恐らくこの場には、先の事件と同じ空間操作の魔力を操る魔族の存在もある。幾ら炎帝を放ったところで別の空間に放り出されるだけで相手に届く事はない。リタルに聞いた話では、リチウムはこの状況下で直接相手の身体に手を付けた上での発動で対峙した魔族を倒したという。宙を舞うファーレン――彼の持つ魔力を考えても、彼の身体に触れる事は難しいだろうがバット状の物ならばリーチが伸び、可能性も増える。そして何より、この形状は扱いやすい。

「……よいのですか」

ファーレンは品定めするようにトランを見下ろしている。

「先ほども忠告しましたが。今一度貴方に告げておきます。
私に手を出せば、私の権限で貴方をクビにする事も出来るのですよ」
「構わない」

低い声でトランは吐いた。即答したその早さから迷いの無さが窺える。

「元から、そんなものに興味はないんだ」
「……」
「決めたんだ。……過去を見る事も、この先を気にする事ももう止めるって」
「……」
「――この身体は、6年前からその子の物かもしれない。だけど受け渡すのは……今じゃない。先の話だ。

俺にはもう『今』しか無いんだ。
だったら今、確かに存在している内は……終わるまでは。俺は誰よりも先ず彼女を――護る！」

吼えて、トランがファーレンに突っ込んだ。
自身に向かって一直線に。単調な動きを追うファーレンの瞳が鈍く光る。
トランの身体が、ファーレンの呪縛にかかる寸前、

「させない！！」

叫んだクレープがその場に浮き、その細腕――人差し指をファーレンに突きつけた。

「～出なさい！　『蜘蛛魔族の魔力』！」
「……な！」

金色に光る細身。
白い指先から飛び出した無数の極細糸がファーレンに絡みつく！

「厄介な……まだそんな力が残って……っ」
「たぁあああああ！！！」

糸に塗れたファーレンへ突っ込むトラン。
振り上げた炎火のバットを、しかしファーレンは後方にひらりと跳んで交わす。

「……トピア様。彼女を」

トピアにグレープを預けると自身は背の二対を大きく広げた。

闇に浮かぶ純白が舞う。一仰ぎが猛烈な暴風を生み、飛び掛るトランの身体を吹き飛ばす。

「……ぐ！！」

リビングの床に背を打ち付けるトラン。

そこへ――

「てめぇは大人しくお空に帰って掃除でもしてろや！！」

入れ替わりに前へ出た――呪縛の解かれたリチウムが手にしていた死球を放つ。

今にも天使を呑み込まんと、恐るべき速度で迫る無の球。

が、しかし。

「――――」

ファーレンに向かって直進していたはずの無は突如。不自然なまでに大きく軌道を変えた。

「な……に！？」

無は窓の外に広がる夜闇に吸い込まれるように姿を消す。

「……ンな……バカな……」

ファーレンの魔力は糸によって封じられている。

その羽から風が生み出された訳でもない。

自身が軌道修正を念じた訳でも無論、無い。

とすると、『死球』が独りでに軌道を変えた、と言う事になるの

だが……

「だから。無駄ですと告げたのに」

リチウムの驚愕の表情に呆れたように首を振るファーレン。

「〜だったら、こうするまでよ！」

宙に浮いていたクレープがリチウムの頭に金色に光る両手を押し付けた。

「……は！？」

「『転位の魔力』！」

クレープの声と共に全身を包むエメラルドの光。

これは、リタルの――

「……く……っ」

――次の瞬間、ファーレンの声がやけに間近に聞こえた。目前にある金の瞳。足場が無い。自分は今……落下しているのか？

自覚すると同時に、自分が宙に浮いているファーレンの真正面に瞬間移動した事をリチウムは理解した。

「……このムチャクチャ女が……！」

悪態づくと同時に恐るべき反射神経で右腕を伸ばしなんとか片翼の根元を掴んでぶら下がる。

突如重りが付いた事でファーレンは大きく体勢を崩した。

「――なんという事を……！」

振り払おうと強引に翼を動かす――その前に、リチウムは歯を食いしばって左腕を伸ばしファーレンの顔面……こめかみ辺りを掴んだ。

続けざまに行う意識集中に要する時間は、一瞬。

「な……！！」

視界を塞がれたファーレンが上ずった声を上げた。ファーレンの身体と共に落下する――直前、リチウムが叫んだ。

『死球（デスボール）！！』

魔石が、辺りの夜闇より濃い黒を放ち――ファーレンの顔面で、無が暴発する。

「……っ！！」

大きく仰け反るファーレン。激しい抵抗に今度こそ極細の糸と共にリチウムの身体も振り払われた。床に背中を強かに打ち付ける。肺が勝手に空気を吐き出す。

「……ぐぅ……っ」

その間に、体勢を立て直したトランはグレープの身体を抱いたト

ピアの元へ疾走していた。
トピアは逃げもせずにただ自分が来るのを待ち構えている。
その細腕が抱きしめているのは全く同じ体格をした蒼い髪の少女。
「彼女を離してくれ」
燃え盛る炎を従えた赤い瞳の男が、トピアに対峙する。
「……トラン」
「俺……、――みんなには、彼女が必要なんだ」
「……おまえには必要ない」
「……っ」
冷たく言い放つトピアに、
「おまえには、グレープは必要ない。それは、
勘違いだ」
ビクっと、トランが震えた。
炎火を纏ったトランの身にトピアが片手を翳す。
白い掌に宿る――紫光の球。
「……！」
「トランちゃん！！」
叫んで、トランの前に飛び出したクレープの身体が、爆発じみた
風圧に吹き飛ばされた。
「クレープ！！」
「……！」

彼女の背を受け止めるも勢いは止まらず、折り重なった二人はリビングの壁に叩き付けられる。
再びトランを襲う激痛。肺が収縮する。

「……！！」
「――おまえには、現在も、……ましてや過去も要らぬ」

冷たい赤の瞳が、崩れた二人の身体を無感情に見つめていた。
その背後にファーレンが、よろめきながらもなんとか着地する。
震える手で、顔面を押さえながら。

「～リチウム！！」

トピアと背中合わせに立った自身へと走り寄るリチウムの気配に、ファーレンが、吼えた。
それはなんともドス黒い、憎悪に塗れた声（おと）。
耳にした、その瞬間、

「……っ」

リチウムの身体を――莫大な圧迫感が襲った。

「――な……、」

先ほどのような、呪縛では断じてない。全身が圧迫されている。
頭が、胴体が、腕が、腰が、足が。
上から左右から下から。中心へ向かって、あらゆる方向から。
身体が、押し潰される。

ギリギリぎりぎりぎりぎりぎりぎりぎりぎりぎりぎりぎりぎり……

「……っ！！」

激しい痛みで息も出来ない。それはまるで巨人の掌の中。その腕力で握り潰されるような感覚だった。

彼は今成す術も無く、圧倒的な力で肉体を圧縮されていた。

「……よくも私の瞳を……っ」

俯き顔面を押さえたまま、ファーレンが底から怨念の呪（こえ）を上げる。

「……つぅ……っ」

再び開かれた男の瞳は普段の黒（いろ）だった。

崩れたクレープの身体をその場に寝かせて、なんとかトランが立ち上がろうとする。

そこへ。

「……っ」

紫の柔らかい絹糸が、彼の頬を擦った。

「……」

気配すらしなかった。

一体いつからそこにいたのか。

「……トラン」

背筋の凍る程冷たい夜風が、紫のカーテンを揺らしている。
隙間からのぞく目前の赤は真っ直ぐにトランを見つめていた。
ひどく整ったそれは人形のような、小さく可憐な顔。
感情の無い大きな瞳。
力なく座り込んだ自身を、少女はただ視界に入れている。

「……」

――この光景はまるで、
あの時の再現。
やがて彼女が、自分に差し出す……その手に握られた物だけが違った。

「『安らかな眠りを』」

そっと開かれた掌には、赤い天石――ではなく、
紫の粉。

「……っ」

瞬間、紫の塵が辺りに散乱する。
紫に触れた炎帝が光を失う。
急激に重たくなる瞼。
それでもトランは、全力で抵抗する。
ここで眠ってしまえば、待っているのは恐らく絶望と喪失感だけだ。

「……案ずる事はない。トラン」

目前に在る少女の瞳は、焦がれた色そのものだった。
「おまえはいずれ、グレープに会う」
同じ顔。
同じ白さ。
華奢な腕……頬を撫でる、細い指先。
「勿論、ダヴィにもだ」
髪の色を除けば、自身の胸を揺さぶる彼女と、何もかもが同じなのに。
「その時、おまえは自身の願いどおり、我等を護る役目を授かるだろう」
決定的に、何かが違う。
それは――
「……違う形で」
感情の有無。
「……っ」
舌を噛んだ。
噛み千切らんとばかりに、思い切り噛み締めた。
鮮烈な痛みと鉄の味が広がり、徐々に意識が覚醒してくる。

「勘違い……なんかじゃない」

口端から伝う細い赤。気づいたトピアは僅かに目を見開いた。

「トラン」

「……いずれ、じゃ、駄目だ」

ゆっくりと、トランはその場に立ち上がった。

上がる息。僅かにふら付く身体を、床を踏みしめる両足でなんとか支える。

「……違う形でも、駄目なんだ……っ」

鮮血が、滴り落ちる。

「俺は、……今！

この手（からだ）で、彼女を護りたい……っ」

瞬間。

暗い室内に赤光が満ちた。

「……！」

猛々しく吼えた男の全身を赤光――いや、赤が覆う。

温かいそれは目を、その髪をも同色に染め上げた。漲る赤い魔力が肉体を包むと、今ある痛み総てを消し去ってゆく。

呼吸が、ゆっくりと、整ってゆく――

「……おまえ……」

呆然と見上げている少女の胸元に手を伸ばし。
赤にその身を包まれたトランは、今、グレープの身体を――抱き寄せようとした。
その手は、僅かに届かなかった。

「……！？」

男の視界から、グレープの身体が一瞬で消失する。
未だ呆然としたまま、それでも視点を虚空に移すと、ポツリとトピアが呟いた。

「サバオート……か」

ギリギリギリギリぎりぎりぎりぎりギリギリギリギリギリギリ……

「～ぐぐ……ぅ」
「……やはり貴様は、奴の”無”を受け継いでいるばかりではなく、その禍々しさをも持ち合わせている……」

肉体を極限まで締め上げられるリチウム。
狂気を纏ったファーレンの姿は今、変貌していた。
金髪を縛っていた紐はいつしか千切れ、体内を迸る魔力で蛇のように宙を揺らめいていた。
天使の象徴たる純白の翼はいつしか暗黒の異形なソレへと変容している。

漆黒の十二の翼。
金の光を帯びたその姿の、なんと禍々しい事だろうか。

「このまま……無に帰すがいい……っ」

根底から搾り出すように暗い声を吐き出せば、リチウムの全身をさらなる力が襲いかかった。
悲鳴を上げる骨。締め上げる力が、その強度を越える――

ギチギチギチギチギチギチギチギチギチギチギチ――

「～あああああああああああああああああああああ……！！！」

全身の骨が砕ける寸前リチウムの上げた断末魔に、その場に居た全員が注目する。
正面に居たファーレンが男の死を確信して口角を上げた。
刹那。

暗がりの室内――その一角から差し込んだエメラルドの閃光が、

「……！？」

今、ファーレンを貫いた。

7

誰かの声がする。
――微かに。
遠くで。
……また。
誰かの悲鳴が聞こえる。

また、誰かが死んでしまうんだろうか。
また、誰かがいなくなってしまうのだろうか。
また。
誰かが消えて。
一人ぼっちになってしまうのか。
自分にとって、大切なものが。
――砕けて　無くなってしまうのか。

そんなの。もう。
たくさんだ。

この6年間。あたしは、お母さんを元の姿に戻すことばかりを考えて生きてきた。
だから、リチウムに付いて、魔石の知識を蓄えた。
調べられる所は散々調べてみたし。徹夜だって毎日のようにした。
副産物として、いらない知識ばかり詰め込んでしまったけれど。
それももう。――総ては水の泡。
一体、なんだったんだろう。

ついさっき。お母さんは消えてしまった。
お母さんを完全に、失ってしまった。

もう、どんなに頑張ったって二度と、得る事が出来ない。
あの笑顔。
どんなに頑張ったって、その先で待っていてくれはしないんだ。
あの、あたたかさ。
どんなに頑張ったって。一番に褒めて欲しい人は。
褒めてくれる人は、……もういない。

――けれど。

お母さんが、あたしに残してくれた唯一の希望が、まだある。
長い銀糸と、青い光。
……意地悪な神様は、それまでも、あたしから奪おうとするのか。
それさえあたしは、失くしてしまうのか。

――させない。

そんなことはもう、
……させてたまるもんか――

暗闇の室内で。
強い意思が導くエメラルドの光線が、背中から禍々しい天使の身体を貫いていた。

「……なっ」

短い叫び。

刹那、狂気に満ちた天使の全身がエメラルドに包まれる。蛇のような金髪。折れ曲がった漆黒の翼。抉れた目元。
瞬く間に。異形なる天使のシルエットはその場から強制的に掻き消されてしまった。

「……！？」

唐突に起こった変化に反応し、トランとトピアがほぼ同時に、エメラルドの光が差した方向を凝視する。
そこは――共有廊下。光を失くしたはずの少女が壁に凭れ力なく座り込んでいた。
それでも、少女が真っ直ぐに掲げているのは――その左腕。
闇を裂き、なおも煌々と輝き続ける『転位』の禁術封石だった。

「……っ」

締め上げていた魔力（なにか）が消え去り、その場に崩れ落ちるリチウム。
倒れる音が、室内に一際大きく響いた。

「……」

状況を確認した後、トピアも空中に出来た歪みの向こうへと消えてゆく。

「……待て……！」

トランが腕を伸ばした。が、一歩届かず。
その細腕を掠るまでにしか至らなかった。
紫の髪は、指先をすり抜けてしまう。

「……」

最後にもう一度だけ、トランを振り返った彼女の顔はやっぱり、ハッとする程彼女と瓜二つであった。

自分をただ見つめる、憂いを帯びた赤。しかし双眼の奥はどこまでも混沌に満ちて――

――歪みが元に戻る。

何もなくなってしまった空間を前に、トランが、その場に両手を着いて吼えた。

「――畜生……！！」

力なく横たわった男の下へ。

黄緑色の髪の少女がたどたどしい足取りで歩み寄る。

いつもきちんと結い上げている髪はいつの間にかほどけ乱れていた。歩くたびに腰の辺りでふわふわと毛先が揺れる。

エメラルドの瞳は未だ翳り、その表情はどこまでも無であった。

――それでも。

少女は、仰向けに倒れている男の元へ辿り着くと、倒れるようにその場に腰を下ろした。

リビングの床に広がった銀髪。

男はピクリとも動かない。

苦しげに歪んだままの顔。

「……」

少女の口元が僅かに動いた。
息が漏れただけで、音は出ない。
小さな手を恐る恐る伸ばし、その指先が、やがて男の頬に触れる。
――冷たい。
固く。閉ざされてしまった青。

「……」

そうやって、また。
いなくなってしまうのか――

押し寄せる絶望に、しかし少女は表情を示さなかった。
やがて――

「……っ」

男の身体が僅かに身じろぐ。

「……」

少女の視界の中で、今。
薄っすらと、上瞼が開かれた。

「……」

焦点の合わなかった青瞳は、やがて少女の姿を見つけると。
無表情の少女の頭に。ゆっくりと腕を伸ばした。
無遠慮に少女の頭を撫でる、骨張った――
大きな手。

「……ンな面、してんなや……」

ニヤっと懸命な笑みを浮かべると。
掠れた声で、そんな言葉を吐いた。

「……おまえみてぇな危ねーガキンチョ。
俺様が置いていったりする訳ねーだろ……」

――一滴。
また一滴。
零れ、リチウムの頬を伝う。
少女の涙。
「……ウム……」

徐々に、
徐々に、徐々に。
少女の瞳に、光が戻る。
「〜リチウムの……っ」
声を上げて、
少女は男の胸に蹲った。
「〜リチウムの…馬鹿ぁ……っ！！」
「……って、こらまて。誰が馬鹿だ誰が」
激しく泣きじゃくる小さな背を。
ぽんぽんと優しく叩きながら、リチウムは溜息を吐く。
状況は極めて最悪だった。
これまで以上に。訳の解らない事ばかりが唐突に巻き起こっただけでなく。
日常はとうとう、木っ端微塵に破壊されてしまった。
『魔眼』は消失し。
グレープは、何処の誰ともつかぬ女の元に連れて行かれ。
自分は……この通り異形な天使の訳の――これまた訳の解らぬ力に敗北して、情けない事に今は立つ事すら出来ない状態だ。
――それでも。

それでも、戻ってきてくれた少女に。
手元に残る温かさに。

リチウムは、疲労交じりの微笑を浮かべた。

やがて。
クレープを抱え、平常に戻ったトランも自身に歩み寄ってくる。

そう。

まだ、終わってはいない。

1

ＷＳＰ。第一会議室には急遽召集された重役達が難しい顔で定位置に腰を下ろしていた。

人界で起こった事態に対応すべく、緊急会議が執り行われたのだ。

まず、人界の巨石について。

３年前――人界時間では１７年前になるが――に突如、その波動を消失させた『人界の巨石』。人間達が隠してしまったのか、はたまた、別の脅威に曝されたか。人界の巨石はそれ以後、不自然な程に鳴りを潜めてしまった。

未だ人界が存在している事から、巨石自体が消滅してしまったという可能性は極めて低い。五千年という永い時を経ても変わらず、そのままの状態で空間が存在し得たのは、外部による支え、維持する力が絶えず空間を包み満たしていたからこそであり、自身の存在のみで安定し続けてきた訳では決してない。巨石の持つ莫大な魔力をもって初めて今の状態を保っていられるのである。よって、波動こそ感じられないが人界の巨石の魔力は未だ巨石と人界との間を循環し続けているはずだった。

しかし、この３年間。ＷＳＰでは膨大な労力と時間を駆使して人界の巨石の所在を探し続けてきたのだが、手がかりすらロクに掴めていないのが現状だ。よって人界の巨石については様々な憶測が飛び交うのみであった。巨石の魔力が感知されない事態は天界――ＷＳＰにとっても脅威と呼ぶに足るものだった。あれだけの魔力を一体誰がどんな目的で隠し続けているというのか。

――それが……昨日の事だ。

消失してから初めて、人界の巨石の魔力の波動を人界で観測することが出来たのである。

場所は、グノーシス市の西部――天界時間で２週間程前に蜘蛛型

魔族が現れたという場所のすぐ近く……であると同時に、その数日後には複数の犬型魔族の姿が確認され停石状態に陥ったという例の街だった。
だが、反応を示した途端、人界の巨石の波動は再び人界から消失してしまう。
人界時間で言うと波動が現れたのは、ほんの数十分、といったところか。

「地図上だと、この辺りですね。
管轄であるファーレン部隊の話によるとこの場所は、人界時間で3週間前に複数の犬型魔族の放つ魔力が集中していた地点で……古いマンションが建っているそうです。波動の中心はマンションの一室――11階になります。住民届は出ていないものの調べてみた所、どうも、リチウム・フォルツェンドが所持している気配が……」
「……また奴か……」
「ファーレンもいつか、そのような報告をしていたな……」
「『死球』を手にしている奴が、人界の巨石をも所持していたというのか」
「……」
「……しかし、この事から察するに、魔族側は、犬型魔族が人界侵入を試みた時にはすでに『人界の巨石』の位置を把握していたものと思われる。あの騒動は人界の巨石を狙っての事ではないだろうか」
「では、このところ、魔族の動きが活発化している事や、連続して起こった魔族による人界侵入事件は……」
「――先回の会議時に、妙だと感じていたのだ。
五千年前の条約が未だ生きている今日では、魔族はただ待っているだけで自ずと魔石が手中に入る状態。『魔界の巨石』が目覚めたからといって、そう急ぐ必要もない。我々の不審を買い、警戒されるリスクを考えるなら、目立つ動きは避け、これまでの通り素知らぬ顔で魔石が集まるのをただ待っていればよかったのだ。

人界侵入事件は我々に、魔界の巨石の目覚めと、それによって変化した魔界の状態をあちらの方から大々的に披露してくれたようなものだからな」
「では、魔族側の真の狙いは、魔界の巨石の力を使って魔石を復活させる事ではなく――」
「他にある、とみていい」

次に議題に上がったのはトラン・クイロについて。

「クイロ警視正は昨日、予定されていた通りＷＳＰ（こちら）で研修を受けていました。が、第一会議室（われわれ）に姿を見せる前に……」
「無断で人界に降りた、か。しかも、これは人界の巨石の波動が現れる直前だという」
「彼は相当急いでいたとの報告を受けている」
「なにかあるな」
「人界の巨石の波動の消失寸前に微かではありますが……『蘇生（フェニックス）』の魔力を感知しています」
「……『炎帝』が変化しただと？」
「詳しいことはまだなにも」
「しかし事実、蘇生（フェニックス）の反応はあの天石にしか出せぬ」
「『炎帝』を変化させようなど、今となっては魔界の巨石の魔力をもってしてでも無理な話だ。ましてや、人界でそのような事が起こるとは……考えられぬ」
「……その、魔界の巨石、についてですが……」
「なんだ」
「僅かですが……その波動が、人界で感知されました」
「なんだと」
「同じ場所……同時間でか」

「肯定です」
「……どういう事だ」
「……」
「先ほどファーレン部隊が偵察の為人界に降りたのですが……報告によると現在、現場には別段目立った動きは無いとの事です」
「……やはり一度。場に居合わせたと思われるトラン・クイロをここに呼ぶ必要がある」
「当初の予定通り諸々の事情を聴取した後で『炎帝』の返還を求めるか……場合によっては、監禁の必要もあるか」
「お上にはこの事は……」
「報告していません。ですが……」
「あれだけの魔力だ。蘇生の魔力は愚か、『人界の巨石』の波動を彼女が感知した可能性は高いな。……様子はどうだ」
「依然、最奥の部屋に。事件後も外に出られる事はありませんでした」
「……何をお考えになられているのか」

そして。話し合いは最終議題に移った。

「ファーレン警視長についてですが……。昨日の事件前から彼の姿を目撃した者はいません。事件の数分前に人界に降りてそれっきり行方がわからなくなりました。後に発令された緊急召集にも応じず、連絡もつかない状態です」
「……におうな」
「今回の事件も奴の管轄内。というか、奴の名が出ない事件などない。1年程前に、とある人間が起こしたという人界――ウィリデ地方の災害時にも現場で奴の姿を目撃した天使が居るそうではないか」
「管轄外では？」

「人手が足りずに借り出されたと本人は述べているらしい」
「……」
「元々、奴はいけ好かん」
「お上はどうしてあのような新参者を贔屓にするか」
「確かに魔力は段違いだが……それにしてもＷＳＰに転属する前の経歴が抹消されている事が気に掛かる」
「奴がＷＳＰに入った時期は４年前……人界時間で言えば２３年前、か。
……４年前と言えば、確か魔界で『無』と、その番人が突如消失したという報告を受けた年だったな……」
「人界の時間軸が狂ったのも同時期ですね」
「……何か係わり合いがある、という事か？」
「まだなんとも……」
「だが可能性は高い」
「奴はどうも、天界のそれとは合っていないような気がするのだ」
ざわめきが最高潮に達したその時、室内の最奥で瞳を閉じずっと沈黙を保っていた一人の老人が顔を上げた。
「……オーライオス警視監」
正面に居る天使に名を呼ばれ、老人は、途端に変化した室内の、水を打ったような様子――一同をぐるりと見渡した。
１週間程前に同所で行われた臨時会議で、重役達に報告するファーレンの前に座り一言二言を発言した人物だ。彼はかつて、ファーレンの直属の上司でもあった。
深い皺が幾重にも刻まれた顔。当時薄い金を帯びていた長髪は、今では白く褪せてしまっている。
が、その眼光は衰えを知らない。

「『人界の巨石』の波動が再び人界から消失した今。目立った反動はまだ見られないものの、影響が皆無とは到底思えない」

薄く開かれた金の瞳の奥は、重役達を圧倒させる程の威厳が備わっている。

「国際警視庁に連絡をとれ。各自、警戒し事態に備えろ、と。異変が起きた場合はこちらに逐一報告するようにと伝令」

低音の嗄れた太い声が轟く。

「は……！」

「ヘルファーレン警視長は現時点で総ての権限を剥奪。見つけ次第ただちに拘束する」

「し、しかし……」

「責任は私がとる。各小隊はただちに捜索を開始せよ。ファーレンが率いていた小隊の代表者をここへ。それから。人界の巨石を所持していたと思われる人間と親交のある、トラン・クイロ警視正を召還する」

この場では最高位に君臨する存在――オーライオスの発した言葉に室内が騒然となった。

2

あれから3日が過ぎた。
早朝の凛とした冷気の満ちた室内に一人、少女は小さな鏡台の前に立っている。
黄緑色の髪。
エメラルドの瞳。
鏡には――普段となんら変わらぬ自分が映っている。

「……よっしゃ」

気合いの入った表情で一言呟くと、えいやと一気に寝巻きを脱ぎ捨てた。途端に全身で一斉に起こる鳥肌達の抗議には取り合わずに素早く私服に着替える。髪を二つに分け高い位置に結い上げると、最後に。机の上に置いてあった二つのグローブに手を伸ばした。
1つは、エメラルドの光を放つ『転位』の石。
もう1つは――

「……もう、大丈夫」

呟いた表情は――穏やか。
グローブを嵌めるとすぐに掌を動かし軽く感触を確かめてから。
少女は、外界へ通じる扉を開けた。
物言わぬ室内はいつものように、颯爽と歩いてゆく彼女の背を見送ってはゆっくりと口を閉ざしてゆく。
新たに取り付けられた扉を開け、1号室を覗く。

普段なら、ここで「おはようございます」などと、一体何がそんなに楽しいのか、明るい嬉々とした鈴声に迎えられる所だ。
その内ぱたぱたとこちらへやってくる賑やかな足音が響いて――
――リタルはこの3日間。『日常』を耳にしていない。

「……」

しんと澄んだ冷たさの佇む室内。
記憶の中の鮮やかな笑顔。欠けてしまった現実（せかい）の静けさに一抹の寂しさを覚え、リタルは俯いた。
緑色の毛束が頬にかかる。

一号室の内部――玄関や廊下、足を進めたリビングは修繕され、見たくれはすっかり元通りになっていた。
薄暗い世界。その中央に置かれたソファの1つで――リチウムが寝息をたてている。
カーテンの隙間から差し込む一筋の柔らかな日差しをはらんで僅かに反射させる銀の髪。
すぐそこに自室があるというのに、一体、なんでこんな所で寝ているのか。

「……」

呆れたような溜息を吐く。リタルは起こしてしまわぬ様そっと近づくとその場に両膝を付け、ソファの端に頬杖をついた。
穏やかな寝息を立てている、男の顔を眺める。
寂光に照らされたその寝顔はまるで、彫刻のようだった。
形の良い輪郭。
高く通った鼻筋。

薄く開いた口。
睫毛が……随分と長い。
今は閉ざされている――切れ長の瞳。

「……リチウム」

リタルは、既に解っていた。
――初めて会った日、この男が名乗った苗字は「フォルツェンド」。それは母の旧姓だ。
母は結婚前、ストーンハント業を営んでいたという。それもただのストーンハンターではない。今自分達が行っているような、人家に押し入って禁術封石を奪う――という、立派な盗賊業だ。
母は生前、スリルと興奮に満ち溢れたハント話の数々をよく自分の子供に自慢げに語って聞かせた。母が話す昔話はどんな絵本より楽しくて、いつの間にかリタルは自分から母に話をせがむようになった。
ついには、ほぼ丸暗記してしまった昔話。覚えによると、ストーンハントを行っていた時、母が名乗っていた名こそが旧姓である「フォルツェンド」だった。
その話に出てきていた彼女についていたという弟子の特徴。
そして、いつだったか。もうストーンハントはやらないのかと訊いた自分に彼女は「辞める時に全部、弟子に任せた」と清々しい顔で笑っていた。
どういう因果か知らないが、リチウムは母の元でストーンハントの手口を学んでいたのだ。

幼い頃自分が住んでいた街はここよりさらに北に位置していた。ウィリデ地方の山々に囲まれた小さな田舎町で、名をスマラグドと言った。リタルはそこで父と母と兄と暮らしていた。
平穏な幸せが砕けてしまったのは6年前。奪ったのはスマラグド

付近で起こった大規模な山火事だった。スマラグドは炎に包まれて消えた。生き残った僅かな町人達は皆、辛い思い出に目を背けるかのように近隣の町に移住してしまい、町は復興する事もなく、現在そこにはひっそりと形跡が残っているだけだ。

当時の記憶はとてもあやふやだ。

炎の中、母は懸命に自分を庇っていた。気がつけば母の姿は無く、右掌には母の髪と目の色そっくりなエメラルドの色の石を握っていた。

コレが一体何なのか。どういう事なのか、後になってから理解する。母は魔族だったのだ。

烈火の世界で小さな自分は成す術も無く母の石を握り締めてその場に蹲っていた。苦しくて、苦しくて、その内意識を失って……

……気づいたら、親戚の家の天井が広がっていた。

兄も父もいなかった。

親戚に訊いたら死んでしまったのではないかと冷たく返された。

一度一人で兄達を探しにスマラグドを見に行った事がある。その際、自分と同じようにあの地獄を生き抜いた……屍のように気力の無い町人達数名と再会したのだが、誰もが二人を見ていないと力無く首を降った。自分を助け出しここまで連れてきてくれたという警官も見つけたのだが、やはり同様の反応を示すだけだった。仕方なく、リタルはそのまま親戚の家で一時を過ごした。

しかし親戚と上手く行かなかった彼女はすぐに、ウィリデ地方の教会――孤児院に預けられる。

その頃には、彼女の精神は絶望に染め上げられ、もう喋る事すら億劫になっていた。

視線は下へ。

表情は無に。

物事に対する関心は薄く。

その存在はとても希薄。

「おまえ。母ちゃん似だな」

そんな彼女の目の前に現れたのが、リチウムだった。

――一目でわかった。

初対面の男が、昔母が話していた弟子だと言う事に。

だって。

青空の下。見上げた銀と青。

目が覚めるような、それはなんて鮮やかなコントラストだったろう。

その時は、意地悪な神様がもう文句を言われたくなくて、この世で唯一母を知っている人に会わせてくれたんだと思った。

でも違っていた。

なんてことはない。よく考えてみればわかる事だった。

自分は”母”を持っていたのだ――

当時もストーンハントを繰り返していたリチウムが、彼女を見つけるのは時間の問題だったのだろう。

それでも。

彼女は、この出会いは母が齎したものだと信じた。

だってその方が。

何十倍も、嬉しいじゃないか。

「……リタルか」

青い瞳がうっすらと開かれる。
掠れた声に我に返ると、男は無造作に自分の頭に手を置いた。
……少しだけ驚いた。

「……」

この男が、自分に触れる事は珍しい。
大きな手は、何かを確認するかのように。
温もりは、強い青に秘めた解りにくい優しさ――そのままで。
……心配を、かけてしまったのかもしれない。

「――ごめん」

頭に置かれた手を両手で握って下ろす。
リチウムはそれには何も取り合わず、掴まれた手――次いで、リタルの右腕に視点を移すと一言呟いた。

「軽く、なっちまったな……」
「……うん」

自分も視線を落として、笑む。

”母”を元の姿に戻したくて。
生き返らせてあげたくて、自分はずっとその方法を探していた。
リチウムについてストーンハントを学んだのだって……自分を引き取ってくれたこの男の手助けをしたかったのも勿論あるが……”母”を元に戻したいが為なんらかの手がかりを掴みたいという、目的の為だ。
何も告げなかったのに、リチウムはそれを解っていたようだった。
知っていて、コイツは何も言わなかった。

「でもまぁ。
そのクローンみたいなおまえが、ちゃんとここに居る訳だし」
見ていないようで、ちゃんと見てくれていたりする。
……この男は、そういう奴だ。
「……なにそれ。慰めてんの？」
滲んだ涙を隠そうとそっぽを向く。
「まさか」
リチウムが身を起こした。
ソファがぎしっと音を立てる。包まれるような大きな気配に振り返ると。
「必要ないだろ。おまえには」
リチウムは自分を見下ろして、嬉しそうに笑っていた。
浮かべた笑みは、どこまでも大人っぽくて。それでいて、無邪気で。
そんなんでドキドキしている自分は、なんて。
小さいんだろうと思った。
「……早く大人になってやる」
そんでもって。見返してやるんだ。
早くお母さんみたいな魅力的な女になって。
コイツにも、ドキドキさせてやるんだ。

新たに胸に秘めた目標を、呟きにこめて吐き捨てた。

「なんか言ったか？」

「……なんにも。

それよか、リチウム。トランは？」

「さぁ。けどアイツ、ここンところ仕事行ってねぇみてぇだし。どっかその辺にいるんじゃね？　……朝飯買いに行ったとか」

「クレープも部屋にいなかったのよ。

……あんた、どうやら完全回復したみたいだし。そろそろ作戦練ろうかと思ってたんだけど……」

「アタシならここにいるわよ」

声に二人が振り返ると、一体いつからそこに居たのか。細腕を組んだクレープが仁王立ちしていた。

こんな早朝から外に出ていたのかニット帽、ダウンジャケット、手袋、耳宛て等、きっちり防寒装備を施した彼女の鼻の頭が赤い。

後ろにはビニール袋を二つ両手に下げた、いつものコート姿のトランが居る。

「リタル。もういいのか？」

歩み寄り、リタルの顔を心配げな黒の瞳が覗き込む。

「ええ。心配かけて……」

「いいよ。っていうか、心配くらい、かけさせてくれ」

正面で、トランは優しく笑んだ。

……なんとなく気恥ずかしくて、俯く。

と、男が持つビニール袋の口から覗く白い頭に目がついた。

「……ゆき、だるま……？」
「あぁ。３日前からずっと雪が降ってただろ。外今すっげー積もってんだ。
だから、な……」

袋の１つを掲げると今度は照れ臭そうにはにかんで、トランはリビングを出ていった。キッチンに向かったようだ。
……あれは、あのコへのプレゼントなんだな。きっと。
トランも意外と気がきくじゃないか。あのコすごい喜びそう……、

「部屋に２日間篭りっぱなしだったから。てっきり今日もメソメソしてるんじゃないかって思ってた。もしそうなら、今日こそは誰に止められようと問答無用でアンタを叩き起こしに行ってたトコだったわよ」

皮肉たっぷりのアルトがトランの背を見送っていたリタルに届く。
「案外元気そーね」
その口ぶりからすると、クレープは昨日も一昨日も私室に乱入しようとしてトランにでも止められたのだろう。
視点を手前に移すと、防寒装備を脱いだクレープが金の髪を上で１つに纏めつつ、少女にジト目を向けていた。
しかし、心做しか……その瞳の奥に温かさを感じる。

「ご心配アリガトウ。平気よ。それよか……」
「――聞きたい事があンでしょ？　アタシに」

遮るように発せられた声。
一転して厳しい表情に、リタルが目を見張る。
決然とした赤い瞳は、リタルを真っ直ぐに見ていた。

「アタシもね。そろそろ限界かと思ってたの。
アンタ達に打ち明ける前に、トピア(あっち)に先手取られちゃった、ってトコなんだけど」
「限界？」
「こっちの話。
アンタが篭ってたこの2日間。男ドモから色々質問責めにあってたンだけど、アンタが出てくるまで待ってもらった。揃ってからの方が手っ取り早いし。何よりアンタ達には全員、知る権利がある」

クレープの声に背後に目をやる。ソファに凭れたリチウムがむすっとした表情でクレープを見上げていた。
成程。どうやら男どもはあたしを話に――グレープ奪還作戦から外そうとしていたとみえる。
……冗談じゃない。

「……なら話は早いわ。いい加減聞かせてもらおうじゃない。あたしたちと出会う前のあんたとグレープの話。そして」

視点をゆっくり戻すと、腰に両手をあて踏ん反りがえる。

「あんた達が何者かって話よ。
グレープの正体はさすがに想像つくけど。そもそも『巨石』ってのは一体何なわけ？
あんたが見せたあの何でもあり、な反則力(わざ)は一体どういうカラクリだったの？」

見上げたクレープの顔は……僅かに眉根を寄せ、なにやら思案しているようだった。

「話してもいいケド……それより、手っ取り早い方法がある」

「てっとり早い方法って？」
「『百聞は一見にしかず』……ってトコ」
「……？」
「時間もそんなに残ってないみたいだしね。見せてあげるわよ」
「見せるって……何をだ？」

背後で上がる困惑の声――コートを脱ぎつつ戻ってきたトランに振り返ったクレープは、

「監視者サマのお力の片鱗を、よ」

小悪魔のような微笑みを浮かべ彼を見た。

「人界に伝わる世界（フロース）の歴史を前に一度、とある人物に教えてもらった事がある。それによると五千年前に種族間条約が結ばれた後、総ての『巨石』は眠りについてしまってるデショ？
事実は違うのよ」
「違うって」
「今話せるのはこれだけ。さて、そうと決まれば早速行くとしようじゃない。そろそろ腰の重たい天界の爺ちゃん達も動いてきそうだし。街を出歩くのは危険ね。……リタル、アンタに転位してもらうわ」
「ってか。行くってどこへ」
「決まってんデショ」

クレープは振り返った。
凛然とした赤い瞳で困惑しきった一同の眼差しを受け止めると、優美に笑む。

「『世界で一番安全な場所』――アイオンへ、よ。

そこで見せてあげる。
アンタたちがこれまで『人界の巨石』だと思っていたモノの正体と。
真実（フロース）を。可能な限り」

3

「……」

目を見開くと、そこには闇が広がっていた。
闇以外の何物もない。
闇の真ん中に、グレーの……石で出来た台座がポツンとあり、そこに自分は寝かされていた。
身を起こすと上に掛けられていた白く大きな布がずり落ちる。
彼女は裸体だった。

「……ここは」

胸元まで引き上げて、生地に負けぬほど白い透明感のある肌を隠した蒼い髪の少女は、2，3瞬いた。
広がる真闇は、どこか穏やかで。
懐かしさを覚える。

「目覚めたか」

いつの間にか。正面に少女が立っていた。
地まで真っ直ぐに伸びた紫色の艶やかな髪。一際濃い紫のゆったりしたローブを着込んでおり、裾――大きく裂かれた前方からは白い脚線美がすらりと伸びていた。
赤い瞳には混沌が広がっている。しかし、この深い闇の中でソレは吸い込まれてしまいそうな程印象的な輝きを秘めていた。

「……」

目の前の少女は、どこかで見た覚えのある容貌だった。
……思い出せない。
記憶は、ぼやけてとても曖昧だった。
それでも僅かに思い浮かべる事の出来る人物、景色達。それが……ここには無い。何一つも。それが妙に、心許無い。
自身と同じ顔をした少女はさらさらとした髪を地に擦りながら、蒼い髪の少女が座る台座まで歩み寄った。

「……あの、ここは……」
「ここは、魔界の深部だ」
「……魔界？」
「ああ。直ぐそこに、昔『無』が広がっていた空間がある。おまえには馴染み深かろう」
「……あの」

紫の少女の言葉に首を傾げつつも、蒼の髪の少女は口を開いた。

「リチウムさんたちは……」

鈴声に、しかし紫の髪の少女は僅かに眉を潜めた。

「りち、うむ？」
「はい。リチウムさんです」
「……なんだ、それは」
「……え？」
「そんなモノはいない」

大きな瞳を見開く。

「……そんなはずは……。わたしがお世話になっている人です」

「知らぬ」
即答に、蒼の髪の少女の抱く不安はさらに強大になった。
「では、リタルさんは？」
「……」
「トランさんも……そう、クレープさんも……っ」
「グレープ」
遮るように、紫の少女はその名を呼んだ。
弾かれたように彼女を見上げるグレープ。
「ならば答えてみろ。
その者達とは、どうやって知り合ったのだ」
「……それは……、」
すぐさま語ろうと、グレープは口を開いた。
そう、彼らと……リチウムと出会ったのは……。
――どれぐらい、前だったか。
「……っ」
記憶を巡らせる。一瞬にして、絶望が脳裏を真っ黒に染め上げた。
思い出せない。
出会った覚えが――ない。
「……」
「では。その者達とはどういう間柄だったのだ」

少女に問われ、今度こそ答えようと、必死に記憶を起こす。

微かに、
微かに、余韻が過ぎる。
だが、それだけだった。

「……」

何故だろう。
確かに頭の中に何かがある。
だが、輪郭がぼやけてしまって掴めない。奥から引きずり出せない。
しかもその”何か”に映る自分に……覚えが無い。
それは『記憶』で、体験している事のはずなのに。
実感が伴わないのだ。

まるで――

「夢でも見ていたのか……」
「……！」

グレープは大きく身体を震わせると、呆然と紫の髪の少女を見た。
紫の髪の少女は、相変わらず無表情だった。

「私が知っている事を話してやろう。
おまえはグレープ。
私の片割れだ。
おまえは、ある事件の後。ずっとここで眠りについていた」
「……。ずっと……？」
「そうだ。４年の間、おまえはここで眠り続けていた。

そして、ようやく。今目覚めた」
「……」
ぼうっとする頭に、彼女の声が入っていかない。
上手く、言葉を理解する事が出来ない。
俯いて、頭の中で少女の言葉を反復させる。
ずっと、ここに居た……？
やがて、グレープは闇を振り返った。
何も無い。
だが、確かに。どこか懐かしさを覚える――
「大方。おまえは夢でも見ていたのだろう」
「そんな……はずは……」
呆然と呟きながら、それでもグレープがかぶりを振った。
「ないです…。
わたしは、グノーシスの教会で……シスター、を、していて……」
だって掴み所が無くても、実感が湧かなくても。こんなに鮮やかなのに。
「毎日。楽しくて……それがとても嬉しくて」
決して夢なんかじゃない。
居たのだ。確かに。彼らは。ずっと。

「……」

いつか。
手を握った。
骨張った……とても大きな手。
何よりもその温もりだけははっきりと、今でも確かに覚えている。

霞む輪郭。
自分の周りに、
自分の側に居て……笑って、くれて――

「グレープ」

頭を抱えて項垂れてしまったグレープに、紫の少女は声をかける。
いやいやをするように首を振った。
声を拒否するように――熱病に浮かされたようにグレープは叫び続ける。

「――そんな、そんなはず、ないです……っ　だって、リチウムさんは……リチウムさんが……っ」
「グレープ」

背後から響いてきた――透明感のある男の声に、ハッとグレープはそちらを振り返った。

「……」

そこに――果たして男は居た。
腰まである長髪。
均整の取れた顔立ち。

切れ長の瞳。
「グレープ。目覚められたのですね」
男は歩み寄ると、
笑顔を浮かべて、グレープの手を握った。
「……」
骨張った、大きな……男の人の手。
……あたたかい。
「……」
「おまえは、夢と現実を履き違えてはいないか？」
呆然と男の顔を見上げるグレープの背に、紫の少女は告げた。
「おまえが、人界で人間として暮らしていた、などと言う記憶があるのだとすれば。
それは総て夢なのだ。
おまえは我が分身。それ以上でもそれ以外でも。まして、人間だという事もない。
おまえが持っている記憶。それらは総て。夢の中の出来事だ。
故にあやふやなのだ」
「……」
夢……。
……ゼンブ、ユメ……？

あの不安も？
あのあざやかな世界も？
あの。
強い、青の光も……

「トピア様。無理もありません。長い間、彼女は眠り続けていたのですから……ねぇ。グレープ」
隣に腰掛け、俯いたグレープの細い肩を抱き寄せて。男は優しく声をかけた。
大きな手はただ優しくあり、まるで、子どもをあやすように背を撫でる。
声に見上げたグレープは、男の顔をもう一度視界に入れる。

「……」
その整った顔立ちには、確かに見覚えがある。
愛しげに自分を見つめる、切れ長の瞳から覗く……金……。

「……」
「……もう一度言う。
グレープ。おまえは、人間などではない。
『人界の監視者』だ。
もうずっと、この男と――ファーレンと長い時を過ごしていたではないか」
「……」

「おまえが持っている人間としての記憶。それは、総て夢だ。
故に、あやふやなのだ」

「……ゆめ……」

力なく呟くと、グレープは再び俯いてしまった。
そんな彼女に、優しく接するファーレン。

彼女達を見下ろすトピアの瞳には相変わらず混沌が広がっていた。
だが、そこに。
一筋の光が灯っていた事に、しかしグレープは気づかなかった。

［終］

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7768d/

碧月の雫（ノクターン）[乾クエ3]

2011年1月14日02時35分発行